

書評

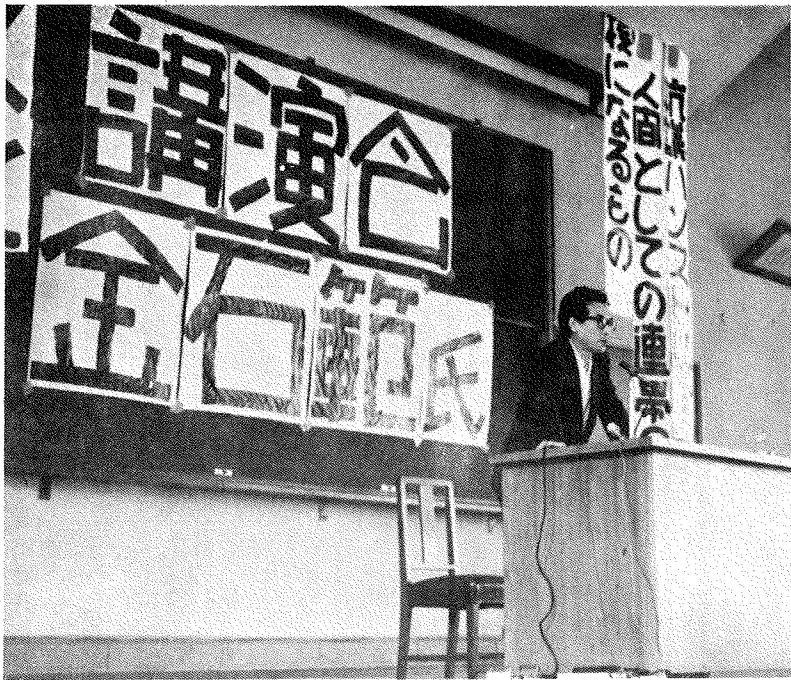
第 39 号

1975. 1

講演会記録 日本人と朝鮮人との連帯について / 金石範

朝鮮情勢の視点～狙撃事件と民主化闘争 / 金貞文 金石範あるいは

濟州島 / 末吉栄三 金石範氏の二、三の作品にふれて / 小川悟 他



書評編集委員会

479⑩

講演会記録

日本人と朝鮮人との連帯について

金石範

6

- 人間としての連帯の核になるものは何か
- 抗議ハンスト以後のわれわれの課題は何か

朝鮮情勢の視点

金貞文

33

- 狙撃事件と民主化闘争

金石範あるいは済州島 (上)

末吉栄三

41

- 日本語で書くことの意味

金石範氏の二、三の作品にふれて

小川悟

47

- 朝鮮を実感するために

■書評

追放の詩人とその官能的宗教

渡辺幸博

ピエール・エマニュエル著 / 山村嘉己訳 『ボードレール』

公理的立場からの自然数定義

山田 穰

涌永昌吉著 『数の体系』

■わたしの研究ノートから

差別の空間構造 (最終回)

末吉栄三

●「琉海ビル」建設現場大陥没事故

ランボー研究余滴 (I)

山村嘉己

●詩の翻訳について

日中文化関係史の一面 (XVI)

増田 渉

●近世の中国と日本

●お知らせ

94

●編集後記

95

84

76

67

61

55

419③

■羅針盤

金石範講演会の意義と今後の課題

書評編集委員会では、去る九月十七日、在日朝鮮人作家・金石範氏を招いて、『日本人と朝鮮人との連帯について——人間としての連帯の核になるもの・抗議ハンスト以後のわれわれの課題』というテーマの下に講演会を行いました。

今回、金石範氏の御好意によってその時の記録を掲載することができましたので、この機会に再度この講演会の意義を確認し、金石範氏がわれわれに提起された課題を明確に対象化し、朝鮮人民との連帯へ向けた第一歩を、われわれの文化・思想運動の中に刻みつけておきたいと思ひます。

一回われわれがこの講演会を開催した理由は、次のようにまとめることができ

る。

第一に、現在朝鮮、とりわけ南朝鮮をめぐる政治情勢が日本において注目を集め、七三年八月の金大中氏拉致事件、詩人・金芝河氏や早川・太刀川両日本人が連座させられた「民青学連」事件、八月一五日の光復節式典会場における、在日

「韓国人」青年・文世光による朴大統領狙撃事件などが様々な形で論議を呼び起し、とりわけその過程で、ますます国際的孤立と政治的危機を深化させ、南朝鮮人民に対する弾圧を強化している朴独裁政権に対する非難の声が、その論議の主流を占めてきていた。

しかしながら一部の真摯な考察は別として、このような「非難の声」を一般的な社会意識として捉えてみるならば、それは日本、いやわれわれ日本人の朝鮮に対する侵略と殺戮・植民地支配と（同化）表面的な「皇民化」と内実における民族差別・排外主義の歴史を一切無視した上で、その歴史が作り出した朝鮮に対する根柢なき差別意識や大國主義的イデオロギーに根ざしているとも思える危険な「声」が数多く見られる。金大中事件に対する「主権侵害」という一方的決めつけは、このような危険な民族排外主義の現われといえる。そしてとりわけ「韓国」における「人権無視の非人道的弾圧」を非難しているわれわれ日本人自身が、この「弾圧」と無縁ではありえないという事実もまた考慮されていなかったのである。

第二にわれわれは、一九一〇年の「日

韓併合」以降の植民地支配によって生活手段を奪われて渡日し、あるいは強制連行によって日本で苛酷な強制労働に就かされ、日本人による虐殺と同化支配と社会的な抑圧構造の中を生き抜いてきた六〇万在日朝鮮人に対して、その倫理的責任を回避したまま、戦後も一貫して、へ入管体制に象徴される民族排外主義・分断攻撃を続け、常にその生活と人間としての権利を無視し、差別と民族的蔑視によって常に抑圧しつづけているのである。

このような事実を踏まえるならば、われわれの朴政権に対する非難は、過去の日本帝國主義による朝鮮植民地支配と朝鮮民族に対するへ同化攻撃に対する民族的責任の認識と、そして一九六五年以降の南朝鮮に対する日本帝國主義の経済侵略を阻止できずにいるわれわれ日本人自身の墮落と腐敗に対する根柢的な反省を踏まえていなければならない。

このような反省を経ていない朴政権批判は、朴政権の背後にある日本帝國主義の侵略政策を見抜き、その闘いを反日・反朴の闘いと位置づけている南朝鮮人民にとって何の意味をも持ち得ないであろう。

そして、国内においても在日朝鮮人民を不当に差別し抑圧し続けている限り、われわれは、朴政権の人民弾圧を非難する資格すら有し得ないのである。

— 2 —

かつて日本帝国主義は朝鮮人民を植民地支配し、収奪と殺戮の限りを尽し、また、様々な施策を通じて朝鮮民族そのものを歴史のなから抹殺しようとしたのであり、また関東大震災時の朝鮮人民に対する大量虐殺に展型的に現われているように、在日朝鮮人民に対して常に差別的・非人道的な処遇を施してきたのである。

このような侵略と殺戮の歴史は、一九四五年の敗戦においても終止符が打たれることなく、またその民族排外主義の歴史は日本人自身の民族的原罪として一般化・大衆化されえなかつたのである。

その後、日本支配階級は自らをアメリカ帝国主義の同盟者として強引に位置付け、その侵略戦争の基地を提供することによって「復興」し、そして現在、「経済援助」の美名の下に商品市場の暴力的支配と、原料資源および労働力の強制供出によってアジア人民への再侵略を開始したのである。そしてわれわれは、その

侵略を阻止しえないことにおいて再度侵略者としてアジア人民の前に立ち現われているのである。

とりわけ朝鮮に対しては、一九六五年の「日韓会談」妥結によってその三六六年の植民地支配を合法化し、朴独裁政権の支援を基盤として資本の大量進出を図り、南朝鮮を実質的に植民地化している。そしてまた「入管令」は、われわれがいかに批判しようとも、現実には日常的に六〇万在日朝鮮人民の生活を恒常的な監視による抑圧下に置き、強制送還の恫喝で包囲しているのである。

この事實は、現在なおわれわれ日本人が朝鮮人民に対する加害者として存在していることを明らかに示している。

われわれは今回、この事實を踏まえた上で、朝鮮人民との連帯をどのようになしうるかを考えてみた。

— 3 —

金石範氏は講演の中で、日本人と朝鮮人との連帯を考えるための「方法意識」を定式化して、加害者（日本人）と被害者（朝鮮人）とが相互に自己否定によって、それぞれの加害・被害の立場を超越したところに真に平等な連帯を構築すると述べられた。その場合被害者は、加害

者とその加害性と贖罪意識に目覚めさせるため恒常的な告発と糾弾を繰返し、その中で被害者自らの側にある倫理的優位性に基づいて自己の被害者としての立場を超えていくのである。金石範氏は被害者の側における自己否定をこのように語られた。そして、われわれ加害者も自己否定によって、被害者との真の連帯を築きうると述べられた。

しかし、われわれにとって自己を超えることは容易ではないであろう。

書評編集委員会もまた、自己否定が具体的に何であり、そしてそれがどのような形にしてなされるのかについて確たる結論を述べることはできない。しかし、われわれは過去の朝鮮人民をはじめとするアジア人民に対する侵略と民族排外主義の歴史を、われわれの民族的責任として執拗に意識し、そしてなによりも現在の日本帝国主義のアジア人民に対する侵略に対する闘いに取り組み、アジア人民の闘いに対する理解を深化させていく中で一つの連帯への道を見出しうるであろう。書評編集委員会は文化・思想運動を通じて、このような連帯への道を模索していきたいと思えます。

■講演会記録

日本人と朝鮮人との連帯について



金^{キム}
石^{ソク}
範^{ポム}

- 人間としての連帯の核になるものは何か
- 抗議ハンスト以後のわれわれの課題は何か

日帝から解放されても

今日のテーマは「日本人と朝鮮人との連帯」ということなんですが、国際連帯——中国と日本の連帯もあればいろいろあるのになぜとくに朝鮮と日本の連帯ということが強調されるといおうか、問題になるのか。強調されるわりにはなかなか連帯がうまく、スムーズにいかないというところもあるわけですけれども、いずれにしても問題になる。

中国と日本の場合でもそうですけれども、それ以上に朝鮮と日本の——韓国でもいいんですが——関係が非常に問題になることが多いわけです。

それは現実には日本に六〇万といわれている在日朝鮮人が住んでいるという、そういうこともからみんですが、一つは日本と朝鮮との歴史的な関係——一九四五年まで過去三六年間、日本帝国主義が朝鮮を支配下に置いたという事情があります。しかし、実際の朝鮮に対する侵略の意図は、日本政府は明治のはじめから

ておりまして、日清戦争、中国との戦争そのものが一つの朝鮮を侵略する目的のもとなされたものであります。だから三六年と申しますけれども、実質的にその前から朝鮮に対する、日本帝国主義の侵略は始まっているわけです。

そして一九四五年に日本が破れて朝鮮が解放され、それで朝鮮が独立を遂げるわけですが、独立して今日まですでに三〇年近くになっております。しかし、一九四五年のその時点では、まさか朝鮮が今日まで二つに割れたまま、国土が分断され、単一民族が二つに引き裂かれた状態のまま続くとは誰も考えておりませんでした。それがいつのまにか三〇年になるうとしております。

そして一九四五年当時で、在日朝鮮人は二一〇万から二三〇万いたといわれております。その中には一九三九年に始まった強制連行―朝鮮から農民とか、そういう朝鮮人を無理やり引っ張ってきて、九州とか北海道の炭鉱へ入れて強制労働をさせます。炭鉱だけではないわけですから、

ども……そういう人たちが約一〇〇万人といわれておりますから、日本が敗戦する時点ですでに二〇〇万人は越えていたわけです。

そして戦争が済んでほとんどの朝鮮人は帰って、何十万かの朝鮮人が残ったわけです。その残った朝鮮人たちもいづれ祖国へ帰るつもりでいたわけです。ただ残った朝鮮人がすぐ祖国に帰れなかったのは、日帝時代に自分のふるさととか国土を捨てて―北朝鮮の場合は満州とかシベリアの方へ流れて行き、南朝鮮の場合はいたい日本へ流れて行くわけです―その場合ほとんどがふるさとは財産なんか、たとえば家屋のあるものは家屋を売りはらって来るので、生活手段とか生活するにたる土台というものを全然もっていないかったわけです。

日本へやって来て住みついた在日朝鮮人のすべてがそうではなかったにしても、そういう人が非常に多かった。

だから戦争が済んで祖国が独立したということとは非常にうれしい。帝国主義の

支配、束縛から解放されたわけですからすぐにも飛んで帰りたいんだが、帰ったところで生活の手段がない。それでもう少し落ち着いてから帰ろうと思ったわけなんです。

ところがせめて二、三年のうちにも帰ろうと思っていた在日朝鮮人たちが結局祖国へ帰れないような状況がおこってきます。それは三八度線まで二つに途切れたまま、なかなかもとへ戻らない。しかも、南朝鮮を支配したアメリカ帝国主義―といっていいわけですが―日本の代わりに南にやって来たアメリカは、結局朝鮮を解放するためにやって来たんじゃない、日本のかわりに朝鮮を新しい植民地にするためにやって来たということがはっきりしてくる。

やがて南朝鮮における民衆の祖国統一の運動とか、民主化のための闘いを弾圧しはじめるが、その手先が李承晩であります。そして非常に血なまぐさい事件が連発する。

たとえば、一九四八年四月三日に済州

島の民衆が蜂起します。これは俗に済州島四・三事件といわれております。一言でいえば、同じ年の八月一五日に、「大韓民国」がでっち上げられ、李承晩を大統領にした政府ができるわけです。「大韓民国」ができるということは朝鮮の二つに分断された状態を固定化することになったわけです。それで南朝鮮だけの単独政府、その単独政府をつくるための単独選挙に反対する運動というのが、南朝鮮全域でおこります。その一環として、一九四八年四月三日南朝鮮の済州島でパルチザンの武装蜂起がおこるわけです。

李承晩とアメリカ軍に反対して立ち上がった島民は、当時の人口約二十数万人のうち約八万人が一、二年のあいだに虐殺される。つまり三人に一人ぐらいの島民がアメリカ帝国主義と、その手先の李承晩の軍隊によって虐殺されるという事態が起ったわけです。

これは済州島だけの問題ではなく、南朝鮮全域にわたって朝鮮の民衆の闘いに對してアメリカの手先はこのような弾圧

を加えました。だから、ベトナム戦争におけるソソミ事件などがあるわけですが、近い昔に南朝鮮——とくに南朝鮮の中でも世界の世論から閉鎖された地域である済州島です。ね——ああいうところではソソミ事件以上の非常に残酷なことが、戦後世界民主主義のチャンピオンといわれたアメリカの手によってなされたという歴史的な事実があるわけです。これはほとんど一般には知らされていないわけですが、注目すべきことでしょう。

せっかく日本から独立して解放はされたけれども、南朝鮮には非常に暗い、日帝時代とあまり変わらないような状態が再現された。

それで、日本に残った在日朝鮮人たちは帰るに帰れなくなる。それどころか一たん解放されて祖国へ帰って行った在日朝鮮人たちが、再び日本へ逆戻りするとうような傾向すら生まれてくるわけです。それで一九四五年、朝鮮が解放された時点では考えられなかった、在日朝鮮

人が日本に住み続けるという事態がおこります。

あの時点では一〇年も二〇年も日本でつづけて生活しようと考えた人はほとんどおらなかつたでしょう。もちろん日本人になって日本人として生活しようと思つた人はともかくとして、そうでない人は二、三年のうちには統一できるんじゃないだろうかと考え、二、三年はむずかしいがあと四、五年—五、六年もすれば……というふうな期待と、そしてその目的のために日本で生活しながらも闘った人がたくさんいるわけです。それが非常にむずかしくて今日のような状態になっております。

なぜ三八度線が南北朝鮮を分断する線になったか。それは一九四五年当時の日本軍の配置の状態が原因になっております。太平洋戦争の末期、三八度線より北は関東軍がソ連に對する防衛分担をし、三八度線より南はアメリカの上陸に備えて第一四方面軍が南朝鮮の防衛を担当していた。やがて戦争が終わって日本が無

条件降伏をする。そして日本軍の武装解除が行われるわけですが、そのとき第一四方面軍をアメリカが担当し、関東軍をソ連が担当します。その日本軍の配置の境界線が三八度線だったわけです。

朝鮮人民のだれも統一を願っていない人はいないわけです。しかし、朝鮮民族みずからの意志以外のなにかが——それを朝鮮では外勢といいますが、戦後をみても朝鮮民族がみずから分裂を欲したわけじゃなくて、外国勢力の干渉によって分裂の状態が続いています。

とくに最近、一九六五年のいわゆる日韓会談以後、日本が公然とこの分裂した状態を固定化するための役割をアメリカに代わってしている。日帝時代も朝鮮に対する植民地支配を続けたわけですが、最近になってそのような傾向を日本の支配層は露骨に示している。そして片一方では、その日本に在日朝鮮人が住んでいるわけです。

そのなかにはすでに戦後三〇年の間に形成された在日朝鮮人の新しい層である

二世、三世——皆さんと同じ若い朝鮮青年がたくさんいて、それが六〇万人の約八割を占めるようになってしまった。

そういうこともあって、在日朝鮮人の問題は、日本の国内における一つの民族問題としての非常にむずかしい側面をかかえている点がある。

加害者・日本人と被害者・朝鮮人

日本と朝鮮の関係というのは、中国との関係ともちよつと違うわけでして、日本国内に現実には、朝鮮に対する帝国主義支配の非常にいびつな形の所産といましようか、それが在日朝鮮人の存在である。しかも在日朝鮮人の問題というのは、差別行為というのは別に朝鮮人だけに対するものではなくて、日本人同士部落とか沖縄の問題もあるわけだが——在日朝鮮人の場合はそれに民族的な側面があるわけでして、被差別者同士——たとえば部落民と朝鮮人がいると、差別されている立場は同じだが、被差別者としての連帯

を感じながらも朝鮮に対してなにか民族的な蔑視をするということがいまでもありうる。

在日朝鮮人が解放されるというのは、ラジカルないい方をしますと、日本の民主主義に対する弾圧はまず在日朝鮮人からはじまるということがありますので、日本の民主主義の定着と、日本の民衆そのものの解放は在日朝鮮人の解放をヌキにしてありえないといえます。だから、在日朝鮮人の問題というのは日本の政治の動き方をはかる一つのバロメーターになる——そういう可能性がある。

たとえば文世光の朴正熙狙撃事件があったわけですが、朴正熙はこれを北朝鮮と朝鮮総連に結びつけて、日本政府に朝鮮総連を規制しろと追っています。

日本でも日本政府自身は朝鮮総連をほんとうは規制したい。朝鮮総連だけを目的にするのではないわけで、朝鮮総連を規制することによってやがて日本の民主勢力を規制するという伏線があるわけです。

そのような狡猾な形で日本の民主勢力をじわりじわりと締めつけていくというのが支配層のやり方です。ぼくらは単純に物事を考えて近視眼的にしか見えないですが、権力者というのは一〇年、二〇年、何十年単位で物事を見ているわけです。

そういう意味では支配層というのは考え方が綿密で準備万端整えてやるものです。それをするだけの権力がありますから、つまり力と余裕があるわけです。しかし権力もなんにもない民衆というものはそれに立ち向かうことができない。そこで民衆同士の連帯とか団結ということがいわれるわけです。

日本に再びファシズムが生まれることのないようにするために在日朝鮮人問題は非常に深い関連をもっているんじゃないだろうか。在日朝鮮人問題が起って弾圧が行われたりするときには、日本の民主勢力に対するなにか締めつけとかそういうものが、支配層によってまくろまれているということがいえると思いま

す。

ところで、朝鮮と日本の歴史的な関係というのは、一般に加害―被害ということはでいいあらわされています。

日本が加害者で朝鮮人は被害者である。実際過去三六年間、それ以前からの日本の朝鮮に対する侵略、植民地化政策など加害と被害の関係は歴史的な事実としてあるわけです。ただ当時、一九四五年の日本の敗戦まではそういうことを口に出していることはできなかった。関東大震災における朝鮮人虐殺の資料なんかも戦時中は人の目にふれることはなかったわけです。

戦後、朝鮮と日本の歴史的な関係の検証の作業がずつと行われまし、たとえば関東大震災における虐殺の事実などがあかろみに出てくる。戦後、そういうような作業がずつとなされてきているわけです。

昔は朝鮮本土の学校でも朝鮮人に対して朝鮮の歴史を教えなかった。朝鮮の歴史を教えれば民族的な自覚をもって反日

的になると思ったんでしょうけれども、朝鮮の歴史は一切教えなかった。そして朝鮮人に対して天照大神後の日本の皇国史、そういう神懸（かまかり）的な歴史を教える。朝鮮語は一切廃止する。朝鮮文学もしまいには朝鮮語の文学がなくなってくる状態になっているわけです。そういうようなことをやってきたわけですが、日本と朝鮮の関係が科学的な実証的な研究と相まって、明るみに出てくるのは戦後です。そういう作業が進むにつれて、日本と朝鮮の関係というのは、日本は加害者で朝鮮は被害者であった―このような図式にくくられるようになったわけです。

そうすると日本と朝鮮の連帯を考える場合、はたして加害者と被害者の間にどのような連帯をすることができるか。この加害―被害というのは民族関係における加害―被害なんです。

『階級連帯論』の誤謬

戦後いまままでいろいろ朝鮮と日本の連

帯ということがなん回も繰返し繰返しいわれてきております。たとえば階級的な連帯です。過去に確かに日本帝国主義は朝鮮民族を支配したが、日本帝国主義の犠牲になった日本人もたくさんいる。日本の労働者階級と朝鮮の労働者階級は手をつないで日本帝国主義に対して闘った。その意味では日朝の連帯というものは歴史に厳然としてある。だから我々はいまでも階級的な立場で日本と朝鮮の連帯は成り立ち得るんだ。そのようなことをいう日本の学者もいます。たしかにそういう事実があるわけで私はそれを否定するわけではないんです。

しかし日本人がいうところの「階級連帯論」というのは、なにか人間的な痛み心がちょっとどこか抜け落ちていようないやうな感じ—非常に図式的で機械的な感じがする。やはり朝鮮と日本との関係においては、単に階級的な問題だけでは解決できない民族的な問題があるわけです。だから同じ差別であっても部落の問題と在日朝鮮人の問題とはここで根本的な違い

が出てくる。そういう意味で部落民と在日朝鮮人の間にも一つの矛盾がおこりうる要素をもっているわけです。だから実際過去において、日本の帝国主義が朝鮮を侵略して支配したわけだが、歴史的にみた場合、日本の国家権力の下に日本人が動いていたわけです。もちろん個々の人間がすべて朝鮮に対して加害的な立場に立ったわけじゃなくて、それこそ非常に犠牲的に朝鮮人のためにやった人がたくさんいるわけです。一概にはいえないが、一応図式としてくぐる場合は、朝鮮と日本の関係というのは加害者—被害者というものになる。実際一般にそういうようにいわれているわけです。そして加害者である日本人の側での罪の意識とか、贖罪意識というものが出てくる。日本帝国主義は朝鮮に対して非常にいことをしてやったんだという人もいる世の中のことですから、このような贖罪意識や、それを行為にあらわそうとする姿勢は日本の良心的な人々のあいだに出て

くるわけです。

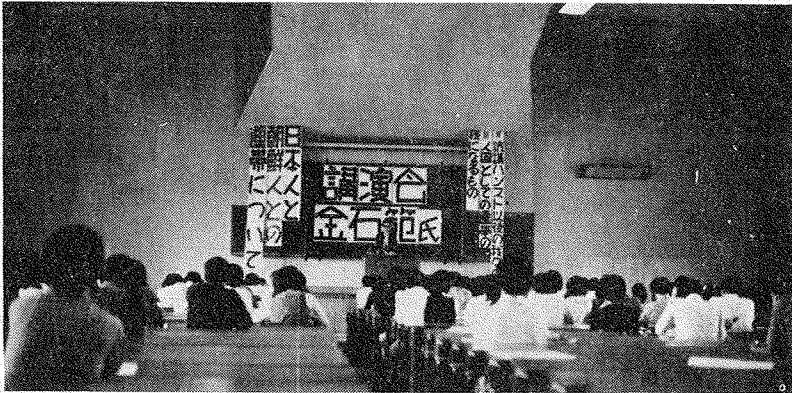
これは一つの同情という形であらわれます。昔だって同情はあったわけですが、昔の同情はちょっと違うと思うんです。昔の同情は非常に朝鮮人はかわいそうだ、在日朝鮮人は家もなく、食う物もなく、非常に気の毒だ、パンの一つでもめぐんでやろうかし。それも同情なんです、日帝時代の同情はまだ贖罪意識までいていない。戦後の同情というのは罪の意識に支えられたものとして前進しているわけです。

確かに歴史的な事実として日本帝国主義はひどいことをやりました。たとえば「創氏改名」といって、朝鮮人の苗字—私は金キムなんです—そういうのを全部戸籍上から抹殺して、日本式の名前に強制的にかえさす—そういうことは世界に例がないわけです。そのようなことを文化的にも政治的にもいろいろやってきたわけなんです。

戦後一応解放されて、差別とか帝国主義支配ということとは公然と、おもてへ出

していうことができるようになった。昔はそんなことはいえないわけです。口先だけでも朝鮮独立万歳と叫べばすぐに刑務所にぶち込むわけです。その点、戦後というのは開かれた社会だと思いますが、被害者側である朝鮮人は、いままでも日本は悪いことをしてきたというわけで、そこで告発ということがおこってきます。被害者は加害者に対して告発するわけです。

部落解放闘争では糾弾するということがよくあります。糾弾という一つの闘いの方法と告発の方法とは相通ずるところがあるわけです。被害者の朝鮮人側が加害者に対して糾弾する→告発すると、それをうけて立つ側の日本人は告発されることにおいて、やはりいままで意識していなかったこと、考えも及ばなかった世界に対して目が開けたり、視野が広がったり、罪の意識を自覚することにおいて、いままで考え及ばなかったことに対して、一歩前へ進んでなにかの行動にかりたてられる。こういうようなことがお



こつたのも事実だと思えます。

しかし、この関係が進んでいきますと、告発に対する答えというものは行き詰まる一方なんです。日本人は「おまえ悪いんじゃないか」といわれてもそれに対して返事する方法がないのです。かりに日本帝国主义はいままで悪いことをしてきたと認めることは認めるなりに、それでは罪ほろぼしになんとかやるうじゃないかと、それが精いっぱいなんです。

加害—被害の関係を越える 対等な関係

このような図式でくくられた関係における連帯というのはどうなるのか。平等な関係の連帯はここにはおこり得ないのです。だいたい加害者—被害者という関係は非常に緊張した関係なんです。それが同情という形で均衡をとっているわ

けです。

加害者のほうで被害者に対して非常に誠心誠意同情的なことをする。被害者のほうは、被害者だから当然相手に同情されてあたり前じゃないかというような、被害者意識に安住して満足しているような状態が続きます。

同情というものはだいたい水が高い所から低いところへ流れるみたいなので、同情という関係では平等なものがおおらない。連帯というものは平等な関係でなかったらだめです。たとえば友達同士でもそうです。友達同士でお互いに主張すべきことは主張し、主張するプロセスにおいて引つ込めるべきものは引つ込める。自分の主体というものを前提にしなればここにほんとうの対等な友情というものにはあり得ないでしょう。人間というのは自分が自由であれば相手も自由でなきゃいけない。相手が自由であるためには自分が不自由になる場合がある。自分が不自由になる場合は相手も不自由であるべきであって、お互いに不自由であると

いうことが自由になるという、ひっくり返った関係があるわけです。

片一方が自由で相手は不自由である。こういうような関係には友情というのはあり得ない。だから人に借金した場合、金を貸した人間と金を借りた人間というのは——ここには自由というものが成立しないわけですね。そのように我々の個人間でもそうですが、民族間における連帯というものは、確かに歴史的な事実として日本と朝鮮は加害と、被害の関係にあるんだけど、それを前提にしての連帯というのでは、なにかお互いに新しい連帯というものを築くことができないんじゃないだろうか。それに満足しているならば在日朝鮮人は昔の植民地根性の裏返しにすぎないものになる。そして日本側は同情ということで、加害—被害の関係の均衡を保つわけです。同情することにおいて日本人側は自分の良心の安泰が保障されるわけです。だいたい良心というものは常に危機にさらされないと緊張しないもので、仏さんでない限り俗人

の「良心」の安泰は墮落に通じます。

日本人が朝鮮に加害—被害の関係で被害者に対して適当な同情を示して、おれは朝鮮人に一定のことをしてやっているんだから、これでおれの後ろめたさというのはそうたいしたものでなくなつた……。このようになれば、そこに一つの無意識のうちの日本人側の墮落が起ってくる。朝鮮人は朝鮮人なりで、相手は悪いことをしたんだから朝鮮人に同情するのはあたりまえじゃないかしら、このようになれば、そこから一歩も歩み出すことができない。両方とも腐敗してくるわけです。

ほんとうに日本人と朝鮮人がお互いに自由になるということは精神的に同じ立場、いわば朝鮮人が被害者であつて低いところにあるならば、朝鮮人は高くなるんじゃないといけない。朝鮮人が被害者意識を超えなければいけない。現実には被害者のな立場にあるんだが、立場はそうであつても意識は超えることができるわけです。

別に観念的になれという意味ではないわけですが、まだ明らかにされていない隠された日本と朝鮮の歴史はあるわけですから、そういうことを続けてあげて、告発していくと同時に、告発の段階にとどまらず、告発を超えるもの、被害者意識を超えるものを朝鮮人側のほうでなんとか模索していく必要があるんじゃないか、そうしないと朝鮮人というのは自ら自由になることができないわけです。

ところが朝鮮人と日本人の関係において、朝鮮人が自由になるためには、この場合加害―被害の関係で相手があることです。ですから、日本人も自由にならんといけません。朝鮮人が不自由な場合は日本人が自由になれない。だから日本人が加害者の立場で同情を示して、おれは罪の意識があるんだからこういうことをやればいいんじゃないかと、そういう程度のことでは日本人だってほんとうに自由になれないだろう。日本人自身が加害者の立場から一度自己否定する必要があるんじゃないだろうか。これはどういうものであ

るか、私自身が朝鮮人でありますから軽々しくいえるものではないわけですが、ともかくいままでは在日朝鮮人は告発する立場であった。在日朝鮮人の物書きたちはほとんどそういう立場で、最近まで物を書いてきました。

日本のジャーナリズムもだいたいそういう志向をもっております。日本帝国主義は過去に朝鮮に対して悪いことをしたんだからよくない。そういう記事はたくさん特集なんか出るわけです。しかしそれ以上は日本のジャーナリズムは出ることとできない。というのは日本人の意識に、贖罪意識といおうか、罪の意識をもって朝鮮に償うという程度のところがいっぱい手頃といおうか、せいっぱいというところでしょう。

それ以上朝鮮人が被害者意識をみずから超えて日本人と平等に、この場合意識的に日本人と平等になるわけですから、告発とかそういうことを問題にしなくなる。そうするとそこに日本人の目にはそれが対等なものにみえてくる。おまえは悪いや

つじやないかと告発している場合極端なことをいえばまだ低いところに相手がいるような感じをもつわけです。そこから浮かび上がってくると、日本人は無意識に抵抗を感じる。年配の人はだいたい朝鮮人は日本人より低い者だという無意識の前提があるわけです。だからなんらかの機会に、朝鮮人がなにか自分と同じ所に立っているようなことを発見すると、とまどうような現象がおこってくる。こういうことがいえると思うんです。

在日朝鮮人の主体性

加害―被害を超える朝鮮人側の立場と、それと対応する日本人側の方法、これがどういふものであるか、それを考えてみたいと思います。

その前にいつておきたいのは、私は告発とか、被害者意識というものを否定するんではないです。ここにもし朝鮮人の学生がいっしょやるなら、特に私は強調しておきたいと思います。在日朝鮮人二

世、三世の若い人達は、自分が被害者であるということを目覚し、加害者を告発するというその作業をやらねばならない。告発の精神すら失ってしまったては全然話にならないわけです。

だから、告発は続けるべきであるし、告発を続けること自体が自己の主体性、朝鮮人としての主体性を確認する一つの方法になる。朝鮮人としての主体性をもつことが、人間としての主体性をもつということと同言語なんです、そういう意味で私は告発を否定はしないけれども、ただ、日本と朝鮮の連帯を考える場合に告発するという段階で留っていたのでは、ほんとうの意味で連帯というものはあり得ないんじゃないか。

これをお互いに超える、在日朝鮮人は在日朝鮮人側から超える、超えるということは自己否定するということです、在日朝鮮人は在日朝鮮人なりに自己否定する、日本人側は日本人側なりに超えるのか。そういうことで在日朝鮮人側が

自己否定する場合には、告発するための条件が必要なわけです。

ただ、頭の中で考えて告発を越えることができるわけじゃなくて、告発を越えるためには告発を越えるだけの条件がないといけない。それがなにかと申しますと、在日朝鮮人の主体性、在日朝鮮人が自らの主体性を確立しないと、自分が主体的な存在であるという意識をもたないと、自分を被害者意識から超えさせることはできない。

というのは、在日朝鮮人というのは、ある意味では主体的な存在といえない側面がたたくさんあるわけです。たとえ、皆さんは日本語とか、自分が日本人であることとか、特別に意識しないかも知りません。日本語は空気のようにあたりまえのこととしてあるわけですが、在日朝鮮人の若い世代の場合は、ほとんど自らの民族のことは失っていて、日本語を使っています。日本語はみなさんの民族語です。世界共通のことはまだまだできないわけで、だから当分民族語とい

うのは、困なり、民族なら民族の間で共通に使われる一つの伝達手段だと思えます。昔は朝鮮民族の間で朝鮮語を使うことができずに日本語を強要された、そういうことがあります、アメリカにおける英語というのは、むこうはたくさんの人種がおりますから民族語とはいえないわけです。

しかし、単一民族による国家の場合、日本語なんかは民族語といえると思えます。ところが在日朝鮮人の二世、三世の場合、ことばというのは日本語しかないわけです。

みなさんは日本語を使っているということをおそらく意識しないが、私自身、ここで日本語をしゃべっているのは当然ですが、その反面、厳密なことばでいうと私は朝鮮語による生活をしていなきやいけないわけです。在日朝鮮人の若い人たちの内部を占めていることばというのは日本語で、日本語以外のものはほとんどない。

そうすると、一体、在日朝鮮人とはな

んだのか、はたして在日朝鮮人を主体的な存在といえるかどうか。在日朝鮮人の若い人たちは自分を日本人だともいえることはできないわけです。それじゃおれは朝鮮人か。確かに外人登録の国籍記載欄には韓国とか、朝鮮とか書いてあって、日本の国籍を取得しているわけではないんですから、日本人以外のなにかであります。朝鮮人であるかも知れない。しかし、じっと自分を省みた場合、おれは朝鮮人かどうかさっぱりわからず、一体なに者であるか、日本語はしゃべれるんだが、朝鮮語はさっぱりわからない。皆さんにとって、一般的には日本語とか、そういうことばが空気のような存在である。ところが朝鮮語を知らない在日朝鮮人にとって日本語は空気のような存在であるか。確かに使いやすく、それしか知らない。知らないけれども自分が日本人でないという意識を持ちはじめると、自分の使っている、しかもそれしか使うものがないことは、そのことばと自分の間にすら一つの裂目といおうか、そうい

うことを意識するようになる。しかも片一方で考えると朝鮮語というのは全然わからない。

その場合、その人間の主体性とは一体なんだろうかという問題が起こるわけです。みなさんは日本人であるということ、がすでに保障されていますから、みなさんが主体性を論議する場合には、ある哲学的な命題とか、普遍的な存在の問題とすぐかかわることができるわけです。自分が日本人であるということ強調することが少しも自分の主体性の問題と結びつくことはないと思います。ウルトラナシヨナリストの場合とはかくとして、一般の場合にはみなさんは日本人であるということ前提にして、しかも普通の世界へいけるだけの前提ができあがっているわけです。

在日朝鮮人の場合はそういう前提がない。じゃあ、おのれの主体性なんなのか。ひとこといいますと、自分の中にはいいもの、朝鮮人性でもいい、朝鮮語でもいい、民族的自覚でもいい、ぼくらの年代であれば奪われたものです。奪われたものをもう一回取り戻すということもし奪われたという自覚のない小さな子供たちが段々大きくなってきて青年になると、結局破壊されたあとに彼らは生まれてきているわけです。自分にはいいものを作り出す方法しかないわけです。朝鮮人の二世、三世の場合の悩みというのは主体性を確立する作業が朝鮮人の場合二重になります。

自分がなんとか朝鮮人としての自覚をもつために作業する。その作業が人間的な主体性を確立する作業と同一になっていく。みなさんの場合、日本人としての主体性ということに別に強調しなくても、そういうことを突き詰めて考えなくてもいいわけです。ただ、一般的な存在の問題としてはじめから論ずることができない。人間としての主体性をどのように確立するかというふうな論を立てることができません。在日朝鮮人の場合はそうはいかないわけです。

人間としての主体性を自分が確立しよ

うと思えば、朝鮮人としての主体性をどうしても確立せざるを得ないという二重の操作をせざるを得ないわけです。だから在日朝鮮人が自分の主体性を確立したあと—私は決してナシヨナリズムを主張するわけではないが—日本人が日本人ということを前提にインタナショナルなものを開いていくのと同じように、在日朝鮮人も一応自分にはないものを自分の中に造りあげる—というのは朝鮮人の民族性ですが—、造りあげたものをもう一度否定して広いインターナショナルの世界へ入っていく。

いま在日朝鮮人の場合に自分の中に確固としたものがないわけです。無国籍と同じような状態です。ほんとうのインターナショナルなリズムというのは一つのナシヨナリズムの否定ですから、それを踏まえての話です。在日朝鮮人の場合は、ほんとうのインターナショナルな世界へ入っていくためには、一応自分にはないもの、朝鮮人としての民族性というものを取り戻す必要がある。せっかくなり取り戻したも

のをもう一度自己否定して、民族を超越した世界へ広がっていく必要がある。そしてそれは、ほとんど同時的に行われる必要がある。そういう被害者意識を超越する一つの条件として、在日朝鮮人の主体性という問題をいま申し上げました。

操作、これは在日朝鮮人に比べればある程度たやすくできる条件はあるわけです。私は常日頃、そういうことを考えてきていたわけです。

在日朝鮮人の主体性というのはどういうものであるか。これは歴史的なものがいろいろあるんですが、省略して、一応それを前提にして……

在日朝鮮人は一つの方法を提示しているわけです。日本人はどのようにすれば加害者の立場、単に同情という立場を超え得るものか、加害者のほうで一つの連帯の方法をどのように提示することができるか、加害者はどのようにして自己否定することができるか、そういうことも考えるわけです。

もう一度繰り返し申し上げますと、在日朝鮮人が自らの被害者意識、被害者の立場を超えるためには、その条件として自分の中に朝鮮人としての主体意識をもつ必要がある。その朝鮮人としての主体意識を踏まえながら朝鮮人を超える、民族性を超えるという、そういう操作が必要であるということです。

その一つの展望といましようか、明るいものをみせられたのが、この前東京で金芝河の死刑に抗議するためのハンストをやったわけですが、そのときの経験なんです。その何日間を通して、私はなにか朝鮮と日本の新しい連帯の局面が生まれてきているんじゃないだろうか、単に観念の問題としてだけではなく、なにか実際に起こりつつあるような、そういう感じがしたわけです。

ハンストの体験が切り開いた展望

日本のみなさんはみなさんなりに日本人であると同時に日本人を超えるという

ハンストを通してちょっと感じたこと

を申し上げます。ハンストがあったのは第一次が七月一六日から一九日まで四日間、第二次が七月二七日から三〇日までの四日間あったわけです。

いままで朝鮮問題に対するアピールや運動は、朝鮮人と日本人は別個にしたほうがいいんじゃないかという配慮があったので、一緒に合流しなかったことがあるわけです。しかし、いまはそういう段階ではないんじゃないか、みんな一緒にやろうということで、金芝河らに対する死刑の求刑があったその翌日の一〇日に、「金芝河を助ける会」を、主に日本の文芸学者が集まってつくった。そこへ日本の文芸者たちに誘われて在日朝鮮人の私たちが参加したんです。その時の鶴見俊輔さんの話なんです、少なくとも我々は一カ月ぐらいの展望をみながら仕事をやるんじゃないか、なんとか一カ月ぐらい大丈夫だろうということだった。私もそのように思ったのですが非常に甘かったわけです。九日に死刑の求刑があって、二〇日に「金芝河氏を助ける会」を作ったわけで

すが、求刑から四日目の一三日に死刑の判決があったのですから。

これにはおどろいた。一四日にみんな集まっているんな相談をした。ぼくらの考えよりも現実のスピードが速いわけです。こちらが振り回されているような状態で、ほんとうにどうすればいいかわからなかったわけです。韓国では死刑を求刑して一週間後には殺すような場合が、いままで歴史的に多々あるんです。へたをするとなかまどころじゃなくて、殺そうと思えばすぐにもできるわけです。金芝河は殺されるんじゃないだろうかと、そういうことでいろいろ対策を、小田実さんや鶴見さんなんか世界各国に、サルトルとかそういう人たちにアピールをした。りして、いろいろ考えて、一応の対策を立てたんですが、その時に作家の真継伸彦さんは、自分は非暴力主義者であるから、自分にとってできるというのはハンストぐらいしかない。このようなことはポツンといったわけです。

私はそのことが胸をえぐるようだな

んともいえなかったのです。聞き流すようなことではなかったわけです。なぜ日本の作家が韓国の詩人の死刑に抗議してハンストをしなればいけないのか。私は同じ民族の一員であるが、ハンストをしようというところまでは考えが及ばなかった。

ところが真継伸彦さんはそういうことをいったわけです。なにか胸がジーンと鳴るような気持ちになって、それなら、真継さん、ぼくと一緒にやろうかと、それで話が決まったわけなんです。それから人数がふえて一六日から第一回五人がハンストに入るようになる。

私はハンストに入るまで健康に自信がなかったもので、いろいろな危惧はあったわけです。真継伸彦さんはおれはぶっ倒れるまでやると思ってましたから、途中でぼくは逃げるわけにいかないし、四、五日ぐらいはなんとかできるだろうけれど一週間も続けば自信がないわけです。ハンストで犬死にするわけにもいけません、利己的な考えが頭に浮かぶわけでは

が、ともかくやらなければいけない。もちろんハンストをする場合は日本政府と朴正熙に対する抗議の意志と同時に、朝鮮の南の土地で闘っている金芝河たちの苦しみの万分之一か千分の一かわからないが、その苦しみを少しは共有したい。自分の肉体をある程度痛めつけることによって彼の苦しみを少しでも、これは虫のいい話ですが、こちらは拷問されているわけでもないわけですし、むしろやっている連中に比べれば非常におこがましいんですが、そういう気持もあって始めたわけなんです。

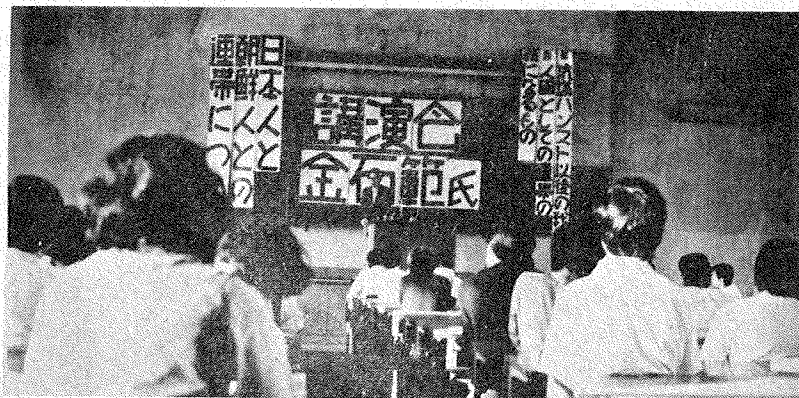
実際やってみたところが支援の方、みなさんのような若い人もたくさんお入りして、もちろん支援の方は意識分子ですから当然といえば当然かもわかりませんが、署名簿を持ってカンパしてもらったりするわけです。

あの時はまだ梅雨が晴れないときですから雨がよく降ったんです。四日間のうちで三日間雨が降ったと思います。テントが張ってありまして、五人坐って、

数寄屋橋公園の前は人通りが激しいわけですが、そこへ若い人たちが雨に濡れて立っているわけです。合羽を被って雨を防いでいるわけですが、テントの中からジッと見ていると、ボロボロのズック靴で、雨に濡れてそれが黒ずんでみえる。雨の中をずっと立って夜遅くまでやってくれる。

そういうのをジッと見ていると、全共闘式の絶叫的なものが全然ないわけです。黙っている。それを見るときにはか仏さんみたいな気がするわけです。確かにこちらには腹は減るんだが、じっと坐って、人が行きかうのを見物しているだけのことであって、彼らのほうは雨に濡れて署名したり、マイクを持って通行人に訴えたり一生懸命やるわけです。

それは一人、二人ではないのですが、ともかくハンストする人間がテントを張ったわけでもなく、みんなに張ってもらって、過保護のような状態の中で、ハンストをさせてもらったようなものです。至れり尽せりの支援を受けたわけです。



こういう例はいくちもあるが、これは一応支援の側は意識分子といえるわけですから、また会うこともできませんが、それ以外の通行の方ですね、例をあげればきりがいいわけですし、はじめの四日間、の街頭のカンパが百万円を越えた。第二次のときも百万円を越えております。金芝河を援ける事務所あてに送ってきたというお金は別にしてですが、これは六〇年の安保闘争以来ということですよ。

一つの例をあげましょう。鶴見俊輔さんたちの第二次のときの話ですが、若いお母さんが女の子をつれてハンストの現場を通りかかった、それで止まって署名をした彼女はカンパ箱へいくらかの金を入れた。すると小さな女の子が、お母さんのお金で何をかうの、と質問した。その若いお母さんは、お金は物を買う時だけに使うものではないのよ、と、そのように話をして小さな子供をさとしたというわけです。子供はわかったかどうかわかりませんが、フーンと返事をしたということですよ。

これは非常に簡単な話のようなんですが、そのような人たちの協力によって、四日間に百万円以上の金が、もちろん百万円のカンパをする人もいたが、五千円とか一万円という札がある。在日朝鮮人からの大きなカンパがあったこともあるんですが、ともかくそういう金額になって市民たちの熱い心情がよせられた。四日間も坐っておりますと、中には酒を飲んで冷やかしたり、罵倒していった人も二人か三人おりましたが、署名とかカンパをする場合テントのなかまで入ってきて、いろいろ話かける人もいるんですが、なか熱いものがこちらの体へ伝わってくるような、そういうような四日間だったわけです。

これは一体なんでもさうかということ、私は四日間すわり続けながら考えたし、ストが終わったあとからも考えた。早川さん、太刀川さんの問題も含まれておりますから、そういうこともあるでしょうが、やはりハンストには金芝河という名前を大きく前面に出しているわけです。

極端な表現をすれば、日本の詩人がいま死刑に処せられようとしている。そういう危機感みたいなものを人々は感じていようように思われました。その人たちが全部、金芝河の作品を読んだりしたわけではないんですが、なにか考えによっては異常な現象であった。もちろん、その場限りで通りすぎて家へ帰ってしまえば散ってしまふものかどうかわからないが、私はハンストが済んでからでも、その問題を繰り返し何回も考えてみたわけです。

内なる醜さとの対決

ここに鶴見俊輔さんの文章を引用した部分があるんですが、これは四月頃の朝日新聞の論壇時評に彼が書いたものです。「初期ベ平連は遠いベトナム戦争が日本人の責任とは無関係に、主として米国政府の責任において闘われているという認識のもとに、九割以上の日本人の道徳的感情をすぐさま結集しえた。中期から後期ベ平連になって、初めてベトナム戦争

と日本の企業の関連などが表面に据えられ、遠いベトナムではなく、身近の、また我々の内なるベトナムがとらえられるようになり、同時に運動もまた日本の世論の全体を代表するものではなくなつた。ベトナム民主勢力との連帯を考えるとときには回り道を通つて、我々の醜さに達しただけれども、韓国の民主主義との連帯を考えるとときには、我々自身の醜さにすぐさま我々は対面することになる。ここに初期ベ平連とは違つて韓国民民主勢力との連帯個々の困難さがあり、世論に寄りかかるところを期待しない活動の形が必要となる……」

これは青地農さんの『世界』の論文や、その他論文のことに触れながら書いていらしゃるわけですが、どういふことかと申しますと、たとえばベトナム戦争の場合、ベトナム戦争反対といふことで日本の世論が非常に沸き立つた時期があります。それが最後にくると冷めてくる。なぜか。

人道主義的な心情の高揚を味わうこと

ができるわけですから、距離をもつていゝる場合はそれですむんだが、実際、ベトナム戦争に日本の企業がはつきり関係しているといふことが眼に見えてくると事情が變つてくる。距離がある場合は醜さは見えないわけですが、ところが沖繩からベトナムを爆撃に行つたりするわけなんです、その醜さといふものが實際近くに見せつけられるようになる、そこから顔をそむけたくなるといふことでしよう。

朝鮮との一韓国でもいいんですが一連帯がうまくいかなない理由はなにか。鶴見俊輔さんのことばをかりれば、朝鮮問題に立ち向かう場合、日本人はすぐさま自分の醜さに立ち向かうことになるといふことです。

朝鮮との連帯をねがいながらも朝鮮問題に立ち向かつた瞬間、そこに映るのはなにかといへば、自分の醜さ、日本人自身の醜さであり、朝鮮はそれを発見する鏡になる。鏡を見たくない。だからそこから顔をそむけ、うしろめたいものから

顔をそむけたい、逃げたい。このようにことを鶴見さんがいつているわけです。

これは日本人側から発せられた重要なことばではないかと思ひます。朝鮮問題に立ち向かう場合に、そこに見えるのが自分の醜さなので、そこから顔をそむけようとするものだから連帯がうまくいはずがない。すると、このことばの裏を返せば、朝鮮問題に立ち向かう場合に、そこにみえてくる日本人自身の醜さ、そこから顔をそむけるのではなくて、醜さをじつと見詰める。それしかないわけです。

これは鶴見さんの発言を踏まえての話であります。だから日本人が自身の醜さに対面するから顔をそむけるといふ、このメンタリティーと、加害者である日本人が被害者である朝鮮人に向ける同情といふ心、それはどこかで結びつくものではないだろうか。

朝鮮問題に対する場合、自分のうしろめたさがあつて、そこから顔をそむけたといふ気がどこかで罪の意識と結び

ついで、被害者である朝鮮人の方へ向かう同情という気持ちに変わる場合があるんじゃないか。そうなれば加害者である日本人と被害者である朝鮮人との間が同情という形でバランスがとられているということになるわけです。

つまり鶴見さんのことばにかこつけていえば、日本人自身が自分の醜さから顔をそむける一つのうしろめたさの表現として、同情というものが生まれうるんじゃないという解釈を私はするわけです。

南朝鮮の闘いが

日本人に教えたこと

すると今度の金芝河の問題を通して日本の市民が示した支援、あれはなんだろうか。それは金芝河に対する同情であるうか。私は同情とは感じなかったわけです。同情を超えるもつときびしい激しいものだったと思います。

中にはある年配のお婆さんが、詩人を死刑にするなんて、なんてひどいことかわいそうにと、こういうことをいって

いた。確かにそのように同情的な気持ちもった人もおるでしょうが、大半はすでに同情という段階をこえた次元での、金芝河らに対する支援、連帯の心というもの、私は自分の体験を通じて感じたわけです。

それはなぜかといいますと、金芝河らたちに寄せる熱い心は、単に心情的なものではなく、すでにそこに批判の目が入っている。批判の目というのは朴正熙に対する批判の目であり、そして日本政府に対する批判の目だということです。

金芝河に対する死刑、韓国における民主主義の危機、これは韓国だけの問題ではなくて、日本の自分たちの上にも覆いかぶさってくるのではないかという、ある予感のようなものを感じていたんじゃないだろうか。しかも韓国における一人の問題ではなくて、金芝河たちの問題がそのまま普遍的な人間の尊厳といましようか、実際、南朝鮮で闘っている彼らの闘い方は、人間の尊厳ということばが本来の意味を取り戻すような闘い方、

立派な闘い方じゃないかとはくは思うんですが。そういう人間の尊厳、人間の存在というものに対する危機感を日本の市民たちは金芝河の問題を通じて感じた。もちろん金芝河たちを助けるというのは連帯の表示なんです、それだけでなく、それがそのまま自分たちの問題、自分たちの政府の醜さを見る契機にもなる。

日本の政府自体が恥の感覚をもってみなければいけない政府であるということ、を大多数の、とくにハリストに支援してくれた人たちは考え、そしてまた恥の感覚で自分の心を見詰める契機を持ったんじゃないだろうか。自分の政府を羞恥の心で見詰めることができるということ、これは必ず自分の個人の中に自分の醜さを見ようとすまきかけになると思うんです。そういう恥ずべき政府を支えているものは一体誰であるか、それは日本人自身ではないだろうか。

しかも、朴正熙の最も力強いうしろだてになっているのは何者であろうか。これはアメリカもそうですが、日本政府な

んです。

そういう自分の政府に対して恥の感覚で見ようなきっかけを金芝河が与えた。金芝河は、民主主義の危機ということをつまり、韓国における死刑ということとおして、日本にも民主主義の危機がやってくるんだということをも日本の民衆に知らせるためにメッセンジャーとしてやってきたんじゃないか。そのように日本の市民たちが受け止めた、とはいえないだろうか。

もちろん、カンパと署名だけをして、家に帰ったらそういう熱い心情も、自分の政府に向けた批判的な目も全部忘れてしまったとしたらそれは残念なことです。その批判的な目は持続して日本の民主主義を定着させるために、日本の民主主義を守るために闘う方向へ向いていくことをねがわざるをえない。それがまたこの場合の連帯を支える力になると思うわけです。

真の連帯に向かつて

結局、私がいいたいのは、日本と朝鮮の連帯を考える場合に、朝鮮人側は被害者意識を克服する方法の問題、そうして鶴見俊輔さんの表現をかりていうならば、日本人側は加害者としての同情とかそういう問題で被害者との均衡バランスをはかるんじゃないくて、加害者の立場そのものを自己否定する。

たとえば、朝鮮問題に立ち向かうとき、すぐさま自分の醜さに対面するためにそこから顔をそむけようとする姿勢から自己の醜さに対面するという姿勢へ、そこから出てくるなにか方法意識のようなもの、そういうものがこれから探られていくべきではなからうか、ということだと思います。いままでの単に図式的な、階級的な連帯論では十分に説明できなかった連帯というものが、去年の金大中事件以来、韓国の情勢の展開にしたがって、日本と韓国の間にはなかつたような新しい形の連帯の目といたしましうか、そういう

うものが生まれつつあるように思われる。それを前提にして、私は朝鮮人の立場から告発を超えた、告発という作業は同時になされなければいけないが、告発を超えて、被害者意識を超えてほんとうに平等な意味での広い世界、日本人と手を結べるような、それが一つの自由と思うわけですが、そこへ進んでいきたい。

もちろん連帯というのは具体的な行動が伴うわけですが、その問題は省くことにして、いままで話してきたそういう方向に向かつてこれからも考えを進めていきたいと思えます。(拍手)

——それでは、いま金石範氏が話されたことを再度確認し、あるいはより深く問い詰めておくために、またわれわれの立場からの疑問点などを検証しておくために、討論に入りたいと思えます。討論は、参加者の方々から質問を受けて、それに金石範氏が答えるという形で進めていきたいと思えます。

質疑応答・討論

質問 われわれがこれから果たさなければならぬ役割は、どのようなものだと思いますか。

金石範 第三者としていえば、日本の民主主義を守ってほしいということです。

日本の支配層は、日本の民主主義を締めつけようとしているわけです。日本の民主主義が危機に瀕すれば在日朝鮮人にも被いかかってくるわけで、それは歴史的な経験に照らしてもあり得るわけです。その意味でも戦後民主主義の中に育った若い人は日本の民主主義を守ってほしい。どこか脆弱なところがあるかも知れませんが、皆さん方は帝国主義時代にあやふやに生きてきた大人たちとは違うものを、体質的に持っていると思います。そういう意味で、若い人が民主主義を守るための中核にならなきゃいけないし、それが在日朝鮮人問題を解決する上にお

いても必ず連鎖反応を起こす。朝鮮人の私が、あなた方はこうしなさい」と言わなくても、自分で考えていることだと思います。

日本の皆さんは極端ないい方をすれば韓国の民主主義のためにやらなくてもいいわけです。韓国のファッショ化がまた日本の民主主義を危険にさらすということにもなりますが、日本の民主主義そのものをがっちり守っていくことが、そのまま韓国の民主主義を支えることになる。いま韓国に民主主義はありませんが……。自分のところをほったらかして、あんなところの民主主義を助けようというものでは、堅い連帯はできない。韓国の民主主義を守ってほしいためにも、日本の民主主義を圧殺するきっかけを支配層に与えてはいけないんじゃないだろうか。

質問 被害者意識と加害者意識の同感を超えての連帯ということを言われたわけですが在日朝鮮人の場合、民族性を取り戻すということを言われましたが、そ

の点について、われわれ日本人または朝鮮人は、どういうことを契機としてそれを超えられるのか、またどういうふうにしていくことができると思われませんか。

質問 いまのことに関連してですけれども、加害者意識と被害者意識の形では、ほんとうの意味での連帯は生まれません。その中で連帯するには、被害者側がそれを否定していく。そのことによって同じ地点に立った同一自由の立場に立つということは大賛成です。少なくともそういう意味での連帯しかないだろうと思っ

ただその時に、問題にしなければならぬのは、被害者意識、加害者意識は厳然たる事実としてあるんです。その時に自己否定し得るような主体というのは、こういうこととは適当かどうかわかりませんが、やっぱり知識人じゃないだろうかと思うんです。

ほくは部落民なんです、部落の人たちが糾弾をやっていくような問題が起きた時に、ほく自身も糾弾が告発という形

だけじゃなくて、それをぼく自身が乗り超える意味で、同じ人間なんだという立場から、はじめて糾弾の意味が広がるんじゃないかと思うんです。ところが、自己否定を考えるのは、少なくとも知識層じゃないか。実際、民衆一部落民なり在日朝鮮人が置かれている現実を考えなければならぬ。大衆との連帯をしなけれ

ばならないんだろ。うけれども、実際に対応した時に、そういう形で自己否定を説くだけでいいのかなあというジレンマがあるんですが……。

金石範 いまあなたがおっしゃったように、ぼくも知識人ということは生理的に好かないんですが、連帯が実際に可能であるかないのかということは別にして、ものごとを考える場合に可能性でもいいわけです。夢でもいいわけですが、ぼくはこれをくっつけて実現不可能なテーゼとは思ってないわけです。けれども、やはり何かの方法意識を持たなければならぬ。そういうことを持ち得ない段階のぼくら

在日朝鮮人の中には糾弾すること自体で精いっぱい、の若い連中がたくさんいるわけです。

神戸の湊川高校、県立の夜間高校です。そこには部落民とか在日朝鮮人の二世が多く通ってるんですが、そこで二三年前にしゃべったことがあって、そこで朝鮮の生徒たちの出している文集を読んだことがあるんです。それは日本人に対する激的な告発です。告発しながら自己嫌悪というふうか、絶望に陥っていくわけです。

それは上品なかまえたものじゃなく、もっとストレートなんです。読む人の肺をえぐられるようなことを書いてるわけです。しかも告発しながら方法を見い出すことができないために、結局、告発を超えることはできない。

告発することにおいて、相手の罪を糾弾する。そして糾弾されることにおいて、いままでも考えが及びもしなかったところに目を開けることがあるわけです。

それだけでは告発された方の側は自己

否定の契機をつかみ得ないんです。外的に、告発されるから目を覚まされるとい

うことが一つの契機にはなっても、やはりわれわれは、加害とか被害を別にして、ほんとうは何らかの形で自己否定を行なっているのが人間じゃないかと思うんです。矛盾的存在というのはそのうちものです。その場合に、加害者は加害者の方で一回自己否定する。被害者は被害者の方で一回自己否定する。それはどういう形で行なわれるべきか。

被害と加害の関係じゃなく、個人にたとえてみても、自分の人生の歩みの中で、自己否定する契機があると思うんです。だから加害、被害の場合だけに結びつけるんじゃなく、人間は何らかの意味で自己否定をしななければならない。

われわれが歴史というものを肯定する限りにおいては、人類の進歩だとか、われわれ自身が前に進むとか、その場合にあるものは必ず否定の媒介が必要である。青春期に自己否定が大きかった、少年か

ったということで、その人の一生が決ま

ることもあり得るわけです。それと同時に、前に進むためには自己否定の契機が必要ではないか。それを仮に加害と被害の場合にたとえてみると、被害者は被害者として自己否定の契機を持たなければいけないし、加害者としても自己否定の契機を持たなければいけないんじゃないか。それは自己の責任の問題なんです。

同情というのは、自己をごまかし得る要素があるわけです。そういう同情は要らない。こちらから拒否しなければいけない。加害、被害の立場に立って、自分が被害者意識から外へ出ることができない場合は同情を拒否することはできないわけです。同情を拒否するのは何か——。それはやはり主体的な条件です。在日朝鮮人における主体的な条件とは何かということになってくるわけですけれども、いろんな歴史的事実があるわけです。

部落の立場と在日朝鮮人の立場とはニュアンスは違いますが、ともかく糾弾と告発をやめてはいけないうわけです。糾弾

をしなければ目を覚ますことのできない加害者がたくさんいるわけです。まず糾弾して、告発して、目を覚ますようしなければいけない。しかし一たん覚めて、罪の意識とか贖罪意識を持った場合に、覚めたその程度で放っておいてはいけません。告発を超えながら、新しい高度の告発のやり方なんです、私の言うのは。

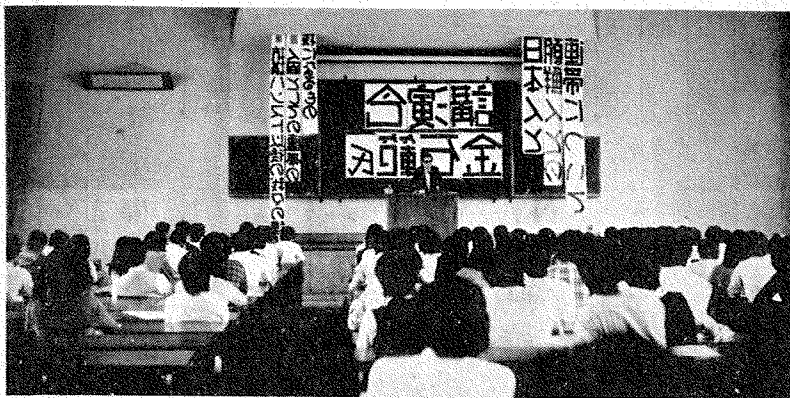
人間的な場合においても、加害者より被害者が優位に立たなければならぬ。被害者は加害者に比べれば倫理的に優位性を持つてゐるわけです。被害者が何かを糾弾すれば、加害者は何も言えないわけです。だから結局、問題の方法の提起とか道を切り開くことができるのは被害者であるといえます。つまり道徳的に優位な立場に立っている者から方法を示さなければならぬ。

もつと高度な、いわゆる戦略的なものを目ざしていく。一般の場合、そこまで考える余裕ありませんし、糾弾が精いっぱいであるし、また糾弾しなければいけないし、糾弾することにおいて、告

発することにおいて、またその当事者が在日朝鮮人であるなら民族的な自覚を持つ。

と同時に、告発以上のことをする方法が見つからないために、そこからもっと虚無的になる場合もあるわけです。糾弾の方法だけでは壁が見えて、その壁を打ち破ることはできないわけです。壁を打ち破るためには一回自己否定して、高いところへのぼらなければならぬ。

民族的な支配、被支配の場合は、これははっきりしています。これは帝国主義の侵略として現実にあるわけですが、日本人の中における部落問題は何でしょう。同じ日本人の中にある差別構造——支配者がつくつたものですけど、同じ日本人である民衆同士が差別意識を取り切れないということは、人間の恥なんです。朝鮮人に対して蔑視の感情を持つのはある意味ではしかたないかもわからないですが、部落に対して蔑視の感情を持つというのはどういふことでしょう。そういう意味では糾弾とか告発の手をゆるめて



はいけないと思います。

しかしそこにとどまっていたは聞いてやぶれるんです。糾弾という方法と同時に、糾弾を乗り越える他の方法を身につけて糾弾をやるような両刀使いでやらな

いとだめです。
糾弾の方法でやぶれた場合、行くところがないわけです。朝鮮人の場合、そういうことが幾らでもあるわけです。幾ら糾弾しても、加害者の壁はぶ厚いですから、糾弾で超えられるものじゃない。ですから同時に自分自身を救う、その方法をもっと高度な立場で別の告発のやり方が必要です。これは、加害と被害の問題だけじゃなく、あらゆることです。

全体的にもを見ようとする場合は、一方にあるものを否定してかかる必要がある。朝鮮人の場合は、いじめられた悲しい民族、ということが強調されているわけです。確かに朝鮮民族はいじめられ、悲しい境遇にあったけれども、単に奴隸的な意味で被害者であったわけではないんです。本国の中でも日本の中でも

抵抗を続けてきております。ですから被害者であっても、抵抗しながらの被害者なんです。自己の主体性を捨ててしまつて、ただ悲嘆にくれたわけではない。確かに悲しみ、涙を流しているけれども、その境遇に立ち向かって、権力に立ち向かって自分の境遇を変えるために努力をしてきた。

しかし、あまりにも敵の力が強大であるゆえに、それがかえつてもっと悲惨な目にあう契機になる。三・一運動でもたくさんの愛国者が殺されておりますけど、じつとしていけば殺されることはないんです。抵抗するために殺されてももっと悲しくなる。それにもめげず、そういうことが繰返されてきた。そのように一つの民族が歩んできたわけです。過去の朝鮮人というのは、一つの民族的な主体性を持って支配者に対して抵抗してきた。そういうことを若い世代の在日朝鮮人は知らなきゃならない。そういうことにおいて人間的な自覚あるいは誇り——こういうことは使いたくないんですが——を

持つ。

われわれはいじめられ、被害を加えられながら闘ってきたということ。不正なもの、権力に向かって闘う姿勢がなかったら、ほんとうの自己否定はできないです。われわれはいじめられ、泣いてばかりいた弱者である、われわれは朝鮮人である、そういう程度の民族的な自覚では、被害者意識を超越する方法を持ち得ない。被害者意識を超越するためには朝鮮人としての主体性―それがイコール人間性ですけど―その人間的な主体性を支えるものが歴史的にはある。それは闘いの歴史である。非常に困難な中で悲しみと苦しみにさらされながら朝鮮人は闘ってきたというところまで若い人たちはいかなければならない。

だから、受動的であってはだめなんです。被害者というのは受動的ですから。受動的な立場から、もっと能動的な立場に立たねばならない。そういうわけで、被害者意識を超えるためには、その条件として人間的な主体性を持たなければなら

らないということがいえます。

朝鮮人の場合の人間的な主体性というのは、朝鮮人として目覚めることです。しかも朝鮮人そのものすら超えていく。

日本人は日本人で超えていく、これはお互いの方法の歩み寄りという妥協的なものじゃなく、もっと厳しいものです。握手して連帯できるものじゃなく、ほんとうに連帯するためには、自分の中に刃を向けなければなりません。朝鮮人は自分の中に刃を向けているわけです。日本人自身も、同情とかのなまはんかなものじゃなくて、もっと厳しい刃を自分に向けてことです。それはどういふことかという、加害者意識を超えることです。これは加害者に対して免罪を与えるという意味じゃなく、もっと厳しいことです。現実的には非常にむずかしいんですけど、われわれの考え方としては、そういう方向へ向かっていく必要があるんじゃないか。

質問 朝鮮人としての民族意識を取り返

していくことが大事だと言われましたが、戦前からの強制連行なんかで数十万といわれる在日朝鮮人が日本につれてこられ、その状態が継続されてからものすごく年月が経ちます。その中でぼくたち―部落解放研究会ですけど―思っているのは、その在日朝鮮人の二世、三世の問題になってくるわけです。

現在いかに朝鮮人としての民族意識を取り戻していくことが困難な状況になっているかということを考えなければならぬ時に来ていると思うんです。これはすべて教育の問題です。

金キムさんが言われた、日本語しかしゃべれない朝鮮人が親から子供へ、子供から孫へという形でどんどん強化されていく。これは、在日朝鮮人に対する差別問題と同時に、それが日本政府の行っている同化の政策であることに目を向けなければならぬ。

大阪には大きな部落がたくさんあります。その中で在日朝鮮人がものすごく多いわけです。そこにおける子供たちが――

これは部落民として差別され、なおかつ在日朝鮮人として民族的な差別を受けているわけです。部落の子供もしんどい生活をやっているけれども、そのしんどい部落の子供が朝鮮人の子供をいじめるわけです。そういう厳しい歴史が部落の歴史の中にある。日本人の中で差別されている部落民がおれらをいじめるとは何ごとだと言つて、血みどろの喧嘩をしているという状況がある。

いままでの話にあつたように、日本が朝鮮半島に侵略を開始する。外へは侵略、内へは差別、部落差別がテコに使われることをよく知っています。その中で、いま日本に渡ってきた朝鮮人の子供、彼らの生活というのはむちゃくちゃです。親父さんが朝鮮人でおふくろさんが部落民、あるいはその反対。子供が何人かいるけれども、全部おふくろさんが違う。そんな生活の中で兄弟によって国籍が違う朝鮮人二世がいるわけです。ほくらそれに対して、この子に対してはどんな問題を、どういう意識を、そしてどうい

ふうに向う意識を育てていったらいいか。彼らは部落民なのか朝鮮人なのかというところで一つ問題が出てくるけど、そうじゃない、彼らが部落民として差別されるわけですけど、その子供は言うわけです。「おれは部落民としてやりたい、朝鮮人はいやだ」。朝鮮人としての誇りを持ってないわけです。

それは、長年日本政府の行なってきた同化政策によるわけです。まず自分が朝鮮人として日本民族から、あるいは日本政府からものすごく差別され、弾圧をされて、抑圧されているんだという意識をなくしていくことが、自分が朝鮮人でありたくなく、日本人でありたいという民族意識をなくしていく中で形作られていく。在日朝鮮人の子供は、自分は朝鮮人であるにもかかわらず、日本人でありたいと思うようになってきていますね。

そういう問題で「民族教育とか言われて目を見なければならぬのは、この同化の問題だと思ふんです。この問題

に対してどう対処していくかということにわれわれは取り組んでいかなければならない。

在日朝鮮人の子供たちに対し、日本人になれという立場に、ほくらたちはけつしてなつてはいけないという大きな課題があるわけですけど、それは日本人全体の課題としても提起しなければならぬ問題だと思ひます。部落では部落の子供会がつくられていく方向にあるんですが、そういうところで、同化の問題について金さんが考えておられることがあります。したら述べていただきたいと思ひます。

金石範 いま同化の話が出たわけですが、同化というのは、すでに日帝時代に、朝鮮語とか朝鮮の歴史をなくして、苗字も日本式にして、朝鮮民族を日本民族に同化してしまおうとする政策があつたわけですよ。戦後もそれが続いているわけですよ。七、八年前の「内閣調査時報」というパンフレットに、『在日朝鮮人の同化を百年の大計として考えよう』という論文が

ありました。それは署名なしです。

たとえば飛鳥時代に、日本の文明の黎明期に朝鮮人（そこでは帰化人という表現を使っている）がやって来た。それで日本の文明の土台を築いたんだというようなことが書いてあって、それは認めているわけですが、しかし彼らの痕跡はいま日本人の中にあるか？ ないというわけです。

在日朝鮮人を少数民族として扱って、ぼくは在日朝鮮人を少数民族と見ないんですが、どこまでも朝鮮の五千万民族の一部分として見たいわけですが、実際は少数民族化しつつあるわけです。そういう面を日本の政府は強調するわけです。在日朝鮮人を少数民族として、これを積極的に日本人化し同化させる。それを百年の大計としてやれという支配層の考え方は。あと一〇〇年、二〇〇年のうちには、朝鮮人のあと形もない。そういう非常におそろしい考え方なんです。

実際、政策としてもそういうことが行なわれてきているし、朝鮮が解放されて

統一がならず三〇年も経つ。日本人の中で生活しておりますと、混血の問題も起こってきますし、生活などが全部風化されて日本人化していく可能性があるわけです。

ある意味においては、これはいたしかたない現象と見ざるを得ないわけですし、非常に無責任な発言をするわけですけども、私がさっき言った日本と朝鮮という民族があつて、個人を超えた大きな問題があつて、この民族が過去に非常に不幸な関係であつたから、これを一回清算しなければならぬ。朝鮮が統一したら、物質的な賠償の問題が起こるかも知りませんが、そういうことはともかくとしても、意識の面で民族対民族、朝鮮民族対日本民族という場合に、典型的な形で日本にいる在日朝鮮人というものがあてはまるんじゃないか。風化の危機にさらされておりますから。そういうことで、民族間の問題として、単に在日朝鮮人だけじゃなく、朝鮮と日本の民族間における問題をこれからわれわれは考えて

いかなければならない。

日本と朝鮮はお互いに傷ついた歴史を持っている。傷つき方の大きいのは、被害者であつた朝鮮人であるわけです。われわれがこれから連帯を持つためには、何らかの方法が提示されなければいけないんじゃないか。そういうことで、ある意味においては異例的なことをばく言つてゐるわけですが、現実には具体的な深刻な問題について、私は恥しいんですが答えるすべを持たないわけです。

いづれ朝鮮の子供たちが日本人になつてしまふかも知れない。小さな子供の意識を変へることができるとかどうかはともかくとして、在日朝鮮人の生活に祖国の統一というのは決定的な影響を与える要素を持っているわけです。朝鮮民族が望むにもかかわらず、それがなされない。そういうわけで、たとえば被害者意識を乗り越える条件として、朝鮮人の主体性を持つ必要がある。

極端な話、日本にほんとうに民主主義が達成され、社会変革が行なわれ、そし

て民主勢力によって日本の政府が樹立された場合、社会政策が変わってくるわけです。いまのような問題は、日本の政府の一つの政策として打ち出される可能性はあるわけです。だから、在日朝鮮人そのものが昔の日本の朝鮮支配のいびつな形で落とされているわけですが、その末端で今あなたのおっしゃった子供の問題が起こっている。それに対して、日本の当局では何の手も打たないし、朝鮮の組織 朝鮮総連と民団もそこまで手が伸びない。それを部落解放同盟の方がやっている。

朝鮮が統一され、日本と朝鮮の国交が樹立されて、日本に民主権が樹立されると、必ず日本の民主権は、そこへ政策の目を光らせていくと思うわけです。しかし、いまの現状ではだめです。結局差別構造をつぶさなければいけない。意識の中に差別構造があるんだけど、同時に社会的な現実としてあるものをぶち壊していかなければならない。現実的

に部落の問題でも、単に意識の問題だけじゃなく、差別構造がいろいろあると思います。在日朝鮮人の場合もそうです。極端な話をすれば、戦後、三〇年の間、日本帝国主義の流れをくむ自民党が日本を統治してきたことと関係があるわけです。

簡単に社会の構造は動くものじゃないわけですが、差別構造を打ち破ると同時に、日本の社会構造・政治機構そのものを揺がしていくようなことがないと、ほんとうの意味での在日朝鮮人全体の解放はあり得ない。在日朝鮮人の解放がないということとは、日本の民衆の解放もあり得ない。そういう意味で、在日朝鮮人の問題を誰が責任をとっていいか、私もわからないわけです。

日本が同化政策をやっていることもありますが、みずから進んで日本人に帰化するケースもあります。帰化したあとでも結局、今度は帰化朝鮮人ということで日本人の中で差別され、朝鮮人からも差別される。朝鮮人の国籍取得の場合に、ほ

かの国の国籍をとるのは何も言わないんですが、日本に帰化する場合、非常にひっかかる。昔の関係がそこに投影されているわけです。私は、在日朝鮮人を「奇妙な存在」という呼び方をしておりますが、奇妙複雑きまわる存在です。

私はこういう高いところで、カッコいいことをしゃべっておりますが、またしゃべる必要があるわけですが、現実の問題を突き付けられた場合に、それに答えるすべがないわけです。

質問 ぼくの言いたかったのは、被害性、加害性の問題は、ぼくたちの意識の中で考えていたんではどうにもならないということですよ。

朝鮮の問題を考えた時に、関西大学にたくさん在日朝鮮人が来ている。彼らはどんな生活をして、何をしゃべっているか。生きていくために日本語をしゃべるのはしかたないかもわかりませんが、どうして関西大学の第二語学に朝鮮語がないのかーという素朴な疑問があるんで

す。ほくたちが被害性、加害性どのこのうのと考えてる間に、知らないうちにほくたちみずからが同化に手を貸していいてはいけないということをもんなにわかつてほしかつたわけです。そのためには朝鮮の歴史をもっと正しく理解することだと思えます。具体的な現実を踏まえてできるところからやっていくことが大切だと思えます。

金石範 ほくは具体的な行動とか、そういうことには触れてないわけですが、意識の変革というのは、机の上じつとしていてできるものではない。連帯というのは、差別の問題に単に同情という形で反対するんじゃない、自己の問題として日本人の方から自己否定しなければならぬ。

部落問題に、部落出身でない日本人が目を向けた場合、はたして自分のみにくさに対面するかどうか。みにくさを見つめるといふことは、現実の部落差別の問題、解放の運動なら運動に全的にかかわ

る人もあるでしょうが、何らかのかかわりが必要とします。それには一つの行動が伴うべきである。

朝鮮人と日本人の連帯という場合でも、お互いの問題として具体的な行動が起こる必要がある。被害者の立場にある朝鮮人にはいろんな壁があるわけです。その壁を取り除くためには、朝鮮人は一生懸命やっているわけです。それに対して日本人側からかかわることが連帯ということとです。それは朝鮮人側から強要する問題じゃないので、私は一切省いたわけです。私は私なりに、朝鮮人として自己を越えるものを出す。そして日本人側から自己否定して、連帯の方法を提示し得るなら、日本人側から朝鮮人の問題にかかわらざるを得なくなるような状況が起ってくるわけです。それをほくが、日本人の皆さんは加害者であるから、あなたは自己否定してかかわってきなさい、とは言えるものじゃない。どこまでも日本人の問題です。

日本人が朝鮮人の問題にかかわろうが

かわるまいが、あなたの勝手なんです。これが被害者意識を超えたほくの立場です。ほんとうの連帯ができる場合は、こちらから言わなくても相手が動くんです。そういう時は必ず来るだろう。そういうことで、お互いに自己否定して、自分を超えようじゃないか。ただし在日朝鮮人の場合は被害者であるから、告発という方法は捨てない。しかしそれにはとどまらない。抽象的な話ですが、そういうこととです。(拍手)

キム・ソクボム 作家

一九二六年大阪に生まれる。京都大学・美学科卒業後、工員、朝鮮高校教員、朝鮮日報記者を経る。処女作は一九五七年の「看守村書房」「鴉の死」。一九六九年から、日本語による本格的な創作活動に入る。作品には「万徳幽霊奇譚」(七一年)「夜」(七三年)「一九四五年夏」(七四年)などがあり、その他評論集「ことばの呪縛」がある。



朝鮮情勢の視点

● 狙撃事件と民主化闘争

キム

チホルムン
貞文

狙撃事件の背景

日本帝国主義者の暴圧のもと、三六年間の植民地隷属の不幸から解放された朝鮮人民の喜びにつつまれる八月一日の解放記念日・光復節。

今年の八・一五はまさに血塗られたものであった。在日「韓国人」文世光なる者が、朴正熙一味の光復節の会場で狙撃事件を起こしたのである。

しかしこの狙撃事件は、単なる犯行として見る前に現在の南朝鮮での背景を抜きにして考えるならば、真相ははっきり現われないだろう。

周知のごとく朝鮮民主主義人民共和国が国際的に威信が高まっていることと反比例して、朴正熙一味は対外的な孤立を深めている。また国内における人民大衆の反朴気勢、および「金大中事件」以後激化一路をたどっている支配層内部の矛盾、経済政策の全般的破綻などにより、朴正熙一味は、このままでは現「政権」を維持しえないという認識をもたざるを

えなくなっている。

歴史上、追いつめられた為政者がまさにそのようであったように、朴正熙一味に残された道は、朝鮮における緊張状態を極度に激化させ、人民に対する弾圧体制をさらに強めて国内的に完全にファッショ体制をつくり上げ、その上に立ってアメリカと日本の支援を得るための政治的謀略劇をでっち上げて、事態を打開する以外になかったのである。

このような背景を通して「狙撃事件」を観てみると、これが偶発的なものではなく、朴正熙一味のジレンマによって、起こるべくして起こった政治的な謀略劇ではなからうかという疑問が生じるのである。

今回の「朴狙撃事件」を通じてあまりにも不可解な点が多い。この事件が朴正熙自身による「自作自演劇」ではないだろうかという疑問が多くの人々から出る。これは、不可解な点を通して観るとき、ごく当然なことである。では不可解な点とはどんなことであろうか。

まず第一に、こうした事件が起こりう

ることを事前に察知していたふしが一部にあったという事実である。「朴狙撃事件」に関するアメリカの反応を伝えた読売新聞「ワシントン特派員は、「今年の光復節には何かが起こるといった不気味な予測が米国内の韓国通の間でささやかれていたのは事実だ」（読売新聞七四・八・一六）と書いている。また著名な「韓国ロビイスト」が事件直前「この一、二週間に韓国で大変なことが起こるよ」と語ったうわさも流れた（朝日ジャーナル七四・八・三〇）。そして事件直前に日本滞在中の数十名のアメリカ人記者がソウルに集まった。彼ら外国人新聞記者が多数集まったなかで事件が起こったのは、

事件を最大限演出しようとする作意が働いたとみるのは行過ぎであろうか。

第二に、この事件が「緊急措置」下で起こったということである。今日、南朝鮮では人民大衆の動きを最大限監視すべく、三人以上集まって日常会話さえ出来ないように法で定められている一大ファ

ッショの中にある。そうした状況の中で果して外部の人間が、日本に住む一「韓国人」がソウルに入り込み、凶器を持ったまま、それも最前列から二列目という座席に座ることが出来るだろうか。しかも会場はあの悪名高いKCIA（韓国中央情報部）が包囲しているという状況の下で、大統領の至近距離まで近づくことが可能であろうか。

そして第三に、「金大中事件」で暴露されたあの悪名高いKCIAが事件と関連していることである。新聞でも騒がれたように、「金大中事件」の関係者・安某と、文世光の母親が大阪でやっているキャバレーがこの事件に関連していることは明白なことである。日本の野党議員の質問に対し、警察庁の山本警備局長が安川なる人物の店を「金大中氏が東京から誘拐され、一時監禁されたという『安の家』と関連があるかも知れないので、調査した事実はある」と答弁している（朝日新聞七四・九・三）。

第四に南朝鮮捜査当局の発表と朴一味

の要人の発言に数多くの矛盾がある。

朴正熙一味は、狙撃事件を当初から朝鮮民主主義人民共和国に対する誹謗中傷と、朝鮮総連弾圧に利用しようとする画策したのである。解放後一貫して祖国統一の合理的かつ正当な呼びかけを行ってきた朝鮮民主主義人民共和国は、国際的にもしだいにその威信が高まってきている。また朝鮮総連は海外において朴一味のファッショ的本質に反対し、祖国統一と在日朝鮮人の民主的民族権利のために闘ってきた。祖国統一に対する朝鮮民主主義人民共和国の方針と朝鮮総連の主張が、国際的にまた在日朝鮮人、日本人民に大きく評価されようとしているとき、朴一味はこの事件を自作自演し、それに共和国と朝鮮総連を無理矢理に結びつけようとしたのである。事件直後に「狙撃事件捜査本部長」をして「犯人は単独犯を主張しているが朝鮮総連系統の人物とみて、ひきつづき背後関係を洗っている」と発言させたが、八月二〇日には「國務總理」金鐘泌の口から「文世光は自白していな

い」と述べている。また南朝鮮の新聞も文世光は逮捕された後に沈黙を守り、断食闘争を繰り広げていると報じている。そして、自分勝手に証拠もなしに、朝鮮総連と結びつけようと必死になっているのである。これらは、朴一味の政治的謀略策動がいかにでたらめなものであるかを証明するものである。

以上簡単に述べたように、「朴正熙狙撃事件」は、けっして外部から起こさるような性格のものではなく、あくまでも朴正熙支配層内部の矛盾と不和、彼の独裁政治の結果生じた産物であり、その全責任は朴正熙自ら取るべきものである。そればかりかこの事件を利用して朝鮮民主主義人民共和国と朝鮮総連を



選挙違反事件の第三回公判日の金大中氏



朴一味の反民族行為を糾弾するデモ

誹謗中傷する政治謀略に利用しようとするのは、全朝鮮人民と世界の平和愛好勢力に対する重大な挑戦である。

「朴正熙狙撃事件」に対する日本政府の態度はどのようなものであろうか。日本政府は、「金大中事件」、「早川・太刀川事件」で見せたあいまいな態度を、この事件に対しても執ったのである、日

本人民がこれら一連の事件を通じて、その真相を糾明せよと田中内閣に要求してきたにもかかわらず、「韓・日」支配層同士の不明朗な関係は、真実を糾明しようとする態度とはまったく相入れない、ただ腐りきった「韓・日」関係の継続のみを念頭においた政治的打算の上に築かれているのである。とくに「大統領夫人

告別式」に田中首相自ら参席し、朴正熙の日本政府に対する内政干渉的な要求にうなずき、朝鮮総連弾圧を個人的に約束した事など朝・日両国人民に際立った印象を与えた。また椎名特使の訪「韓」朴正熙あての親書で特に顕著に表われた対「韓」屈辱外交は、朝・日両国人民の意志をまったく無視したものであった。現在、日本政府は朴正熙独裁「政権」の要求に応えて、朝鮮総連弾圧、在日朝鮮人の民主的民権利剥奪を行いつつある。

「朴狙撃事件」以後、日本各地において、KCIAに扇動された一部民団暴力集団による朝鮮総連各組織、反朴組織、一般同胞に対する破壊暴力行為が行われているが、これに対して警察当局は現場に居てもそれを黙認するという事態が起こりつつある。また、田中首相が朴正熙に約束したように、在日朝鮮人の権利を制限しようとする「出入国管理法案」を再び国会に上程しようとしている。

過去の歴史が示すように、日本におい

ては、民主主義の危機はまず在日朝鮮人の政治的・民主的・民族的権利を弾圧することから始まるのである。日本の民主主義的發展を願うものならば、イデオロギーを問わず、朴「政權」の妄言と腐りきった「韓」・日關係を糾弾するはずである。

この事件を通して朴正熙が日本政府に要求したように、「日本の国内法改正」云々に至っては、日本政府に対する露骨な内政干渉であり、在日朝鮮公民と日本人の憤激を買わざるをえないものだ。しかし、朴正熙が破廉恥にも日本政府にこのような要求をするのは、南朝鮮傀儡政權の危機が猶予ならざる事態に置かれて、これを示すものであり、それだけに注意を払わなければならない。

朴正熙傀儡政權の政治的謀略策動は、「韓」・米・日反動の企む朝鮮分裂固定化策動に根ざしたものであるということだ。これは「韓」・日軍事結託による戦争挑発行為の激化に他ならないのである。ここにおいて、日本人民と日本政府が

真に民主主義的發展とアジアにおける平和を願うならば、朴正熙傀儡一味の「朝鮮総連」弾圧要求に屈服することなく、それを断固拒絶し、現在の南朝鮮一辺到政策、共和国敵視政策を根本より改めることが重要ではないだろうか。

南朝鮮人民の民主化闘争

現在、南朝鮮は朴正熙傀儡一味による一大ファッショ支配によって、一四年前の四月人民蜂起で自由と解放、新しい政治と新しい生活を要求して起ち上がった人民の志向を無残にも銃剣と軍靴で踏みじり、一三年間アメリカ帝国主義と結託して、売国・民族裏切りと分裂・戦争政策のみをことする悪政が行われている。その結果、南朝鮮では民族の自主権は余すところなく踏みにじられ、人民は五〇〇年の悠久な歴史を通して、ますますにこの上ない貧困と痛苦の限りを打ちひしがれた自由と権利、絶望と貧困の

淵に立たされた人民大衆、三〇年に及ぶんとする分裂の悲劇―米・日の主人に媚びへつらう一部の売国奴が銃剣による流血の弾圧と不正腐敗をことし、ただ一身の権力欲と栄華をもとめ酒色に浸り、贅沢限りの「この世の春」を謳歌しているとき、南山のKCIA（韓国中央情報部）地下室では、自由と民主主義を叫んだために素裸にされたうえに残酷な拷問と鬼畜にも劣る集團暴行によって梨花女子大生が貴い花の生命を無残にも奪われ、馬山では日本独占資本の手先の暴行によって純潔を失った少女の恨みの声が聞こえ、ソウルの清川チョウケン川では腹が減ったとご飯をねだる子どもに白いご飯の代わりに黒い毒薬を飲ませ、一家服毒心中を遂げた婦人の恨みの声が聞こえ、各地の学園では、自由と民主主義を叫ぶ学生をKCIAに売り渡さなければそれによって自分が死刑になるという屈従の汚辱を受け悲しんでいる教授の声、また詩人の良心を詩に綴っただけで死刑になる金芝キムジ河……

現在、ソウル大学、高麗大学、梨花女子大学の青年学生、キリスト教宗教学人をはじめとする南朝鮮人民大衆の決起は南朝鮮全土に覆い被さった暗雲と暗黒のファッショ支配を葬り去らんとするいま一つの義挙である。この民主化闘争は、いかに朴正熙独裁一味が狂ったようにファッショ弾圧を強めようと、微動だにしない人民の正義の闘争が根強く繰り広げられていることを内外に示し、いかなる暴圧をもってしても、南朝鮮青年学生、人民の怒涛のような闘争の波を塞ぎ止めることが出来ないということを内外にいま一度誇示したものである。

朝鮮人民の敬愛する首領・金日成主席 キムイルソン

はつぎのように述べている。

「搾取と抑圧のあるところにはかならず人民の革命闘争がおこるものであり、圧制者の暴圧が強まれば強まるほど、それに反抗する人民の闘争はいっそう組織化され、頑強になるものです」(『南朝鮮革命と祖国の統一』未来社刊・四五三頁)。

最近の南朝鮮での民主化闘争を觀るならば、朴正熙傀儡一味の苛酷な弾圧、特に「一・八緊急措置」以後の弾圧のもとで、過去の六〇年代、七〇年代初期の闘争を基礎にして、強い組織性、高い政治意識性、巧みな戦術に支えられていることが分かる。

今年の四月に決起し、現在、判決で三〇人以上の終身懲役・死刑が下されている民青学生連事件を觀るならば、その組織性と政治意識性の高さを理解することが出来る。

ちなみに、南朝鮮の青年学生は一九七〇年四月一九日、四・一九人民蜂起一〇周年に際して、ソウル大学文理科、法科、高麗大学などソウル市内の各大学の学生総会で「白書」を発表し、一九六〇年代の学生運動の総括にもつき七〇年代の運動方向を示したことがある。それは民族運動・民主運動・民権運動を志向し、①対日隷屬化反対、②大衆の生存のための闘争支援、③反ファッショ民権運動強化をめざし、学生たちはこの方向に従っ

て一九七一年に軍事教練反対、不正腐敗反対を掲げて闘争を繰り広げた。朴正熙が「三選」を企図した一九七一年春、南朝鮮の言論、宗教、法曹界などの代表一〇〇余名が、四月一九日ソウルで「民主守護国民協議会」を結成し、同時にソウル大、高麗、延世、成均館、西江、慶北大など一三大学の代表が「民主守護全国青年学生連盟」をつくり、「韓国キリスト教青年協議会」を結成した。今回の「全国民主青年学生総連盟」はその決議文で、民衆的・民族的・民主的運動を志向しているばかりでなく、南朝鮮学生運動のこのような流れから觀ると、「民主守護全国青年学生連盟」などの經驗を汲み、そのような流れを受け継ぎ「韓国キリスト教学生総連盟」とも関連した闘争組織とみることが出来る。このような闘争組織をもち、具体的な闘争計画の上に今年四月三日に全国各地に一斉に闘争の炎が燃え上がったのである。また、このような強い組織性ととも、その政治意識をみるならば、宣言文と決議文で「崇高な

民族民主戦列の先頭に立ってわれわれの体を燃やしさげようとし、「最後の一人まで、最後の瞬間までたたかうことを歴史と民族の前に厳肅に宣言する」としているばかりか、印刷物『民衆の声』では、「暗くつらかったわが山河にわれわれすべてがたちあがり新しい国をうちたてよう／日本人もヤンキーもわれわれ

は嫌いだ／座して死すよりも戦って勝利をおさめよう」と、格調高い闘争決意を披歴しているところにも現われている。また、詩人金芝河は死刑の判決を受けた法廷で、「『維新』独裁打倒のみが、この民族を救う道である。学生だけが希望である」と陳述した。このように、南朝鮮人民の闘争は死を覚悟しての闘争であ



「連帯を求めて」第二次ハンスト

り、その政治意識性の高さは、不敗の保障となるものである。この政治意識性の高さこそが、朴一味のどんなに苛酷な弾圧のもとにおいても滞まることなく反ファシヨ民主化闘争が継続展開される保障なのである。九月中旬以後の闘争を觀るならば、九月一九日慶尚南道ウルサンの労働者三〇〇〇名が生存権と民主主義権利を要求して起ち上がったのをはじめ各地において、労働者が南朝鮮政權に反対して闘っている。そして、ソウル大学、高麗大学、梨花女子大学をはじめとする青年学生は、KCIAの監視、弾圧のもとで、集会、署名運動、追悼集会、懇談会、断食籠城闘争、試験ボイコット、投石闘争などといった多様な闘争形態を繰り広げている。

南朝鮮人民の民主化闘争は、祖国統一を願う正義の闘いである。現在の南朝鮮では、朴正熙のファシヨ弾圧によって統一を叫ぶことも禁じられている。また朴正熙と米・日反動が画策する「二つの朝鮮論」が国際世論と、全朝鮮人民の糾

弾にあつて破綻し、朝鮮の統一が前進しようとしているとき、朴正熙に残された唯一の道は人民を徹底的に弾圧し、統一を叫ぶ人民の声を圧殺することだけである。

朴「政権」は、危機を切り抜けようと狂乱化にあがいているが、南朝鮮社会に深く根を張っている人民の反「政府」・反日感情はますます積もっており、現在ソウルではただならぬ緊迫した空気が漂っている。朴「政権」は依然として一触即発の危機をはらんでいるといえよう。

南朝鮮人民の反「政府」闘争の今後の展望において注目すべきことは、青年学生たちの闘争とともに、①不正腐敗事件に対する民衆の動向、②各界各層人民のなかの根強い反日感情の激化、③大きな勢力を有する宗教人の動向、④さらに支配層内部、軍内部における矛盾の激化、⑤経済破綻、とくに失業者の増大とインフレ・物価の暴騰に対する不満などに結びつくとき、人民の反「政府」感情は爆発的な大衆闘争への発展する要素をはら

んでいるとみることができる。

これらの危機を脱出するためにかれらは、「緊急措置」につづくまた新たな暴圧措置を採るかも知れない。しかし、暴圧が強まれば強まるほど人民の反抗はますます強化されるものであり、朴正熙「政権」はあがけばあがくほどより強力な人民の反抗にぶつかり、かれらの滅亡は促進されるだけであろう。

「韓」・日関係が今のごとく朝・日両国人民の意志を無視して継続されるならば、また再び過去の暗い歴史が繰返されるだろう。日本政府が「韓国」一辺倒政策をつづけ、自己の利益のためだけに南朝鮮に経済進出し、朝鮮民主主義人民共和国に対する敵視政策を改めず、ひきつづき在日朝鮮公民の権利と朝鮮総連の弾圧をつづけるならば、朝・日両国人民は断固として糾弾するであろう。

勝利は戦う人民の側にある。南朝鮮青年学生・人民は、社会の民主化と祖国の自主的平和統一をめざす聖なる愛国闘争において、必らず勝利を得ることであ

らう。

(筆者は関西大学・キム・ヂョルムン)



문신첩독

영요금 冥冥 초 월수 연원 영건 출서 업조

독문신첩(獨文新帖)은 문신(文身)의 종류와 그 기원을 설명하고, 문신(文身)의 역사와 문신(文身)의 사회적 의미를 논하고 있다. 문신(文身)의 종류로는 문신(文身)의 종류와 그 기원을 설명하고, 문신(文身)의 역사와 문신(文身)의 사회적 의미를 논하고 있다. 문신(文身)의 종류로는 문신(文身)의 종류와 그 기원을 설명하고, 문신(文身)의 역사와 문신(文身)의 사회적 의미를 논하고 있다.

독문신첩(獨文新帖)은 문신(文身)의 종류와 그 기원을 설명하고, 문신(文身)의 역사와 문신(文身)의 사회적 의미를 논하고 있다. 문신(文身)의 종류로는 문신(文身)의 종류와 그 기원을 설명하고, 문신(文身)의 역사와 문신(文身)의 사회적 의미를 논하고 있다. 문신(文身)의 종류로는 문신(文身)의 종류와 그 기원을 설명하고, 문신(文身)의 역사와 문신(文身)의 사회적 의미를 논하고 있다.

獨立新聞 一八九六・四・七

キムソクポム 金石範あるいは濟州島 (上)

チエヂユ

●日本語で書くことの意味

末吉栄三

1° まったくの怠慢、ウカツという他な
 いのだが、在日朝鮮人作家・金石範
 の文章に私が初めて出会ったのは、つい
 この間、今年の八月であった。それは私
 の記憶に間違いがなければ(もしかした
 ら他の在日朝鮮人作家だったかも知れな
 いが)、「金芝河氏の有罪は言論弾圧と
 はいえない、韓国政府当局は文化政策面
 に寛大である」というような主旨の無責
 任きわまる政治的発言を、ソウルでの記
 者会見で行なった日本ペンクラブ代表団
 (藤島泰輔、白井浩司)をきびしく批判
 した文章で、沖繩の新聞(『沖繩タイム
 ス』)に載せたものだったと思う。急い
 で読んだその文章を、詳しく覚えていて
 わけではないが、想像力をその本質的武
 器とすべきはずの「作家」ともあろうも
 のが、その想像力のもっとも基本的な現
 われであるはずの、他人の身になって
 考える——他人の痛みに思いが及ぶVこ
 とさえ出来ないのか、という様な言葉で、
 その二人の日本人「作家」を批判してい
 たと思う。

489⑩

「金石範」という名前に、私は、その時初めて出会ったのかどうかも定かでない。あるいはどこかで名前だけは見た事があったのかも知れない。いずれにしても私はすぐに金石範の他の文章を読もうと思った。最初に手にしたのは『鴉の死』（講談社文庫）である。

今、思い出したのだが、やはり私は新聞でその名前を目にする以前に「金石範」という名前を見ていた。それも何度も気にしながら目にしていたと思う。それが先の文庫本であり、私はその文庫本を何度か本屋の書棚から取り出して、パラパラめくった事があったと思う。「金石範」という、はなはだ彫刻的なイメージを喚起するその三つの文字の連なりを、私は確かに、記憶のひだのどこかにしまいでいた。——名前の彫刻的なイメージにもう少しこだわれば、私はそれを沖繩に多いトラパーテン（粟石）の如く柔らかなテクスチュア（肌理）の持つ石材で作られた彫刻を何となく連想していたのだが、大学の講演会で実際に御本人を「

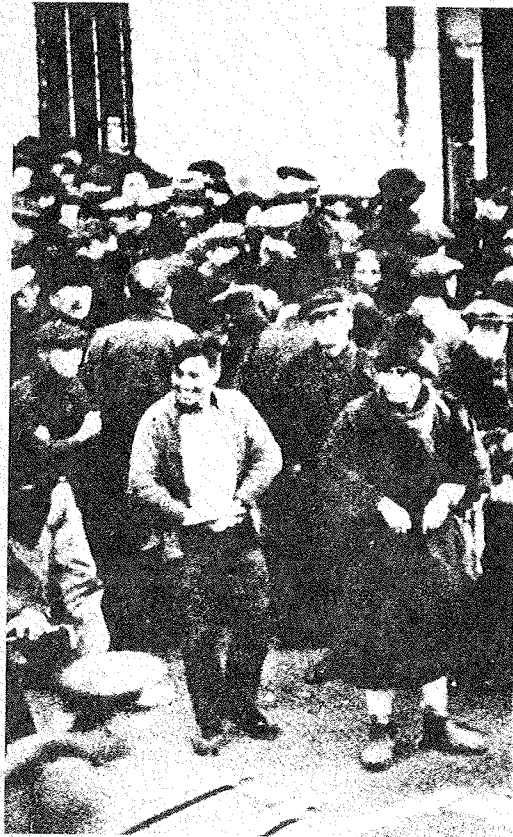
見た」感じは、むしろ、ブロンズの彫刻の方がよりびったりする様な印象であった。

新聞の文章を読み進むにつれて、その紙面に活字で打たれた「金石範」の三字は、私の目の中で急速に拡大しつつ起き上がってきた。その拡大し、今は屹立するに至った「金石範」の像の磁力に吸引されるようにして、私の記憶のひだひだのどこかにしまひこまれていた彫刻的イメージを伴った三文字も、その絡み付くひだを突き破って拡大し、私の目のすぐ前でその二つのモノは一体となった。そして、その質量とカタチを持ち始めたばかりの堅いモノは、全速力で私の心の奥の、これもある堅いシンビョウによって来たはずで、その重く鈍いモノ同士のおつきり合う鈍い音を私は確かに聞いた気がした。どうも持って回った言い方になってしまったが、しかし、いくらか深刻ぶって言えば、在日朝鮮人作家・金石範は、あたかも、地から湧き出てくるという濟州島の神々の如く、その様にも突然

に私の前に「湧出」して来たのであった。

1. 「日本語で書くこと」の意味

在日朝鮮人にとって、「日本語」とは端的に、支配者、侵略者、そして虐殺者の言葉である。在日朝鮮人というコトバの存在そのものが、「日本語」の引き摺っているけつして拭いきれないその様な意味を、何よりも明確に語ってしよう。支配者、侵略者、そして虐殺者の言葉としての「日本語」の意味を、おそらくは氏がものごとろついでから初めて「ふるさと」濟州島の土を踏み、「小さな民族主義者」として急速に目覚めていったという一三才の年以來今日まで、一日と刻みこまれていったそのすべての年月において、心と身体全体でいやおうなしに感じとって来たはずの在日朝鮮人作家・金石範が、まさしくその「日本語」で、まったくこん畜生であり、ドーナツ・ドーナツ・ドーナツ・ドーナツの「日本語」で、小説を書いていくとはどういう



事なのか。

△なぜ日本語で書くか▽という問いを、氏は、自分自身に絶えざる緊張感を持って問い続ける。強靱で、しかも張り詰めた糸の様にピンピンと響いてくる氏の文章の独特な感じを創り上げているその根っ子のところに、△なぜ日本語で書くか▽という、ヒトツマチガエバ自分自身

をも粉微塵に吹き飛ばしてしまう起爆装置の様にも危険で鋭い問いと常に対峙しつつ書いている氏の姿勢があるだろう。

もちろん氏は朝鮮語が使えないのではない。話し、読み、書くことさえ十分に出来るのだ。「私の中の母国語が、私の母国語でないものを越えることができない」し、日本語の方が「母国語より

駆使しやすい」と言っているが、それでも金石範氏はその朝鮮語を、ほぼ日本語と同程度には使いこなせるはずであるから、「母国語より駆使しやすい」という事が、表現の手段として「日本語」を選ぶ根本的理由にはならない。ここでもう一度△なぜ日本語で書くか▽という問いに戻れば、それはこういうふう書き換えられる。△朝鮮語でも書き得るにもかかわらず、なぜ日本語で書くのか▽と。

「日本語を通してそれを媒介として（つまり日本語は朝鮮と日本とをコミュニケーションする一つの手段としてあるとして）、在日朝鮮人の生活や意識などのこと、そして朝鮮のこと、朝鮮と日本のことなどを、つまり朝鮮人として、いいたいことを日本人に向って訴える、あるいは伝達するというところにそれは尽きる」（傍点―末吉・金石範「言語と自由―日本語で書くということ」）

「ことばの呪縛」所収）

氏に限らず在日朝鮮人が日本語で書く場合の一般論として、大雑把に言えばその

様にいえる。氏は言っているのだが、この単純明解な言葉は、しかしそれほど単純な事を言っているのではない。つまりそれは、その文章の發表される場所が日本なので当然大多数の読者は日本人であるはずであり、しかも、日本語の方が母国語（朝鮮語）より駆使しやすという条件のゆえに、日本語で書くのだと言っているのではない。本質的な事は、朝鮮人Vは日本人Vに（一般的にどこかのクニの人間というのではなく、日本人にV「言いたいこと」が山ほどあるのだという事であり、そのためにこそ、日本人の誰もが理解できるコトバである「日本語」で書いているのである。もちろんそれらのコトバは日本人Vにのみ向けて発せられているのではなく、在日朝鮮人自身を含む他のクニの多くの人々へも向けられていることは確かだが、それでもそのもつとも鋭い鋒先は疑いもなく日本人Vに向けられているはずだ。金石範氏が日本語以外の外国語をどの程度自在にし得るのかは知る由もないが、た

とえば氏がフランス語を少なくとも日本語と同程度駆使し得るものとしても、やはり氏はその文章の多くの部分を日本語で書くはずだと思われる。

「朝鮮人としていいたいことを日本人に向って訴える」ために氏は日本語で書いていく。しかし朝鮮人がその表現の手段として日本語を選んだということは、特にそれが支配者、侵略者、そして虐殺者のコトバであるということを考えれば、大変に危険な選択であることは論を待たない。コトバは本質的に、そのコトバを使用する集団のもろもろの感性やもの考え方を自身の内に内包している。たとえば金石範のよく引用するキム・ギョクの文章をマゴ引きすれば、

「朝鮮の社会や環境において動機や情熱が盛りたてられ、それ等に依って摺込んだ内容を形象化する場合、それを朝鮮語でなしに内地語（日本語のこと、

注一末吉）で書こうとする時には、作品はどうしても日本的な感情や感覚に禍されようとする。感覚や感情や内容

は言葉と結び付いて始めて胸の中に浮んで来る。極端に云えばわれわれは朝鮮人の感覚や感情で、うれしさを知り悲しみを覚えるのみならず、それらの表現は、それ自体と不可離的に結びついた朝鮮の言葉に依らねばしっくり来ないのである。例えば悲しみにしても悪口にしても、それを内地語（日本語一同）で移そうとすれば、直観や感情を非常に曲りくどいまでに翻訳して行かねばならない。それが出来なければ、純然たる日本的な感情にすりかえて文章を綴るようになる」。

だから、

「内地語（日本語）で書こうとする人々は、作者が意識しているといかないとにかかわらず、日本的な感覚や感情への移行に押し負かされそうに危険を感じる」（傍注一末吉・金石良「朝鮮文化通信」一九四〇年）

ということだ。金石範はこのようなコトバそのものの内包している「呪縛」（この場合は日本語の呪縛）をいかにすれば解き



得るかと思問し、その条件のもとで「作家主体の実践的な行為」に裏づけられた想像力によって「言葉が、言葉（日本語）としてその言葉（日本語）を越える」地平に浮上し「私は日本語によって例えば朝鮮的なものを——その朝鮮的な感性を土台にして——書きうるだろう」という結論に達する。日本語によって、「朝鮮

的なもの」——氏はそれをよく朝鮮的な体質、体臭▽という言葉で表現する——を抜き出すということはとりもなおさず、「日本語の中に（新しい）一つの可能性をつくり発見していく」作業に他ならない。事実金石範は実作でそれを成し遂げている。（私はその朝鮮的な体質、体臭▽の特に濃厚な作品として『鴉の死』

の連作と『万徳幽霊奇譚』を第一にあげる。）

大江健三郎はそれを次の様な言葉で述べている。

「……われわれ日本の作家が、日本語の世界でなし遂げていない、新鮮な発見というものがある。（中略）それはどこからくるものだろうかと考えますと、いま僕は、やはりそれが、外国語で書いているということからくるものではないか、翻訳してあらわれるというふうなものではない、それは在日朝鮮人として、朝鮮語と日本語というものを、二つ自分の内部に持ちながら、その二つの言語が内部で争い合っている、あるいは対話の関係を、あるいは弁証法的な関係を保っている、その時にあらわれる言語の発見ということなのであらうと思えます」（傍点―末吉・大江健三郎）

金石範自身は、日本語で書く時の心のありようを、

「ややもすれば片隅の方へ押しつけら

れやすい朝鮮語に、私は私の内部で光をあてねばならない。そしてその内部で朝鮮語が私自身を照らし出しているような緊張を継続せねばならないのである。私は日本人が日本語で書く場合のように、即自的には日本語で書くわけにはいかないものであって、だから私が日本語を書いている状態は、他人の家の鏡の中の自分を見ている意識の状態と似ているといってもよい」（傍点―末吉・金石範、前掲書）

金石範は、「母国語」である朝鮮語ではなく、支配者、侵略者、そして虐殺者の言葉である「日本語」（外国語）で書くというまさにそのことによって、全身を、血の一滴までも緊張させ、危機感を常に磨きあげていく。私は随分前に読んだ大江健三郎の「危険の感覚」という短い文章を思い出す。それはオーデンの詩に喚起されて書かれたものだった。

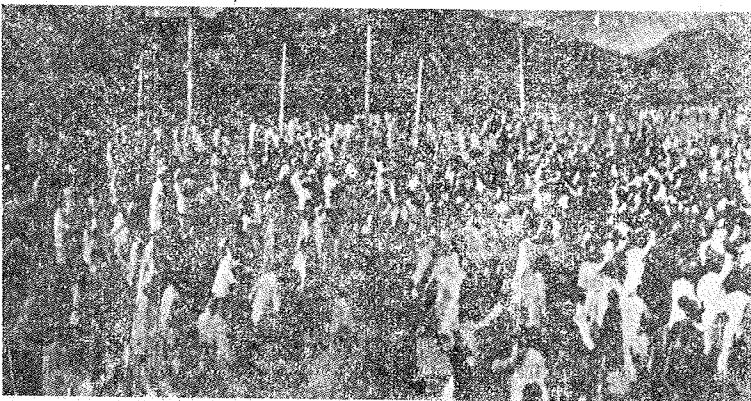
―危険の感覚は失せてはならない
道はたしかに短かい　また険しい
ここから見るとだらだら坂みたいだ

が

その文章で大江は、自分は危険の感覚があるかどうかで芸術や人間を価値評価するといひ、また、観察力にも「危険の感覚にみちた人間の観察力と、大船に乗った気持で悠々とした観察者の観察力と」の二種類があつて「僕自身は危険におびえている観察者のひとりでいたい」と言ひ、さらに、「危険の感覚を持ち続ける事がどのような意味をもつか？ というならば」、「それが人間の威厳ということではないだろうかと思う」と書いている。金石範の文体こそそのようなものだろう。そして、その強靱で、鋭く張り詰めた文体は、絡み付いてくる「日本語の構造」とでも言えるものを、トーチカをつぶす戦車のように破砕しつつ乗り越えていく。

（つづく）

（ 筆者は関西大学工学部・助手
すえよし えいぞう ）



三・一運動のデモ

キムソクポム

金石範氏の二、三の作品にふれて

● チヨソン 朝鮮を実感するために

小川 悟

はじめに

在日朝鮮人作家もしくはその作品について論評するようにとのことである。正直いって私にはその資格があるとは思えない。というのは、それほど多く読んでいないし、また在日朝鮮人作家に関するイメージが確固とでき上っていないからである。イメージが確固とでき上っていないということは、私の在日朝鮮人作家に関する認識が欠乏しているからである。同時にそれは、「朝鮮」チヨソンそのもの

に對する私の認識の稀薄さによるものであろう。しかし今「朝鮮」を問わなければならぬ。そしてまた「朝鮮」を問うことは「日本」を問うことでもある。「日本」を問うことなしに「朝鮮」を問うことはできない。当然である。しかしこの当然のことに關して、ともすれば私あるいは私たちの問いかけは図式的なものになりがちである。

先日、金石範キョクシキョク氏の講演を聞く機会を得た。彼は朝鮮人と日本人の連帯について語った。つまり、自己否定の上に立つて

のみ真の連帯が成り立つというのである。図式的な政治的諸關係を越えた次元で、この自己否定があるという具合に、私は理解した。だが、日本人として「朝鮮」を実感しない限り、この自己否定も言葉だけで終ってしまうことである。日本人がこの実感を持たない時「朝鮮人の立場からいえば、残念ながら日本における朝鮮人の尊厳は人道的に保証されていない。それは日本人の良識とはおのずとちがった問題であり、一つの政治状況である。日本には六〇万人の朝鮮人がいるが、そ

の多くは自己の島囚というイメージをぬきにして日本列島のイメージを浮び上らせることは困難だと感じているのである」(李恢成「北であれ南であれわが祖国」という言葉が生きてくる。朝鮮人が、日本で囚われていることを、われわれは知らねばならない。これは、在日朝鮮人に関する前提条件となるのではあるまいか。ところで在日朝鮮人作家の文学のことに言及しなければならぬのだが、先にいったように私にはその資格はないし、能力もない。たとえ何かを論じても、極めて貧乏なものになることは疑を容れない。

たとえば『鴉の死』について、私は何をいうことができるのか―そこには、済州島に象徴される朝鮮の現実がある。「現実」が一枚の鏡のようなものでなくて雲母のようなものであるならば、一枚一枚「現実」をめくっていくうちに「日本」が出てくる。いや、朝鮮の、いつてみれば済州島の「現実」をすかしてみれば「日本」がくつきりみえてくるのである。みえて

くる「日本」について、日本人の読者である私は通り一辺の批判を加えることはできても、それで「ああ胸がせいせいした」というわけにはいかないのである。なぜなら、私は「日本人」だからである。私は「日本人」であり、日本の歴史の一部であり、いつてみれば「日本」そのものみたくものである。

私は文芸批評家ではないから、上手に論評し、かつ上手に自分を語ることはできない。しかし小説は読めばよいのである。つまり読むことの中にすべてがあるのだといってしまえばそれまでで、別にどうということもないのであるが、金氏の作品は、いやこれは彼の作品だけに限られたことではなく、その他の在日朝鮮人作家の場合もそうであるが、読者に何かをいわせながっているようである。これは、作者の巧みな語り口によるものであるが、つい惹かれて読者は何かをふといいたくなる。そして次の瞬間には、想いに打ち負かされて言葉が出てきていないのに気付くのである。いらいらすれ

ばするほど、上手にわが想いを表現できなくなつて、やっと喋り出したことは的を得ていないということになる。

だから、今私が書いていることもきつたの外れということになるかも知れない。

一九四五年を生きた朝鮮人の姿

『鴉の死』は、バルチザンと警察との闘争を背景に、主人公基俊の何ともいえない悲痛さが行間からにじみ出てくる。

(行間からにじみ出てくるとは、これまた陳腐な表現であるが、たとえば『詐欺師』などにみられるような一種独特の鏡舌体の語り口は抑制されているので、このにじみ出るといふ表現はさほど陳腐でもなからう)。米軍の通訳でもあり、一方ではバルチザンとも通じている主人公は、作者のその他の作品の主人公たちの原型でもありと思われる。基俊は『一九四五年夏』の金泰造であり、『詐欺師』の白東基であるといつてもあながち誤りではなからう。日帝からの解放後の朝鮮

・濟州島の韓国政府ならびに米國に対する人民の凄惨な抵抗と闘争がこの作品の背景になっているのであるが、この闘争は「濟州島の総人口約三〇万人のうち、すくなくとも一〇万人をこえる人びとが殺されたのである。足かけ八年かかって、パルチザンは鎮圧され、そのごく一部は帰順した」(「泉靖一」「鴉の死」書評)という結果に終わった。これが、主人公基俊の生み出された背景である。

これは、韓国の背景でもある。水の皮膜のようなものに包まれた主人公と、パルチザンの首を持ち歩くグロテスクな爺さんは、実に見事にこの背景と調和している。一九四五年は、日朝両人民にとって真の解放の年であったのか。いや、こういう設問はよろしくない。いかなれば、この年は日本人にとって「終り」の年であり、朝鮮人民にとっては「始まり」の年であった。そうであるべきだった。しかし、実際には何が終わりが始まったのか。

「……却ってその底からほのかな充足

感さえ生れてくるのをおぼえた。それは何か再生する生命感の芽生えのような動きでさえあった。金泰造はふとつぶやくようにして、これでおれは一步まえへ出ることができるかも知れぬと思つた。……ああ、ここはソウルだ。ここは独立祖國の首都ソウルなのだ。独りつぶやいてソファを立ち上つた金泰造は、明るい窓の方へ歩み寄つて行つた」(「一九四五年夏」)

この時、金泰造の眼前の窓は明るかつた。彼は、この窓の明るさに前途への希望をみた。そしてその希望は可能のはずだった。しかし、この結末から何が始まったのか。朝鮮人でありながら「日本人」であらねばならなかつた金泰造、かつては日本陸軍の将校であつた豊川成弘こと李成植、この二人の対比は私たち日本人の読者を深く考えさせる。金泰造の言葉を借りていえば、「転向」した陸軍少尉豊川成弘こと李成植を、私たちは決して非難することはできないのではないか。金泰造の言葉に対して、李成植は

「おれが日本人として精いっぱい生きてきたのに、日本の國家も日本人のだれもおれに責任を持たなかつたんだ。おれ自身も責任を持たなかつたんだ、持ちようがなかつた。……日本の天皇というのが朝鮮人に対して何の責任を持つたというのだ。……それで、それでおれは自分で朝鮮人になろうとした。それがどうして転向なんだ？」(同右)

この二人の会話は、図式的な転向論で片づく性質のものではない。「日本人」にさせられた朝鮮人が、再び朝鮮人に戻るのである。ここには、思想的闘争の次元を越えた心の葛藤がある。金泰造の眼には、李成植がまことに図々しい男として映る。しかし一読者としての私は、李成植にも一人の朝鮮人を見るのだ。金泰造が朝鮮人であるのと同じように、李成植も朝鮮人なのだ。

金泰造に始まりがあつたのと同じように、李成植にも始まりがあつたのだ。『一九四五年夏』は、四部作の形式を

とった作品である。日本・大阪で育った主人公金泰造が完全に「日本人」になりきれないすなわち「皇民化」されない朝鮮人として描かれている。彼が目指す新天地は中国である。重慶には朝鮮の臨時政府がある。彼は徴兵検査を機会に朝鮮に渡る。彼をこうして一つの冒険に駆り立てたのは、たとえば日本陸軍の将校になった李成植であり、日本人化すること存在証明を獲得しようとする朝鮮人たちである。朝鮮人を日本人化しようとする「日本」の中で、彼は自分の存在の場所を発見することができない。たとえば、徴兵検査官にビンタをとられて「ハイッわたくしは忠良なる帝國臣民であります」と叫ばねばならない朝鮮人である。この叫びは、次のビンタを防ぐ護符の効果もあったが、彼は反射的にこう叫ぶことで身を守らねばならなかったのである。しかし彼は、病を得て志を果すことはできないのだが、その代りに秀れた朝鮮の革命家に出会うことになる。そして、再度訪問した故国で「希望」を見出すことに



士千車乱——日本公民館への襲撃

なる。

「日本」の中で金泰造は「日本」に属し得なかった。さりとて、完全に「朝鮮人」を主張すれば「日本」の中で生存権を獲得することはできなかった。彼は、李成植のように「豊川成弘」になることもできなかった。「忠良なる帝國臣民」であると叫びながら、一方では天皇の写真に「挑む」のである。この「挑む」の結果、彼は確固たる自分を見出すことになる。

「そうだ、おれはあのと時から変わった。自分をようやく越えるきっかけを、あのとときの便所の中の古新聞が与えてくれた。おれの人間はあのとときの便所の中で決ったのだ。おれが先刻、たとえばわたくしは忠良なる帝國臣民であります」というわが胸をえぐる奴隷のことはを吐いたとしても、ともかくおれがここまでやってきたのは、すでにあのとときの便所で決定していたことなのだ（同右）

九州島での徴兵検査の際の、彼の独白である。天皇の存在は、朝鮮人にも日本人にも重くのしかかっていた。しかし、

同じ赤字せきじとはいうものの、朝鮮人はあくまで強制された「赤子」であった。天皇は、朝鮮人にとっては民族を極措するもの以外の何ものでもなかったのである。朝鮮を日本の属国たらしめるという程度の生易しい意図が、日本の天皇を頂点とした中枢部にあったのではない。恐るべき帝国主義的侵略思想は、朝鮮において徴兵制度を実施することで朝鮮人を肉弾とし、あまつさえ朝鮮の文化そのものをも抹殺しようとしたのである。「内戦一体」とか朝鮮人の「皇民化」というのは、朝鮮人を民族として抹殺することであった。そのために朝鮮人が発行していた新聞の題号から朝鮮文字を削除させたりした。そして、いまには、朝鮮語の学問的な研究そのものまで総督府の彈圧の手は及んできたのである。「山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』」

朝鮮人と「皇民」とのはざま

天皇は、今も昔も日本の「象徴」である。象徴とは、生命なきものを意味する

のではない。絶対的な権威として、そこに生きているものである。金泰造の決意は、この権威に挑むことであったし、またそれが彼の「始まり」であった。それに対して李成植の「始まり」は、実は二度あった。一度は日本帝国陸軍の将校になることで李成植を「豊川成弘」に変身せしめて、朝鮮人であることを自ら停止しようとしたことであり、次には再び李成植に戻ってそこから朝鮮人としての「始まり」を持つこととしたことである。いわば再転向である。金泰造には、天皇の写真に挑んだ時にすでに彼の「始まり」への道は拓かれていたのである。この二人の朝鮮人の「始まり」は、実に興味深い。もちろん私たちは、この二人を転向（再転向）と非転向という形で図式化して扱えることができるかも知れない。

しかし、天皇の存在によって興えられた影響は、日本人の場合と朝鮮人の場合とは全く異ったものであった。日本人の転向・非転向の問題は、朝鮮人の場合のようにわが内なる「民族」そのものと

かわるというような凄惨な意味合を持たないものであった。朝鮮人としてか日本人としてかという二者択一は、生か死かという二者択一に等しいものではなかったか。すでに述べたように、ここには私たち日本人が体験したことのない恐しい心の葛藤があったはずである。それが図式的な転向論で扱え切れない所以である。朝鮮を問うことは、「日本」を問うことだと私は思ったが、それは今なお天皇を背負っている私たち自身を問うことに他ならない。私たち自身を措いて、私たちは「日本」を論じることができないのではないだろうか。朝鮮人に言及する時私たちがともすれば客観的になりがちなのは、この私たち自身を問う作業を経ないことによるし、また私たちの「天皇体験」を既往のものにしていることによるからである。金泰造や李成植には「始まり」があったが、よくよく考えてみると、私たち日本人には同じような「始まり」はなかったのである。

社会的腐敗と墮落の現象型態は、日本

も韓国も変りはなさそうである。権力が富と併存し、富に支えられている限りにおいて、社会的腐敗と墮落は必然的に生じてくる。田中角栄が広大な土地の所有に執念を燃やすのと、朴正熙が終身大統領でありたいと希うのは本質的には同じことである。この二人の執念は、利権以外の何ものにも燃え上らないし、「敵」に対しては怨念となる。「敵」は「アカ」であり、「共匪」である。それは実在であり幻影でもある。

民衆にひそむ反権力の契機

『詐欺師』は、狩られる人間と狩る人間の対比を実によく描き出している作品である。主人公白東基のこともし出さずユーモアは、作品をきわめて個性的なものにしている。東基は、その名前がありふれたものであるのにもかかわらず、自分ではそれに、次のような意味づけをしている。

「東というのは、白東基の考えでは東

の方角を指すものであり、その東の方角にはいつのまにか日本の国が見えるようになってきていた。兄の東訓がいる日本の国が、東に重なって来たのだつた」(『詐欺師』)

要領がよくなくてあまり能力もなさそうな夜警員の白東基は、いつの頃からか「五族」の支配している国から脱出して、東の方、すなわち日本へ行きたいという願望を持つようになる。彼が自分の名前に興味づけをするようになるのは、この願望と無関係ではない。日本には彼の兄がいて、済州島で働くより日本で働く方が収入がよいと東基は信じ込んでいる。

日本への憧憬は、ついに彼を詐欺師にしてみまう。汚職と泥棒と貧困とで汚れたこの島では、警察官ですら哀れな下働きの夜警員から賄路を取るのである。東基の絶望と日本への憧憬は、こういう状況から生れる。従弟の母を欺いて四〇万ウォンの金を取ることに成功するが、露顕として捕えられる。官権は、彼を「共匪」として捕えるのだが、本人は単なる詐欺

であると主張する。しかし、檻房の中で彼を「共匪」と信じている同囚から暗示を受けて、彼は自分を「共匪」だと名乗り、かつ「共匪」であると信じてしまう。大体こういう筋であるが、軽妙に描かれたこの作品には一種の恐ろしさが陰されている。その恐ろしさは、古自転車を押して夜の坂道を喘えながら上って行く白東基の、あるいは日本に憧れている白東基の、そしてそのために四〇万ウォンの大金を詐取した白東基の意識の潜在域に陰されているものである。

権力の鞭の下で、民衆はまことに小羊のように生きているのであるが、夜警員白東基という民衆の一人に、私たちは民衆そのもの持つ恐ろしさをうかがうことができるようである。東基が同囚の言葉に釣られてついには自分を「共匪」だと思ひ込むのは、けっして彼のたんなる自己錯誤ではない。それは彼の日本への憧憬と同じように、「共匪」という代名詞によって表現される反権力への願望に他ならない。この願望は常に民衆の意識の



オモ二

潜在域に潜んでいる。いってみれば、小羊は常に狼に変身する可能性を秘めているのである。

『詐欺師』に描かれた済州島は、『鴉の死』におけるのと同じように韓国の現実である。白東基の切ない願望は、この現実からの逃走であったはずなのだが、それが従弟のパウイへの、「共匪」への

変身への願望に変わっていく。

「『防共、防諜』……瞬間、白東基はこれは自分のことではないのかと思つた。『共』も『諜』もそれは自分なのだ。でかでかと書かれた自分のなまえなのだ。その四文字は『防白東基』を意味するのであり、彼はいまや自分のなまえが、町の真中の公衆の面前に

張り出されているのを見た。車が走るにつれて到るところに自分のなまえがあった。自分の顔があった。腕を振り、足をひろげて動きだした。しかも彼はいまその公衆のなかを走っているのである。……白東基は自分が脹らむのを感じた。魂も軀も脹らみ、どんどん脹らんだ。それが共匪の主謀者だという自分の感じをたしかなものにして行く。その膨脹感のなかで自分がパウイのイメージといっしょになって行くようになった」(同右)

甲斐性のない夜警員は、今や「共匪」の頭目になった。小羊が狼に変身したのである。韓国と呼ばれる朝鮮の南半分地域では、徹底的に「共匪」狩りが行われ、権力は常にその幻影に対して発砲している。黒眼鏡をかけた権力者の手先たちは、昼夜を分たずこの狩りをつけている。しかし、この作品に描かれたように、無数の白東基が存在していることに気が付かないでいる。彼らは、今日も古びた自転車を押して坂道を上っているのであ

る。そして、夜間外出禁止令を犯して通行している「夜通者」からいくばくかの賄路を受け取るかも知れない。

玄海灘一つを越えようと、そこはもう「日本」である。海を渡ってくる朝鮮人にとって、そこは決して理想郷ではない。ここでは、朝鮮人はまさしく「島囚」として生きねばならないのである。そして、朝鮮人を「島囚」として存在せしめることで、あるいは韓国の朝鮮人を「島囚」として生かしめることで、海の向うの国「日本」は肥えていくのである。

すでにいったように、私には在日朝鮮人を、あるいは朝鮮人そのものを、ひいては在日朝鮮人作家を論じる資格はない。しかし、たぶんこの「島囚」をつきつめて考えることで、私たちは今一歩足を踏み出すことができるのではないだろうか。私たちは、多くの基俊や金泰造や白東基が存在することを実感できるようにならねばならないのではないか。

（ 筆者は関西大学文学部・教授 ）

おがわ さとる

《訂正》

前号掲載の『主要資本主義国家経済簡史』の訳文に関して、訳者より次の訂正があります。

◆二五頁・中段・五行目および一三行目
「等級身分制度」↓「身分等級」

◆二八頁・中段・二二行目
「ひとつに結合され」↓「結びつき」

◆同・下段・一九行目
「雕刻」↓「彫刻」

◆二九頁・上段・六行目
「等級身分制度」↓「身分等級」

◆同・一二行目
「西方資本主義列強」↓「欧米資本主義列強」

◆同・下段・二二行目
「海産品」↓「海産物」

◆同・一四行目
「二・五倍」↓「三・五倍」

◆同・一五行目
「一三倍」↓「一四倍」

◆三〇頁・下段・二二行目および三二頁・下段・一〇行目
「西方国家」↓「欧米国家」

◆三一頁・中段・六行目
「等級身分制度」↓「身分等級制度」

◆三二頁・中段・三行目
「略奪」↓「収奪」

訳者の勉強不足と怠慢から、このように多くの誤訳をしてしまったことをお詫びします。とりわけ、二八頁・中段の大塩平八郎の蜂起の叙述の箇所では、大塩の蜂起が、農民蜂起や「打ち壊し」と直接的・組織的に結合されていたかのような訳になっていたので特に訂正しておきたいと思えます。

なお、この訳はシリーズとして原書から第六章・日本を継続して訳していきたくて考えていましたが、訳者の個人的な事情により、第三八号のみで終らざるを得なくなりました。

■ 書評

P・エマニユエル著
山村嘉己訳 『ボードレール』

追放の詩人とその官能的宗教

渡辺幸博

● サルトルのボードレール論と対比して

1

もっぱらサルトルを介してのみボードレールを理解してきたわたしには、エマニユエルのボードレール論を評する資格はないかもしれない。しかしながら一読して、本書が少なくともサルトルのボードレール論を意識して書かれていること

はあきらかである。事実われわれは兩者のあいだに、かなりの共通点を指摘できるのである。

そのことは本書の主題であるボードレールの宗教性の研究が「かれの性格と人生の大きな事件を考慮に入れながら、かれの心霊のなかに芽生えた胚子から始めて、かれの精神的な発展をたどることに

ほかならない」という著者エマニユエル自身の言葉によっても裏書されている。われわれはそもそもそこにサルトルの実存的精分析との共通の場を見るのであるが、また兩者の直接的相違点もまずここに見ることができる。

このことに関して、われわれは何よりも兩者の違いを、その宿命観の相違に見るべきであろう。周知のように、サルトルのボードレール論はボードレールの体験を内面的に甦らせることによって、かれの選択の意味を歴史的状況に規定された根源的事実としてあきらかにすることを自差すものであった。ボードレールの宿命がかれの選択し承認した宿命にほかならないという観点は、いうまでもなく根源的選択に人間の自由を見るサルトルの実存的精分析の基本的立場である。それに対して、エマニユエルにとって宿命とは「初源的所与」を意味するが、それはけっして生前に決定されている運命の意ではなく、子供のときから、あるいは母の胎内において形づくられる運命の

基本的性格を意味する。エマニュエルはそれを無意識といつてフロイト的に把握している。われわれはこの微妙な相違が両者のボードレール論を決定的に特徴づけるものであることを知ることができるのである。

しかも「この詩人とその少年期の宇宙との関係」が「かれの精神の基本的な構造を形づくっている」とする点において、エマニュエルはまったくサルトルと共通している。ただエマニュエルにとって、それは自らの孤独と同時に神秘的根源にも気づかされる宿命的条件であった。それはもちろん生誕という事実を、堪えがたい宿命、あるいは却罰と見るボードレール自身の言葉を出発点としている。そしてエマニュエルはそれを存在からの剥奪感と解するのである。「どうして生誕から出発してはじめないのか」というかれのサルトル批判はもちろんこのことに関係する。

ところで、生まれることが本源的に悪であり、成長自身が無限の転落であると

する感情が、善や統一への無限の憧れに対応するであろうことは容易に推察できるが、エマニュエルはボードレールの詩的活動の根源をまさにここに見る。その場合、ボードレールが「芸術を少年期のすぐれたひとつの状態」と見たというエマニュエルの指摘は、かれがこの根源を源初の状態への還帰と解したことを示している。ボードレールの宿命観と宗教観の根源がここに求められるのである。われわれはここにもサルトルとの大筋で的一致を見ることができ。かくてエマニュエルは「かれの神への関係の中心的方向づけは、かれの母との関係に含まれているように思える」と書く。

2

本書の第二章のテーマである「官能的宗教」とは、官能性と神秘性という二つのものによって折りなされる母を介して、源初へと還帰せんとするボードレールの欲求を示さんとするものにはかならない。

だが、エマニュエルはボードレールが母から二度追放されたと解する。生誕と母の再婚とがそれである。このように、かれは生誕を却罰と見るボードレールを強調するのであるが、これがさきに指摘したサルトルとの顕著な相違点となる。しかしわたしには、この相違も基本的にはさしたる意味をもっているには思われない。なぜなら、生誕に対する呪詛は終始再婚した母との関係に重ね合わされているからである。たとえ、エマニュエルが指摘する自然への憎悪のゆえに、自然的なものを極端にまでおし進めるエロチスムが「母に対する永遠の寡夫たる愛人」でありつづけようとしたボードレールの姿であったという一事をもってしても、自然への憎悪をただちに生誕の却罰感と結びつけるのは当をえているようには思えない。

この場合、出生の却罰という観念もむしろ母の再婚との関係から生まれたと見るのが妥当なように思われるのであるが、エマニュエルはこのことについては一切

触れていない。その意味ではサルトルの分析のほうが少なくとも明晰であるように思える。サルトルにとって、ボードレールが自然を拒まねばならないのは、それが与えられたものであるからである。すなわち、それは母に裏切られたボード

レールが積極的に孤独を望んだことに起因するといふのである。しかもサルトルは、それが全的に自然に合一したいといふ根本的欲求の裏返しにすぎないことを知っている。そのことは、ボードレールの崇拜する母が、動物的自然を昇華した母であつたことを知ればあきらからである。

にもかかわらず、エマニュエルはボードレールにとって自然が宿命的に悪の領域であつたと解している。それは八転落の結果Vとして生みだされたものにすぎないといふわけだ。かくてこの時点で、サルトルのいう存在は八汝Vとなり、ボードレールは「存在にとらえられた人間の生きた象徴となる」。

このように見てくると、ボードレール

の宗教性を主題とするかぎり、エマニュエルにとって八永遠の創世紀Vとしてボードレールを現実結びつけている八基本的条件V、八宿命的条件Vが問題であつたことが理解されよう。したがって、そこではボードレールの宗教性は自然、

運命と重ねあわせざるをえない。神は何よりも統一宇宙的非人格性(神の母性)であつたのである。ボードレールの宗教性が八胎内への不可能な帰還Vと結びつけられるのはそのためである。

かくて官能的な精神性といふボードレールの相反的な特性があきらかになる。いうまでもなく、それは呪われた存在とその救済を象徴する。自然的な宿命と精神的宿命のあいだでボードレールは引き裂かれる。しかも精神的宿命が挫折を約束するものであればあるほど、その裂け目は大きい。このボードレールに見られる相反性の事実については、エマニュエルとサルトルの認識のあいだに、とりた

て指摘しなければならないほどの差は見られない。違いは、これを自由の隠蔽

の相のもとに見て、ボードレールの在り方を八存在と実存Vとのあいだの絶えざる相互移行に見るサルトルに対して、エマニュエルがあくまで永遠に失われた統一性への願望という考えのもとに、それをとらえている点にある。

しかしこの相反性をめぐるエマニュエルの叙述は、サルトルと違った意味でボードレールの在りようを見事に証して見せてくれる。現実的墮落に落ちこまざるをえなかつたゆえにあくまで統一を求めたのか、徹底して統一を求めたゆえに現実には墮落でしかなかったのか。おそらくその両方であつたろうが、いずれにしても結局は現実のなかに統一を求められないボードレールにとって転落と追憶は一体とならざるをえない。この状態をエマニュエルは「この矛盾する姿はほとんど恒久的な状態を作り出し、詩人はたえずそれを描写し続けたのであつた」と要約する。かれはボードレールの内的生活が実存であるとともに、またその美的生活でもあつたこと、詩人の内的苦悩が同

時にその認識でもあったことを明確に描きあげるのである。

このような八自らの人生を罰せられたものだと知った精神にめげえる諦念と絶望に、エマニュエルは疑惑と信仰をそれぞれ対応させる。ここでは絶望はただちに深淵への情熱になるが、それはまた転落の意識でもあるというのだ。そこには救いのない郷愁と、きびしい明晰性への喜びがある。エマニュエルがボードレールの宗教のなかに美の先験性を見るのはそのためである。つまりボードレールの追憶がその宗教の神秘的な形態であり、美がその追憶によってとり出された本質であることがあきらかにされる。

ここにボードレールの相反性の根源がより明確になる。たえまない失墜とあくことなき明晰性、高きを求める叫びとその悲劇的な確認、神への祈願、上昇せんとする願いは悪魔への祈り、下降する喜びと交錯する。『悪の華』全篇を通じて見られる欲求不満の蕩児ボードレール、歎柔のなかに死を見、腐嗅を嗅がざるを

えなかつたボードレール、自分の心と肉体とを嫌悪の情をもって眺めざるをえないボードレール。エマニュエルはそこにも「たんなる追憶による復権ではなくて、真の救済の希望」を読みとろうとする。ボードレールの美が自然の相反性をそなえ、しかもそれを証言する崇高さのゆえに、仮装した宗教といわれるのも同じ観点からである。いうまでもなく、そのことはボードレールにあって美的動機が到達しえぬ完成と、耐えがたい不完全という二重にして一である感情であつたということにもとづいている。無限を願う有限を憎む呼びかけ、けつして達することのできない崇高への呼びかけ、エマニュエルはこれを自らを裁く、永遠に直面した人間の尊厳性と解する。したがって、ボードレールの宗教性は当然「精神的」というよりは……心霊的であつた」ことになる。

自分が追放されていると感じるがゆえの拒絶、そこには復讐とともに贖罪の可能性が存在する。エマニュエルも指摘し

ているように、ボードレールはおそらく人間を生まれながらに善であると信じるユゴーなどの立場を知っていたに違いない。しかし現世の一切を悪と見るボードレールにあって、美はたとえそこに贖罪が現われるとしても、悪としか結びつきえないわけで、認識もその悪の明視につけることになる。ボードレールにとって、いわゆる近代的合理的精神が無縁の存在でしかなかったのもそのためである。とはいえ、われわれはかれの非合理的性向のうえに、ただちに現代的精神の予徴を読みとるわけにはいかない。そしてそれはまことに皮肉ではあるが、本書においてエマニュエルが解きあかさんとした、その宗教性と深くかかわっていると想われる。なぜなら、かれのいう追憶の精神の希求する絶対的統一体こそ、ボードレールの実存を隠蔽するものであつたからである。

もちろんそうはいっても、われわれはボードレールの作品に充満する実存的苦悩を否定するわけではない。いやそれこ

そがこんにちにいたるまで、ボードレールがあたえつづけてきた大きな影響の根源であることを認めるにやぶさかではない。問題は訳者も指摘しているように、このかれの非合理的性向が「近代合理主義の行きづまりへの痛烈な反省の表出の一環」であることは確かであるとしても、その意味の十分な考察こそが深く見きわめられるべきだということにある。

たとえばボードレールの苦悩を介する魂の働きは、明晰な活動であるゆえに、自己浄化を可能にする。またそれとの連関から、この世を悪と見るボードレールの立場は、自然を善と見る楽天的ブルジョア的世界観を鋭く告発するものであったことは疑いない。しかしながら、その自己浄化はあくまで現実を否定することによって行われているし、悪に立脚する立場はブルジョア的悪が明白となつたこんにちにあつては、逆にブルジョア的世界観を弁護するものでしかないであろう。その意味でも、ボードレールのもっている新しさは、つねにその古さとの連関の

うえにとらえられねばならないであろう。このことはボードレールの内的生活が、実存的新しさと懐古的統一性との相反性においてとらえられうることにあきらかである。そして神の問題はまさに後者との関係において主題となる。

このように問題の所在を明確にしたうえであれば、本書の叙述はきわめて鮮明であり、ボードレールの内的生活を生きた生きと描きあげること成功しているし、本書の主題である宗教をめぐる論述にしても、きわめて慎重、綿密であつて説得的であるといえる。例えば、ボードレールの実存的詩が神への徹底した反抗（悪魔主義）に支えられていたことは否定できない事実であるが、エマニュエルはまさにこの神を拒否する詩人に照明をあて、そこに見られるその苦悩を見事に浮き彫りにしている。ただ注意すべきは、そこにこわれわれはボードレールの生きた時代の精神のかげりを読みとらねばならないということである。

しかもエマニュエルも結局はサルトル

とひとしく、ボードレールの神に対する闘争が八母を奪われたV時点において開示されたことを認めている。さらに「ボードレールが現実生活によって得られる記憶と無関係に……生命への追憶もつていたかどうかをはっきりさせることはむずかしい」ともいつている。このことはさきに指摘した先述への呪詛の根源に對して、エマニュエル自身確たる信念をもつていたのではないことを示しているように思える。われわれがこの点について、とくにすぐれてサルトルの分析との深い相違を認めたいとするのはそのためである。

そのことは「サルトルの批評がこの詩人の侵すべからざる尊厳を傷つけ、精神の公正な生活を否定している」というエマニュエルの言葉についてもいえることである。なぜなら、サルトルにとつてあくまで歴史的状況におけるボードレールの選択の意味が問題であつたのであり、ボードレールの実存における自己欺瞞の実態の解明が問題であつたからである。

これらのことをべつとして、われわれはエマニュエルのボードレール論に十二分の賛意を表することができる。ボードレールの人生が追放であったからこそ実存的でありえたのであり、われわれの心をかくまでとらえ得たのは否定できない事実である。またこんにち、われわれは追放の意味をすでに亡びたもの、あるいはまさに亡び行かんとするものとの断絶の相のもとに見るべきであるが、このことについても、エマニュエルの叙述はボードレールにとって真・善・美なる理念のいずれもが永遠に砕け散っていることを明確に指示している。ボードレールはその失墜感、無関心から美的恍惚感によって救われるが、それとても美的感情が実存にはかならないからであって、美が理念的現実であったからではない。さらに神聖なるものという神秘的な言葉、八このロマン主義的常套句Vを肉化し深く掘り下げたところにボードレールの新しさを見るエマニュエルの感覚は、さすがに鋭いといわれるべきであろう。その

ことはボードレールの詩の内包する実存性についての指摘においても同様である。たとえば「言葉というものは、ひとたびその濃密さの限度にまで達すると、それを表現する人間そのものとなる。あるいはむしろ、人間がその言葉となる」などというのがそれである。

結論的にいえば、相反性こそがかれの作品を作りあげ、しかもかれを引き裂くものであったという基本的観点から、ボードレールの内的生活をたんねんに追求するエマニュエルの叙述についてはわれわれはまったく同感である。しかしあくまで苦悩を、神とかれとを結びつける仲介者とするエマニュエルの立論については、あえて何もいうべきことはない。かれはボードレールが自らの証人に天使を呼んだのだと信じたのだから。

評者は関西大学文学部・助教授
わたなべ ゆきひろ

お詫び

前号(第38号)に次の誤りがありましたので、ここに訂正させていただきます。

★『政治と歴史』の書評筆者、文学部助教授・渡辺幸博先生の名前が間違っておりましたのでここに訂正し、渡辺先生および読者の皆さまに深くお詫びします。

・目次および三三頁

渡辺博之↓渡辺幸博

・三九頁

(評者は関西大学文学部・助教授 わたなべ ひろゆき)

↓(わたなべ ゆきひろ)

★「書物の案内」(六六頁)に『女のからだ 母性と愛の真実』とありますが、『女のからだ―性と愛の真実』の誤りでした。

公理的立場からの自然数定義

山田 穰

誰でも一度は、数とは一体なんだろうと疑問をもった経験をおもちだろうと思う。ましてや受験数学で痛めつけられているとき、ふとそんな思いにとりつかれる。この本は、その疑問に対する現代数学の立場からの一つの回答を、具体的にそして比較的分かり易く示してくれたものである。

数理哲学的立場からのこの疑問に対する回答にはいろいろあることと思うが、それらについては私はよく知らない。しかし数学の立場からの回答は、いわゆる公理的立場からのそれである。もちろん

「整数は神様のつくったもの。他のものはすべて人間のつくった作品である」というクロネッカー（一八二三—一八九一の数学者）の言葉にも象徴されるように、数学の内部でも、数、なかならずその出発点たる自然数を公理によって定義してゆこうという姿勢を執ったのは、ほぼデテキント（一八三一—一九一六の数学者）あたりからである。彼は「数は人間精神の自由な創造物である」といって、数が先験的に、ましてや、神から授けられたものなどではないという立場に立った。このことによって数は初めて数学という

純粹な学問の枠の中に全面的に取り入れられたといえよう。そしてペアノ（一八五八—一九三二の数学者）によって必要にして十分な五つの公理が抽出され、それによって自然数が定義されるようになったのである。

公理といえただちに思い出されるのが「ユークリッド幾何」である。中学校で習うユークリッド幾何学は、もちろんその出発点を多くの直観に依拠している。しかし本来はユークリッドの幾何学原論に示されているように、幾つかの定義、公準、公理を出発点にして、現象空間の

幾何学を公理的に構成しようとして試みられたものである。そしてこの立場はすっかりそのままペアノの立場でもあり、ひろくは現代数学の基本的立場にもなっているわけである。

本書はI章でいま述べたような立場について、幾何学原論の中の自然数の理論(第VII巻—第XI巻)を例にとつて歴史的に概観する。II章ではIII章以下の話を理解する上で必要な概念である、集合、写像、構造について数学上の説明がなされる。そしてIII章で本題である自然数にかんするペアノの定義が述べられ、それを使って厳密な論理により、われわれが日常的に使用している算数を具体的に展開して見せてくれる。IV章では、このように定義した自然数を使って物の個数がなぜ数えうるかといった問題などいろいろと話されている。なお付録として数学にでてくるパラドックスについて述べてあるが、これは本題とは直接関係はない。以上が本書の内容であるが少し説明を

加えてみたい。

ペアノの公理とは次の五つから成立つ。

- ① 1という対象があり、Nはこの1を含む集合である。
- ② Nからそれ自身への写像 $\varphi: N \rightarrow N$ がある。
- ③ φ は単射である。
- ④ 1は $\varphi(N)$ に含まれない。
- ⑤ Nの部分集合Sが、 $1 \in S$ かつ $\varphi(S) \subset S$ という二つの条件を満足しているときは $S = N$ である。

そして、「この五つの公理を満たしている集合を自然数の集合といい、Nに属している要素を自然数という」というのがペアノによる自然数の定義である。そしてIII章では、この公理を出発点にして、加法、乗法、大小関係等、私たちが算数として小学校で習った自然数の基本的な性質を導いている。読者は「数学者とは、たかが算数のたし算を定義するのに、なんと、七面倒くさいことをやるんだらう」という感想をもたれるかも知れない。だ

がここで大切なことは、ペアノの公理を再度みていただきたい。1という対象があり云々といっているだけで、その1が具体的に何を意味しているかには一切ふれられていないことに注意してもらいたい。

すなわちNがどんな「物」の集合かということとは全く問題にせずNがもつべき構造(φ によって規定されている)のみが定義されているわけである。したがって「自然数」とは何かという疑問に対する数学の立場からの回答は、「ペアノの公理をみたす集合Nに属する要素を自然数という」ということになる。だからたとえばNをリンゴの無限個の集合とし、それを一列にa、b、c、d、…と並べて、その先頭のリンゴaを1と名づけ、 φ は、aをbに、bをcに、cをdに…映す写像とすれば、このリンゴの集合Nと写像 φ はペアノの公理を満たしていることは、少し確かめれば分かる。とすれば数学の立場でいえば、このリンゴ

の集合Nを自然数の集合としてもよいわけだ。

したがってこのときは先頭のリンゴが1になる。そして、このNを使って加法とか乗法とかが定義されるわけだが、そうしてできあがるのが「リンゴの算数」ともいべきものになる。これはもちろんナンシを使っても同じである。実際は、われわれはこの過程の逆の順序で算数を習って来ているわけだ。小学校一年生の算数の本には、リンゴの絵、花の絵、鉛筆の絵が書いてあり、そこでリンゴの算数、花の算数、鉛筆の算数を習うわけだ。そして「習練」の結果として、リンゴ、花、鉛筆という具体的「物」を抽象化した結果、いわゆる算数が理解できるようになったのである。

すなわち習練によって「物ばなれ」することが可能になったわけである。公理的立場とはそれを意識的に基本的立場に据えようとする立場である。これは現在の数学のもっとも基本的態度といつてよ

い。

一般の人々が数学をむずかしいと感じる一つの理由として、この物ばなれした上で相互の関係（数学という構造）のみに注目してゆきにくいことがある。たとえば小学校でよく経験することだが、分数が入るところで算数が急に出来なくなる子がいる。これもそれまでの算数（自然数の計算）の1、2、3…を物の個数という考えに捕われてしまっているという卵などはそう簡単に考えられない。卵を半分にしたらこわれてしまうのではないかという発想にならざるをえない。分数を理解出来るためには、自然数について物ばなれしていなければならぬ。算数ができて代数になったらわからなくなる子もいる。これも似たような戸惑いから分からなくなったに違いない。

このようにわれわれが習練の結果、物ばなれた上で $1+2=3$ をなんとも疑問をいだかず当り前と理解してきた立場から逆転して、公理を出発点とし（公

理には物は現われない） $1+2=3$ がどうして成立つかを示しているのがこの本である。この点をつねに頭にいれて読まない、ただ繁雑な論証だけが目について途中で投出したくなるだろう。

なおそのうちにつづけて下巻が出版されるだろう。これには有理数、実数をいかに定義していくかという問題が取り扱われるようになっていく。とくに実数の導入については、大学の講義でも多少説明はされるが時間的都合でどうしても詳しくは述べられない。この点を読み易く書くことは非常にむずかしいのだが、それを期待している。

△岩波新書・二三〇△

大阪工業大学一般教育科・助教 授
やまだ ゆたか

書物の案内

詩的乾坤 / EX-POST 通信 / 偏執論

詩的乾坤

吉本隆明著

思想の不毛な国 ジャポニカ・において、自らの敗戦体験を思想構築のバネとして持ちこたえてきた著者の、久しぶりの評論集である。

周知のように、著者は『言語にとって美とはなにか』・『共同幻想論』・『心的現象論序説』とあいつぐ論文で、個体の全幻想領域（個人幻想・対幻想・共同幻想）を一般論として原理的に踏まえ、思想的視座を確立しているが、本書に収められた諸論はこの延長線上に立つものである。なかでも注目されるのは「天皇

および天皇帝について」である。著者は言っている。

「すくなくともわたしにとって、ごく平均的な思想感性から出発して、△国家▽や△天皇▽の存在を無効にする方法をしめしえなければ、どんな思想を知識として獲得しても無意味であるとおもわれた。」

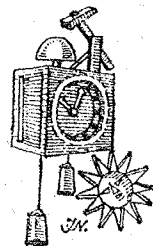
つまり、この言葉は著者が戦後迎ってきた思想構築の道しるべであったわけだが、同時に戦後の知識人総体に課せられた思想的問題でもあった。

最近、ようやく天皇帝についての理論的考察が進められているが、まだどれも試験の域を出ていない。もちろん著者の本論における試みもその一端をなしてい

るわけだが、これまでのどの考察よりも一歩抜きん出ていることは確かである。ただ、著者が言っているように、本論において△天皇（制）▽や△国家▽を無化するにまで理論的に深化させているかどうかは疑問である。

次に目を惹くのは△情況への発言▽に収録されている諸論であるが、これは著者の自立出版誌『試行』に掲載されたものの再録である。中でも『三島由紀夫の自死』や『連合赤軍事件』、続いて起った、テルアビブ空港乱射事件』について言及したところは著者独自の徹底した論断が興味を惹くところである。

また、「わたしが料理を作るとき」という小論があるが、著者の体験を基にし



た料理の作り方など『生活人』吉本隆明を感じさせ、読者の胸を熱くさせるものがある。

(国文社・二〇〇〇)

EX—POST通信

小山俊一著

この通信は著者が教員暮しをやめたあと、特定の友人に宛てたガリ版刷のお粗末なもの(活字化することを初めから拒否していた)を宮下和夫という一編集人の努力と熱意によって著者唯一の本となつて公に出されたものである。

「これは私という一個の貧弱な人考える肉体Vの六年間の断片的な生活記録である」と著者みずから述懐しているように、本書は小山俊一という一個人の八存に、本書は小山俊一という一個人の八存に論Vである。

著者がこの通信を発行しようと思ひ立ったのは、「自分の思想・世界像・世界

感受の仕方をいぢばん深いところで「規定」しているものは何か。(そいつを「掌握」したい)」という欲求からであったが、その行きついたところは、「それは自分の八生存感覚Vである」というものだった。

これはマンハイムが『イデオロギーとユートピア』で、意識・思考を「規定」「拘束」するものとして、人がどんなコトバ・論理・概念フレームを利用可能な「手持ち」のものとして持ち合せて(あがれて)いるか、という問題を徹底的につきつめると「背後にある存在論」(Ex-post-Ontologic)というものにぶつかる、これはわれわれの「現実」であつて、のがれることも消去することもできない、と書いていたことにヒントを得、マンハイムのいうex-post)同じ意味合から「背後にある」八生存感覚Vというものを人間の全意識につきまとう「現実」として想定したことから導き出されたものである。

ここから著者の八存在論Vは始まり、終わっているわけだが、一個の八考える内体Vが悪戦苦闘して歩んできた精神の軌跡が読者の心を強くとらえる。そして、読者はこの一個人の精神の軌跡から幾分か人間に普遍的なあるものを感じるこゝとが出来るだろう。

ただ、惜しむらくはこの八生存感覚Vについての考察が自己満足的なかたちで終始しているのと、それに対する理論的裏付けが希薄なことである。

(弓立社 一八〇〇)

偏執論

近代の陥穽をめぐつて

岡庭 昇著

『偏執』とは著者によれば、「瞬間的な感情の爆発、苦い自己嫌悪を残すだけで虚空に消え去る八自失Vとは、まったく異なつたもの」であり、「その執拗な

持続の面からみるなら、本質的に正反對のもの」ということである。

そしてそれは、「自滅へと導く忘我の激情ではなく、生を根柢的な欠如としてとらえ、その上で欠如をただ漠然とした不安、虚無として認識するだけではなく、その欠如をもうめ、のりこえうるもの」であり、認識の全体性を求めて「ひたすらにつき進んでゆくこと」だと述べている。この「暗い、どこまでも自己をたぬき通さざるをえない激情」を、著者は特別なニュアンスをこめて「偏執」とよんでいる。これが本書をつらぬく、著者の基礎的な視座と考えてもよいであろう。岡庭昇は、この「偏執」という一つの認識論(?)を、近代社会の構造的特異性——外的世界の物象性が人間に必然的に課したところの、認識主観—対象という一面的な世界とのかかわり方を超越しようものとして提議している。

このことを自然と人間との関係を主軸に据えて考察する著者の見解は、次のよ

うに要約できる。すなわち、近代において人々は自然を名づけることによって、自らの意識の許容範囲に内包してしまふ活動——得体の知れない自然に対する優越感をもとうとするかのような「知」を獲得することによって、自然からよりかけ離れた存在となってしまうのである。

そして、著者がひく「白鯨」のエイハブ船長の——執拗に「白鯨」を追い続ける——激情は、近代の「知」によれば「異端」として排除するしかないものだろうが、しかし著者はそこに、自然を自己の下位の生としてしか認識しえない近代の「知」に対して、自然への対等な挑戦とこの自然からかけ離れてしまった人間の、自然への回帰を感じ取るのである。

走りながら視ること、からだ全体で視る行為が、われわれの時代の乗り超えのラディカルな原動力となるのであり、からだごとこの体験を経ずして、そのまるごとこの経験の中に自己を対象化することなしには、世界を知ること自分自身を

知ることとも不可能なものではないだろうか。「文学」のあり方を問題としてそのことを考えるとき、「文学」は名づけるものと名づけられるものとの弁証的な闘いの軌跡ではなく、マクベスの倒錯した安堵に似た、名づける者としての表現者の自己救済の場に他ならないという現状にゆき当たるのである。

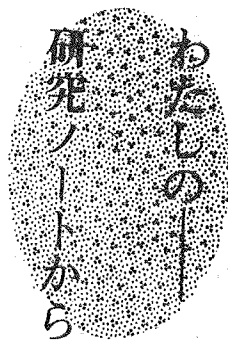
そのような「文学」から、いかにして「文学」は「人間」を描くことが可能になるのか。どれほど人間の変革に寄与しうるのか。その鍵は、多くの夢の挫折について語ってきた「文学」が、「夢みること」ではなく「夢みざるをえない」という、すでに二重にも三重にも抑圧されてしまっている生を描くことかも知れない。

（河出書房新社・二〇〇）

差別の空間構造 (最終回)

三 栄 吉 末

「琉海ビル」建設現場
大陥没事故



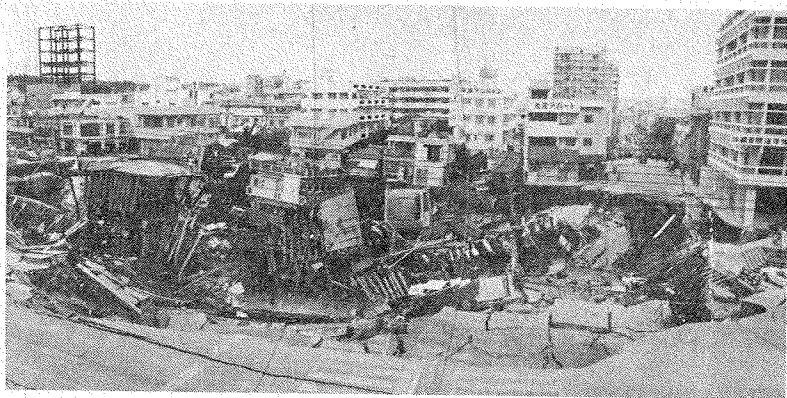
〇。 去年（一九七三年）の一月二十六日、
沖繩の那覇市でおそらく建築工事現場の陥没事故としては、「日本」最大のものだと思われるほどの大規模な事故が起った。私はその直後に現場に飛び、ある土木関係の専門誌に事故のレポートを書いた。その文章を以下に再録して、一回に及んだ私のノートを一応しめくくりたいと思う。

詳細は以下に示す通りであるが、私が

特に注目しているのはその都市災害としての意味である。そして都市災害はすぐれて都市問題そのものと不可分であり、災害の背景あるいは基盤としてのその都市のありよう（実態・情況）をぬきにしては、ついにその本質にせまり得ない。

レポートはこの大陥没事故の発生から事故処理まで一貫して流れている施工業者（竹中工務店）の住民無視の態度こそがこの事故の最も基本的な原因であり、この様な態度で施工が行われる限り、事故―災害はいかなる場所においても今後何度でも起り得るものである事を明らかにするとともに、さらにその様な大事故の原因調査さえ無視し、ひたすら軍事基地「沖繩」の「機能」維持のみに狂騒する日本政府の露骨な沖繩支配と今回の大事故との表裏一体となった関係を簡明に提示しようとしている。

現代の「技術」の構造と、その本質的な差別性を読みとり、その「差別性」のトータルな現われとしての「沖繩」空間



というようなものを理解していただければソレデヨシとしたい。

1° ハ「アッ、家が沈む！」「ミシッ
ミシッ」と不気味な音に続いて「ドド
ドド」という大地をゆるがす大音響と
ともに二〇メートルもの高さに土煙が舞
い上がった。赤い土煙の中で民家が次々
とスローモーション映画のひとつまのよ
うに地底に吸い込まれていった。赤黒く
さびついた厚い鉄骨が「ギーッ」とへし
やげ、落ちこんでいく民家の窓ガラスや
柱がつぶれていく。地面の亀裂は数分の
間に四方に広がり地上のものをのみ込ん
だ。陥没と同時に付近一帯は停電、都市
ガスが噴き出した。けたたましくいきか
うサイレンの中を車と人が入り乱れて逃
げまどう。かろうじて倒壊をまぬがれた
沖繩銀行の大時計が「四時三七分」で止
まっていた。

昭和四八年十一月二六日。沖繩の那覇
市で起こった高層ホテル工事現場周辺の

大陥没事故の状況を、新聞（琉球新報、
昭和四八年十一月二七日）は以上のよう
な書き出しで伝えている。

七〇メートル×三〇メートルのホテル
工事現場を中心に、長さ九〇メートル、
幅六五メートル、およそ六〇〇〇平方メ
ートルに及ぶ部分が約一〇分の間に陥没
していった。陥没の深さ、約一五メート
ル前後である。陥没と同時に地底に引き
つりこまれて倒壊した建物五棟（アパー
ト四棟、民家一棟）、倒壊は免れたもの
の大修理をしても今後住んでいけるかど
うかが危ぶまれる傾斜家屋が三棟である
が、その他にも犬走り、土間コン、外部
階段との接続部分、増築部分などに大き
な亀裂の走っているいくつかの建物、周
辺の道路に刻み込まれた亀裂等々、被害
は陥没部分からさらに一〇〇メートルほ
ど離れたアパートにも及んでいる。これ
ほどの大事故——おそらく建築工事現場
の陥没事故としては日本最大の規模のも
のではないだろうか——を起こしているな

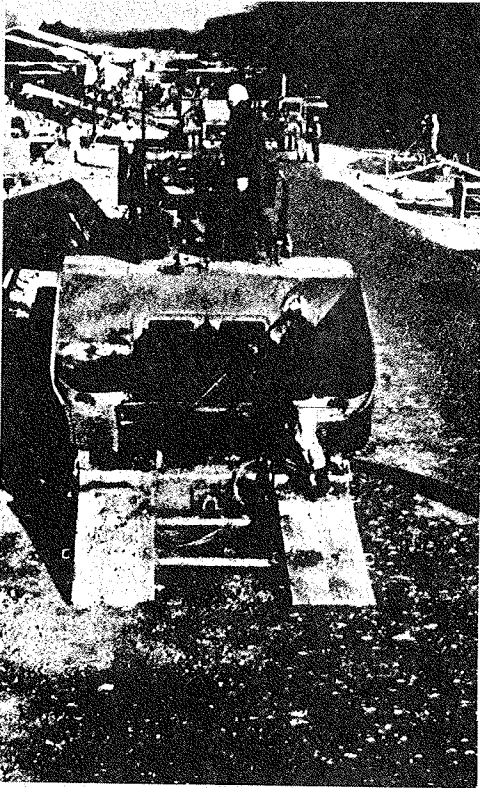
がら、直接的には死傷者が一人も出なかつたということは、文字どおり「不思議」に思われるほどである。(死傷者がなかつたという事実も、現場関係者の事故前後の処理や対策が良かったというのではまったくくない。このことは後述するが、事故前後の現場関係者の周辺住民に関する連絡や処理はまったく無責任きわまるものであった。)

2。現場は、沖繩に置かれた無数の軍事基地を一体に結びつけ機能させるための大動脈として米軍によって整備、管理された軍道一号線(現在は「国道五八号線」)に接し、那覇港とともに二大港の一つともいえる泊港の旅客ターミナルとは、その一号線を挟んで向かいあっている。この周辺は沖繩最大の幅員(二七メートル)を持つ一号線に沿って従来から各種の事務所が建ちつあつたが、とくに「復帰」前後から、「日銀」那覇支店や沖繩開発庁総合事務局の強大な磁力に吸引されるように、日本本土の各企業

(とくに土建業と不動産業)や官公庁の出先事務所の入つた貸ビルが道路の両側をビッシリ埋めていった。あつという間に建物の背はグングン高くなり、表の看板も「横文字・横長」から「縦文字の縦に長い」ものになつた。沖繩の人たちは今この界限を、「五八号線ヤマト通り」と呼ぶ。もう少しつけ加えておけば、「復帰」前までは皆無に近かつたマージャン屋やこれも数えるほどしかなかつたヤマト風小料理店(割烹)がこの周辺に続げざまに開店し、バーやクラブも資金力のあるものは多くの本土企業の杜用族に狙いをつけて高級化、大規模化して「桜坂から前島」へ進出、移動してきている。事故を起こした「琉海ビル」が建てられつあつたのは、このような立地条件を持つた場所であつた。日銀まで約一〇〇メートル、南隣りは沖繩銀行、開発庁総合事務局は北側の一つビルをおいた隣りで、一号線を挟んで先述したように泊港ターミナルと向きあう。

「海洋博」をあてこんだホテルにしても、あるいはそれを後で貸事務所転用するにしても「最高の場所」だと経営者は当然考えたはずである。計画によればこの「琉海ビル」は建築面積二一〇〇平方メートル、延べ床面積二万七〇〇平方メートル、地下四階、地上二〇階、塔屋二階、ホテルの室数三六四室、総工費四五億円、新聞の報ずるように「九州一」かどうかは知らないが、とにかく東京、大阪に建っている三〇〜四〇階建ての一〇本ほどの超高層ビルに次ぐスケールのものであることは確かである。

およそ現代の日本においては、建物の容量やその種々のディテールに至るまでの計画は、資本の利潤性(利益性)を最優先に行なわれるべきものになつており、安全性(それを使う人びとの安全性)やその建物の周囲の安全性が計画全体を貫く基本概念になることは皆無だといつてよい。安全性が口にされる時も、それはせいぜい経済性や利潤性、利便性



といった多くの「ファクター」の中の一つとして扱われるのであって、結局のところ利潤性がまず他にぬきんでて上位に立ち、安全性を含む他のもろもろのファクターは、その利潤性を保障するものの一部分として検討されるにすぎないのである。

当然のことだが、「琉海ビル」の容量

もこの利潤性を最優先にして決定されたはずである。

この敷地の地盤条件の悪さ——現場一帯は、戦前までは「かたばる（干潟の原）」と呼ばれ、安里川のデルタであり湿地帯であったのを、戦後米軍が泊港を築港にする時に浚渫した土砂などで埋立てた——を慎重に検討すれば、とても地下四階、

地上二〇階という容量の建物を作る発想は浮かんでこない。いやおそらくは、これまで全国のいたるところで、少々地盤が悪かるうが、無数の建物が建てられてきたのであるから、注文主（施主）も設計者も、そして施工会社も十分イ・ケルと考えていたとしても、とくに不思議はないかもしれない。それはあり得ることだし、しかし問題はその後にあるのだ。この工事が始まって二ヶ月も経たないうちに、現場の周辺のアパート（RC二〜三階）や民家では、地割れや建物の亀裂、水道管やガス管の破裂が相次ぎ、たまりかねた周辺の人たちは弁護士にまで依頼して竹中工務店に交渉しているのだが、この重大な事実に対して注文主や竹中工務店が真剣に考慮した形跡はまったくない。

安全性の論理からいえば、その時点で、少なくとも作業を一時中止するか施工速度を落とすかして、もう一度計画段階からチェックし直し、容量を減らすとか、それに伴って施工法を検討（あるいは

変更) するとかすべきであったはずである。ところが一九七五年三月開催予定だった海洋博に間に合わずことを至上命令にされた現場は、現場の周辺に続発していた事故のシグナルを無視して(あるいはいくらか気にしながら)突っ走った。注文主と現場と設計者の三者において、着工時に、あるいは周辺の家屋に事故の徴候が連続して現われた時点でどのような検討と判断がなされたのかは知る由もないが、少なくとも周辺の家屋に地割れその他の被害が続発した後においても、ほぼそれまでどおりの施工速度と施工方法を続行することを選んだ者には、まったく弁護の余地はないといつてよい。

3° 「琉海ビル」が着工したのは一九七三年の四月一五日である。完工予定は一九七五年三月であるから工期は約二年である。軟弱地盤の上に地下四階、地上二〇階、延べ床面積二万七〇〇平方メートルの建物を建てる工期にしてはどうみても短いと思うのであるが「トツカン工事」が常態になっている日本の建設業界においては、それが普通のことなのであろうか。いずれにしても、今回の事故に「海洋博」がぬきさしがたく結びついていることは論を待たない。そのことは事故の事後処理まで一貫している。この大事故を起こした原因の縦糸が注文主、設計者、施工会社の利潤第一主義だとすれば、「海洋博」はその太い横糸である。織られた生地には「安全性の無視」という文様が色濃く刻まれている。

日本政府が何故沖縄の多くの人たちの反対の声を無視して「海洋博」をしゃにむに強行しようとしているのかということに関しては、他の場所にもいくつか書いてきたし(「自然保護」一三八号―四八・一一・一五など)、本稿の趣旨からいってもかたがたるので繰り返さないが、一口でいえば、「反ヤマト(反日)感情」とでもいえる感覚のかなり根強い沖縄に日本の独占的大企業の支配をなるべくスムーズにすべりこまずことと、これまた反戦・反軍事基地闘争の強い沖縄への日本軍の派兵(基地強化)をいくぶんでもカムフラージュしつつ推し進めていくためにデッチあげたお祭りが、「沖縄海洋博」だということである。「また、たいそうな」と思われる方があられるかもしれないが、沖縄の新聞を読んでおられる方にはまったく自明のことであるはずである。

日本の独占的大企業による沖縄の企業支配はもうほとんど完成したといえよう。建設業はその典型例である。今沖縄の建設業はことごとく本土の企業の下請けになってしまった。今回の事故の当事者である施工業者も、名目上は竹中工務店と地元の大城組の共同企業体であるが、実質的にはすべて竹中工務店が主役である。

4° 事故の直接の原因となったのは、① 沖縄の軟弱地帯に関する資料が十分なく、東京のものを参考にして工事を行なったが、② PIP工法によった土止め支保工の切りばりが設計上より二〇%以上も大きくなった土圧に耐えきれなくて

破壊に至り、それによって周辺の陥没が起こつたことである。一号線（六車線）の交通量の異常なほどの多さも影響したのである。目の前は海であり、陥没の後に海水が噴き出しているから、当然潮位の影響はあつたはずである。地下水も毎分五トンも湧いていた。

要するにそのような種々の条件が重なつて事故は起こつたのである。

私は施工に関しては素人であるから、技術的なことに関しては何ともいえない。しかし、「専門家」の原因調査報告を待つても、大したことは解明されないはずである。おそらく、切りばりの破壊や曲がりぐあいから何トンほどの土圧がかかつたらしいとか、現場の湧水が予想以上に多かつたとかの類になると思う。しかしそのような物理的原因の究明でさえ、一号線側の大半が二次災害防止と自動車交通の優先的回復のためという理由で埋めもどされた後の現場調査であるから、多くは望めまい。むしろ私が問題にして

いるのは施業者（竹中工務店と大城組）の周辺住民無視の態度と、それと表裏一体となつた現場を含めた周辺の新しい情況（地割れなど）から慎重に学び、計画（設計計画および施工計画）を再検討してみる態度のなさである。

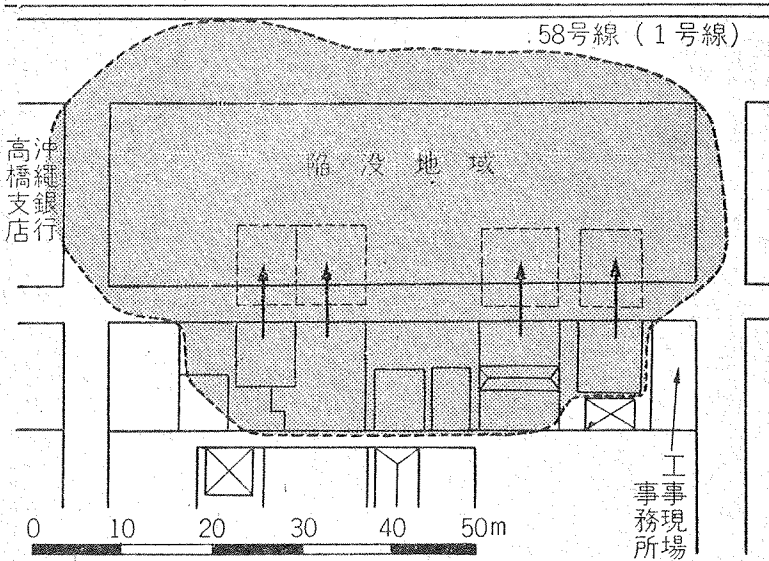
私は今回の事故の決定的な原因はむしろこの点にあると思つている。一本の鉄骨に加わつた圧力の推定も確かに重要なことであろうが、しかしそれが解明されたとしても、事故——それにまきこまれる人間の側からいえば災害——が大きく減少するものとはまったく思われない。現場の外的条件は個々具体的に、そしてそ無数ともいえるバリエーションで変化するものなのである。例えば竹中工務店という大企業ともなれば、ほとんど全国各地の土質や地盤の条件に関する資料を持つてゐるはずであり、材料の物理的、化学的性状などに関しても、少なくとも建設省よりも多くの研究者・技術者があり、蓄積もあるのではないか。潰れた現

場の現場担当も「竹中工務店は日本でも一流」と胸を張っているし、行政の担当者も「竹中工務店のような日本でも一流の企業が安全だといえ、もう何もいなくなる」などといつてゐるのである。

そのような「一流」の企業が施工を行なつていたにもかかわらず、「事故——災害」は起こるのだ。「事故——災害」は「一流」だからという理由でその現場を避けて通つたりはしないのである（沖繩県土木部では、事故の前に県内の主な工事現場を防災面からチェックしたが、琉海ビルについては、何と「一流建築士が担当している」という理由で対象からはずしている——一月二十七日沖繩タイムス——。人間は「一流」の現場は避けて通つたようだ。「事故——災害」の論理から見て、起こるべき必然性があればそれはしごく当然に起こるのである。

「地下一階の工事のとき、突然地面に大きな亀裂が起こつたが、今度崩れたのはその時の亀裂部分から」。起工後、

ガス管が破裂、施工者に修理させたが、
 またはずれるということを繰返した。
 「水洗トイレのパイプが切れる事故もあり、あちこちの家の壁にヒビが入ることが相次いだ」。「梅雨の時には、すでに建物に亀裂が入り、雨漏りがひどかった。玄関前にも地割れができ、戸が使えず裏口から出入りする毎日だった。一時は建物の亀裂が二〇センチメートルにも広がり、竹中工務店に修理させたほど」等々。
 このような状態に耐えきれなくなった人たちは、法律事務所を通して施工者と交渉、地割れ部分にセメント注入などの補強工事をさせた。それでも家屋の傾斜は進んだ。このような事態の進行に対してどう考えていたかと記者団に質問されて、今の現場担当者は「本土でも軟弱な地盤で工事をする場合、ある程度のヒビ割れは不可抗力で避けられないものだ」と答えている。つまり、付近の住家に少々被害が及ぼうが、そんなことはどこでもあって避けられないものだ」とタカ



事故現場略図 (矢印は陥没方向)
 (琉球新報 昭和48年11月27日)

をくくっているのである。このような態度であれば、現場(周辺)の新しい情況から謙虚に学び、自分の「計画」を検討し直していく心がけなど生れるはずはない。

この現場で採用していた「PIP」工法についても、「最良の工法は連続地下工法だが……、沖繩の生コン事情からつぎに良いとされているPIP工法をとった」としている。「海洋博」に関係したビルラッシュで沖繩は生コン不足になつており、しかたなく「次善の策」として「PIP工法」がとられたことがわかる。「海洋博」はここにもはっきりと顔を出すのである。

周辺の住民は被害の実態を那覇市にも訴えた。しかし市はいかなる動きも示しはしなかった。市の態度は「超一流の竹中工務店が大丈夫だといえはもう何もいえなくなる」のだったから。

「復帰」後の沖繩の建築ラッシュはすざまじいばかりである。一九七三年の

那覇市内だけの建築確認申請が一〇月末現在で二六一九件。ホテルだけでも九二件である。労働災害も急激に増大し、去年一年間の死亡事故は三三件(一月末)——復帰前の三倍——、死亡事故のもつ

とも多いのは圧倒的に建築工事現場で約九割を占めている。事故原因は保安帽をかぶっていないとか、命綱をしていない等々、非常に基礎的な注意や訓練の欠如によるものがほとんどであるが、現在の土木建築工事の現場には農業の破壊による生活苦からタダ同然の値段で、その畑地を本土から入りこんだ観光資本や不動産屋に売って那覇に出てきている多くの離島の人びとや、またキビ作りよりも土建ラッシュにより高騰した労賃を求めて出てきた人たちのように、ほとんどズブの素人といってもよいたくさんの人たちが土建業の現場で働いていることと無関係ではないはずである。当然、その働き手を失なった農業は亡びていく。海洋博の反対闘争に製糖業従事者がだれよりも

早く立ち上がった所以である。

5° 最後はぜいひいておかねばならないことがある。それは、日本政府(沖縄開発庁)の琉海ビル陥没現場の事後処理についてである。

陥没は二六日午後四時一五分ほどから始まり、大規模な沈下が一応おさまったのが五時前。それでも七時二一分に地鳴りとともに自動車穴の中に転落していったりした。ところで開発庁はそれから一時間半ほどしかたたない午後九時には、もう一号線の埋戻しに一〇〇台のダンブを投入し、フルスピードで作業を開始した。もちろん、現場検証もしないうちである。まして何らかの事故調査も行なわれていない。

事故調査が始まったのは二八日の午後からだ。先述したように、現場のかなりの部分を埋めてしまつてからの事故調査などほとんど意味は半減するはずである。何よりも警察が現場検証の前に埋戻しを認めたのも、ほとんど常識では考

えられない。埋戻しの理由は「二次災害防止と交通の回復」であった。二八日の早朝からはもう車が四車線で走り出した。六車線のうち一車線を残して一〇〇メートルもの長さにわたって陥没していた一号線なのに、事故からたったの一日半で「復旧」である。何故このように「トッカン」——またしても「トッカン」工事で——で「復旧」したのか。「復旧」に時間がかかると「海洋博」関係工事への影響が心配される」と開発庁（日本政府）はいつている。「海洋博のために無茶な「トッカン」工事で埋戻しているのだ。三〇時間で延べダンブ六〇〇〇台分の土砂が埋戻された。

しかし他にもっと本質的な理由があった。米軍と日本軍から要請があったのである。「米軍関係への影響もあり、外務省や防衛庁でも事態を憂慮している」と新聞は伝えている。「一号線」は「国道」と名を変えても中身は当然何の変化もなく、れっきとした「軍道」なのである。

そして沖縄の基地群は日本軍も加わってますます拡大化されているのである。何と何重にも重なって、この大陥没事故は「基地沖縄」を象徴していることが、「海洋博」の旗をふりかざしつつ海底に沈んだ琉海ビルの現場は、「軍旗」をふりかざして浮上してきたのだ。

6. 大陥没と同時に噴き出した都市ガスが付近に充滿し、消防車はけたたましいサイレンをならしながら住民に「火気厳禁」を叫んで回った。また現場の隣りの沖縄銀行では停電のため電動シャッターが動かなくなってしまう、逃げ場を失った人びとはパニック状態に陥った。高圧線は火花を散らして大揺れに揺れた。都市災害の典型のいくつかが同時に発生したわけである。これで人命が失われなかったことを不思議とも思わぬ人はよほどモノを知らないか、ソコヌケののんき者である。ひとつ間違えば大惨事になる選択枝は、すぐそばにころがっているのだから。

この陥没事故から一〇日たった一二月六日、那覇市の隣村、西原村に米軍のヘリコプターが墜落して炎上した。搭乗員三人死亡、二人重傷である。現場は南西石油（エッソ）の巨大なタンク群からたった三〇〇メートルの距離であった。タンクローリーが日に一〇〇台も出入りしているコンビナートである……。

沖縄とはこのような「場所」なのだ。

（ 筆者は関西大学工学部・助手
すえよし えいぞう ）

← 詩の翻訳について →

ランボー研究余瀾

— 1 —

☆ 山村嘉己

わたしの
研究ノートから

ランボーの詩を特殊講義にとりあげて
学生諸君と読みはじめてから二、三年に
なるが、この難解な詩人の作品を等質の
日本語にうつす作業の途方もない負担に
ゆきかたて、僕はいつしかランボー詩の
従来のも日本訳にも大きな興味をもたざる
をえなくなっていた。

もともとその心の底には、まず僕自身
がランボーに心を奪われたのが、ほかな
らぬ小林秀雄の『地獄の季節』との出会

いからであって、人生研断家ランボーの
イメージがあまりにも鮮かに僕の脳裏に
やきついていたので、今度この機会に自
らの生の眼でランボーの姿をたしかめ、
そのふたつの影像のずれの中に二十数年
にも及ぶ僕の生きざまの推移をたしかめ
直したいという願いがあったことも否定
できない。

ことほどさように、ある時期のある作
家との出会いは一人の人間にとってはす
さまじい事件なのであるが、それが外国
の作家を翻訳を通して知ったときには、
そこに二重の厄介な問題がさらに発生す
る。すなわち、僕が感動したという事実
のほかに僕が感動したのは小林を通して
見られたランボーなのか、それともラン
ボーの姿をかりた小林なのかということ
が問題になるのである。おそらくこれは
明瞭にわかちうる問題ではあるまい。つ
まりはランボーと小林秀雄という特異な
個性同士が火花を散らして邂逅し、その
尖光にわれわれが思わず目がくらんだと
いうのが正しいのかもしれない、むしろ、

ランボ—理解には尙うつるな表情をして一日おきに、吾妻橋からポンポン蒸気につかたて、向島の銘酒屋の女のところに『地獄の季節』を片時もはなさなかつたそんな姿勢が何よりも必要だつたといふべきなのだろう。そこには恐るべき宿命同士のめぐりあいがあるだけで、したがって小林の『地獄の季節』が正しい翻訳であるか否かは問題にならないといふ議論が存在しうるのである（最近のベストセラー、リチャード・バックの『かものメロディ』に對する五木寛之の創訳ということばはこれに似たひとつの態度を表明している）。古来、名訳といわれるものにはこうした二つの個性の異なる一致があつて、その際は瑣末な部分的異同はあまり問題にならぬことがままある。森鷗外の『ファウスト』、坪内逍遙のシェークスピアのあるもの、上田敏のある種の象徴詩の訳などはそうした幸福な例として数えあげることができよう。しかし一方、作家をそうした特殊な体

験として直感的に把握するだけでなく、虚心にもとの作品に接し、作家の生涯をよく調査し、あらゆる角度からの説明を試みることもまた劣らず重要なことで、そうした事実をふまえての翻訳もそれなりに大きな意味をもつことはいうまでもない。ランボ—の生涯にしても、小林の受容のときとはまったく異なつた解釈が生じている。—小林にとつて『地獄の季節』はランボ—の白鳥の歌だつたからこそ何よりも尊かつた。△芸術といふ愚かな過失を、未練気もなくふり捨てて旅立つた彼の魂の無垢を私が今何としよう（ランボオII）これが彼のランボ—受容の決定的態度だつた。つまり、『地獄の季節』が文学への決定的な訣別の書と信じられたればこそ、小林的ランボ—の像が可能だつたのである。ところがラコストラの新しい研究では『地獄の季節』はヴェルレーヌとの忌わしい同棲体験のことをさすので、この作品のあとにも彼は『イルミナシオン』を書きつけ、二〇才でアフリカの砂漠に身を没してから

も文壇に復帰する夢を完全に捨ててはいなかつたと推定されている。とすれば小林のランボ—は壮麗な錯覚にすぎなくなつてしまふのか。あるいはランボ—がそのため卑小な存在となるのか。いや、そうではない。つまるところ小林のランボ—はあくまでも小林のランボ—として意味をもつと同時に、われわれはまたわれわれなりの新しいランボ—像を創出する機会に恵まれたのだと考えるべきなのである。事実、すでに堀口大学・金子光晴・粟津則雄らの苦心の訳が発表され、今の学生諸君の中には現に小林訳よりもこれらの諸氏のいずれかによつてランボ—への入門をうながされた人も少なからずいることが判明している。僕の今回の研究ノート目的はランボ—詩のいくつかをとりあげ、とくにその翻訳を比較しつつ、外国詩の理解にはらまれる問題点を指摘するところにあるが、ここではひとつの具体例をひいて訳詩と原詩とのほざまとでもいったものをもう少し観察してみよう。



ランポー 1871年10月 角川文庫より

ランポーの初期詩篇に『Le dormeur du val』(谷間に眠る男)という有名な一篇がある。彼の詩としては比較的均整のとれた詩で分りやすく、また彼の詩作態度の根本を示す要素があるので重視されているものだが、この詩を読

み終ったあと、率直な感想を求めたとて、A君がやおら立ち上ってこういつたのである。

——先生、ぼくはこの詩をはじめ金子訳で読んですごく感動しました。これではなくっちゃんと思っただんです。ところが今度の機会に、粟津さんの訳を見ました。何だか違うなという感じでした。

そして、今、先生と一緒に原詩を読んで、またまた違うなと思っただんです。……どうなっているんでしょう。

かくて満場笑いの渦となったのだが、笑いながら僕の心の中にはいったいほんとうのランポーはどこにいろのかとうすら寒い思いが走るのをとどめることはできなかつた。今、ここで念のため問題になった訳詩をならべ、さらに原詩を紹介して僕なりの註解を加えてみよう。読者諸氏はどれに軍配をあげられるだろうか。

谷間に眠るもの

金子光晴訳

立ちはだかる山の肩から陽がさし込め

ば、

ここ、青葉のしげりにしげる窪地の、

一すじの唄う小流れは、

狂おしく、銀のかげろうを、あたりの

草にからませて、

狭い谷間は、光で沸き立ちかえる。

年若い一人の兵隊が、ぼかんと口をひ

らき、なにも冠らず、

青々と、涼しそうな水菜のなかに、頸窩をひたして眠っている。

ゆく雲のした、草のうえ、

光ふりそそぐ緑の褥に蒼ざめ、横たわり、

二つの足は、水仙菖蒲のなかにつつこみ、病気の子供のような笑顔さえうかべて、一眠りしているんだよ。

やさしい自然よ。やつは寒いんだから、あつためてやっておくれ。

いろんないい匂いが風にはこぼれてきても、鼻の穴はそよぎもしい。

静止した胸のうえに手をのせて、安らかに眠っている彼の右横腹に、

まっ赤にひらいた銃弾の穴が、二つ。

谷間に眠る男

粟津則雄訳

青葉の穴だ、銀のつづれを、狂おしく草の葉にひっかけながら 流れほうだ

い。

誇らかにそびえ立つ山のうえから、陽はかがやく。光に泡立つ小さな谷間だ。

若い兵士が、口をあけ、帽子もなく、

青いみずみずしいたがらしに、項を浸して、眠っている。草のなか、雲のした、

光が雨と降りそそぐ、

緑のベッドに、蒼ざめて横になつてい

る。
足をあやめの茂みに入れて眠っているのだ。病んだ子供がほえむようにほえみながら一眠りだ。

自然よ、あたたかくゆつてやれ、寒そうだ。

香わしい薫りも彼の鼻の孔をふるえさせぬ、陽の光を浴びたまま、動かぬ胸に手をのせて眠っている。その右の脇腹には赤い二つの穴。

金子訳は他の詩の場合でもそうだが、

いささか冗漫ともみえる言葉つかいなが

ら解説に流れることなく、一種の引きしまりを見せるのは、彼自身詩人であるせいだろうか。粟津訳は一番新しく、また

註釈書もできるだけ参照してもっとも忠実ならんと志向していることはよくわかるが、——とくに enjambement (行

またぎ) の技法もできるだけうつつそうとしてるのが注目される——その忠実さのゆえに詩想の自由な流れがせきとめられてい

る趣きがある。

そこで原詩だが、まず第一聯は

C'est un trou de verdure où

chante une rivière

Acrochant follement aux

herbes des haillons

D'argent; où le soleil, de la

montagne fière,

Luit; C'est un petit val qui

mousse des rayons.

一行目は△それは小川のうたっている

緑の穴だ△となる。二行目の Acrochant hant が現在分詞でその川の流れを形容

し、《狂ったように草の葉に銀のつづれをひっかけながら》と二行目につながるとともに、三行目《D'argent》とも結びつく。この《D'argent》はほんとは、*hail-lons d'argent* とつづくのだが、いわゆる行またぎになっていてこれは《銀の》という言葉にとくに強調がおかれて輝きを示す。そこで三行目の《のあと》は《そこは誇り高い陽の輝くところ》となるが、この《輝く》の *Luit* がまた行またぎで四行目にうつり、やはり光輝くイメージを強調している。かくて第一聯は《それは光に泡立つ小さな谷間だ》と最後まで、光の氾濫を強調して閉じられるのである。この詩は全体に色彩のシンフォニーといった趣きをもっともよく示しているひとつだが、この第一聯ではとくに緑の谷間をベースに銀色の光が溢れかえっている目もまばゆい光景がまず提示されている。

ところで第二聯にうつると

*Un soldat jeune, bouche ouverte,
verte, tête nue,*

*Et la nuque baignant dans le
frais cresson bleu,
Dort; il est étendu dans l'herbe,
sous la nue,
Pâle dans son lit vert où
la lumière pleut.*

《若い兵士が口をあけて帽子もかぶらず》(二行目)と急にひとりの兵士が出現する。第一聯の遠景的な描写から一転し、われわれの目は近景としての青年兵士に集中する。そこで目をひくのは、うなじで《それを青い新鮮なクレソンの中にひたし、彼は眠っている》と二行目にうつる。ここで《眠っている》がまた行またぎとなって強められていることに注目されたい。三行目は《彼は草のしとねに、雲の下で横たわっている》となるが、四行目に《色蒼蒼と》と形容詞がまたまた行またぎで強調され、《光ふりそそぐ緑のベッドに》と閉じられている。第一聯で示された異常なまでの光の氾濫が、ここでは急激に蒼蒼と眠っている若い兵士へと転換されて行く。青色のクレソ

ソンの出現はこの詩の舞台にひんやりとした感触を与える。つまり不気味な静謐一死とつづく不安が予兆のようにかもし出されるのである。いずれにしても第一聯から第二聯への、動から静への急転は見ものといつてよからう。あるいはカメラ・アイの用語でいえば、ロングからアップへの視点の移動が実にみごとである。そこで第三聯になると、カメラは執拗に被写体の上をなめて行く。

*Les pieds dans les glaieuls,
il dort. Souriant comme
Sourirait un enfant malade,
il fait un somme:
Nature, berce-le chaudement;
il a froid.*

《足をグラジオラスの中につっこみ、彼は眠っている》(二行目)《病気の子供がほほえむようにほほえみながら一眠りしている》(三行目)ここで病氣という語が第二聯での不安の予兆をより明確化して登場してくる。しかしまだ弱々しいといつてもほほえみがあり、それゆえ



に詩人は自然のあたたかさを願って祈らざるをえない。△自然よ、あつたかく彼をゆすぶってやれ、彼は寒がっているのだ▽（三行目）しかし祈りはあくまでも願望にしかすぎず、隙間風のように吹き込んだ冷やかさは消えない。今はカメラも少し後退し、ロングの視点に戻ろうとする。

第四聯は次のようにはじまる。

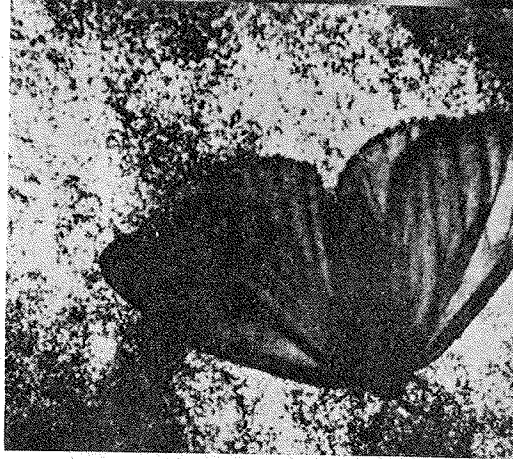
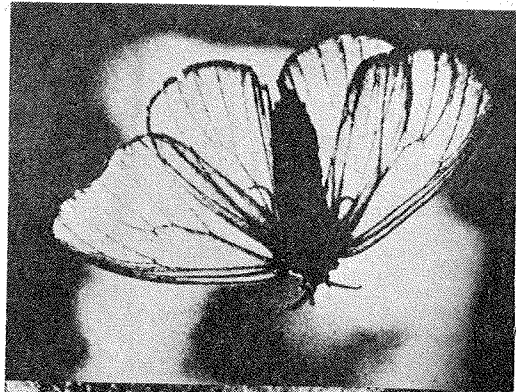
Les parfums ne font pas
frissonner sa narine;
Il dort dans le soleil, la
main sur sa poitrine
Tranquille. Il a deux trous
rouges au côté droit.

△かくわしい香りももう彼の鼻孔をふ

るわせることはない▽（一行目）△手を動かぬ胸の上のせて、陽をあびて彼は眠っている▽（二行目）Tranquille（動かぬ）という言葉がまたまた行またぎとなって強調され、凍えたような瞬間が訪れる。そして、逃げていたカメラがはげしくアップとなって追ってくる。△彼の右脇腹にはまっかな穴がふたつ▽、何という残酷な種明しか。それは最後のとどめだ。冒頭の△緑の平和な穴▽がこの△まっかな二つの穴▽と急激に結合して詩全体の色どりをかえてしまう。第一聯のあの光の氾濫がふしぎに陰画の様相を帯びて立ちかえてくることにわれわれは気づかざるをえない。最後の赤という色は、もっとも鮮かな色でありながら、死という負の極限をうけてむしろ全篇を黒色のはけで逆撫するのである。そうなると第四聯二行目の *le soleil*（太陽）もふしぎな硬質の光をたたえた無機物のごとき印象を与えるのも奇妙ではないか。

僕にはこの詩がランボーの詩作の秘密

を十分明かしているものと思えてならない。つまり彼の手にかかったとき、すべてのものはその今まで背負ってきた意味を一切洗い落され、そこには彼の魂を通してまったく新しい意味を賦与されたもの。とばが出現するのだ。過去の一切の意味を排除した生の素材としてのとばの誕生だ。それはボードレールがこ



とばに含まれる一切の要素を十分利用し、そのことばの背負うあいまいなイメージを逆に徹底的に活用したのとは正しく対照的なことといわねばなるまい。のちに《見者》の手紙の中でランボーが、ボードレールを詩人の中の神と崇めながらも、彼はあまりにも《芸術家的すぎる》ともしたのもこの観点からすればむしろ当

然のことといわねばならない。この《谷間に眠る男》でその一端をのぞかせていたランボーの《言葉の新しい錬金術》は、翌年、パリ・コミュニケーションという大事件を契機に彼の内側に壮大な体系を作りあげることとなる。《母音》《酔いどれ舟》などの諸篇から『地獄の季節』にいたる途はその見者理論の展開となるのだが、これは回を改めてのべたいと思う。

3

さて、そこで2にあげた訳詩と解説をごらんになって読者諸氏の判断はどうであらうか。どちらも原詩と相似て、またはなはだ遠く、僕の解説も僕なりの切込みであって、ランボーのすべてを覆うわけではけっしてない。とすれば、あのA君のとまどいはまことに当然のことなのであって、A君にとっては、やはり最初の金子訳が、彼なりのランボー体験であり、その後のいくつかの経験が彼の中のランボーにいささか居心地の悪さを感じ

させたということにほかならない。すぐれた翻訳をもつ外国作家の作品はどれも同じ運命をもたざるをえず、われわれがいかに多くの上田敏のヴェルレーヌをもち、堀口大学のレミ・ド・グールモンをもっていることか。僕のランボーなども久しく小林秀雄のランボーであったことを今さらながら思いかえさずにはおれない。回を追ってのべるランボー解釈がそのランボー像よりの脱出の記録となるかどうか、僕自身にも確信はないながら、そうなることを望んでやまない。

この翻訳につきまとう問題点を自ら詩人であるとともにフランスの現代詩人H・ミショーなどを翻訳している小海永二氏が率直な感想をもらしている。(『国語・国文学』四九・一〇)

△土台、訳詩は、原詩を基にはするけれども、日本語として訳された段階から相対的な独立性を獲得し、日本語の詩としてひとり歩きしはじめの運命にある。原詩がいかにすぐれていても、訳が駄目ならば、それは詩作品とし

ては問題にならない。従って、原詩に忠実なだけの学者の訳は(学者の訳がすべてそうだとはいっていない)研究資料としての価値はあっても、詩としての価値は低い。理想はいうまでもなく、語学的にも正確で、しかも原詩の詩趣を正しく伝え、さらに日本語の詩として読んでもすぐれているということであって、この理想に向って訳詩家は懸命の努力をするのであるが、実際にはこの理想を達成することは難かしい。▽

原詩人と訳詩家の出会いの必然性というモメントが省かれて点を除いては、まったく異論のない反省であるが、さらに次の一節を読む時、僕は苦い笑いを浮かべつつも、さもありませんうなづかずにおれないのである。

△一般に海外詩の影響と見なされているものの中には、それが実は海外詩の影響というよりは翻訳詩そのものからの影響、さらにはその翻訳詩を訳した訳者の文体や語法からの影響、にすぎ

ない場合が、かなり多くあるのではないだろうか。わたしがミショーを訳した当初、その訳の文体はかなりの程度わたし自身のものであり、部分的には原詩にない言葉を補ってある種のニュアンスを作り出すということをした。ところがその後、ミショーの詩の影響を受けたと思われる詩……がいくつか出てきた中に、わたしの創訳にあたる部分をそのまま取り入れている詩が見つかった。わたしはその詩をミショーの影響を受けたものとはひそかに思っている……▽ (つづく)

筆者は関西大学文学部・助教授
やまむら かつみ

日中文化関係史の一面

— 近世の中国と日本 —

(XXI)

増田 渉

わたしの
研究ノートから

『崎陽記』(?)からの引用

さて長崎で大塩が周雲山(後の馮雲山という)にあい、彼と同行して清国に渡ったということについてだが、石崎東國氏は次のようにいっている。

「茲に問題となるのは、大塩先生父子の投じた清商と称する周氏の一行で、周某とは何人であったか、吾等が曾て読んだ雑書中に、是は大蔵永常の著と記憶するが『崎陽記』の内に斯ういうことがあった」

とその「大蔵永常の著と記憶する」ハッキリしない『崎陽記』なるもの(永常の『崎陽記』なるものを私は聞いたことがないし、また少し永常の著述をしらべたが、そんなものは見当らぬ)を引用している、

「此頃長崎に來遊せる広東人に周秀才、號は雲山というものがあつた。蘭法医術に通じて兼て易学に精しい。此の人に遭うて予は大に益を得たので、若し日本に永住の見込みならば然るべき諸侯にも推薦しやうといつたが、雲山(のいうには)実は去る年、(天)地会といふものに組みし、地方伝導中捕はれて死すべかりしを、遁れて商人を装い、書籍を積んで日本に斯くは久しく亡命し居れるなりとぞ」

次に石崎氏は当時、南清地方に宗教的な騷擾叛乱がしばしば起つたことによつて、「白蓮会」とか「天理教」一匪の乱があり、次に「天地会」一匪の乱が起つたという。そして「天地会」が伝導中、掠略の嫌疑

で官の討伐にあい、主なものは斬られ、他は四方に散乱し、周雲山はこのときの一頭目であったから日本に亡命したのだという。そして「天地会」の解散によってその残徒が、以前からあった「上帝会」に集まり、それを強化したのだという。天を父とし、地を母とし、四海を兄弟とするという「天地会」に一步を進めて上帝を立てて新しくしたのだと石崎氏はいう。この「上帝会」は広東の人、朱九涛という者が道光の初年に「天地会」と前後して創始したのだという。

そして石崎氏自身が、かつて清国に遊んだとき「広東通」の王文泰（日本人だという）から「上帝会」について面白い話を聞いたというのであるが、その話とこの「伝説だとして語る所に依れば」という前置きで、

「東海の偉人」

「ある日、『上帝会』に三人の卜者が

訪問した。一人は洪秀全、一人は馮雲山、今一人は単に『東海の偉人』といふだけで、ツマリ洪・馮の先生である。馮氏は『天地会』の亡命者であるから固より朱君（九涛）とは相識の中であるので二人を紹介して、扱て云ふやう、今日来たのは外ではない。吾輩は久しく東海の仙郷に在て大に『天地教』を修めて帰国したが、是れなるが即ち我師『東海の偉人』である。若（し）同じく道の為めに尽さんには『東海の偉人』と茲に問答を試み、勝てるものこそ教主として『上帝会』を統率すること然らん、如何に、との事であった。」

そこで朱九涛はその「東海の偉人」なるものと、先ず道教について、次で禪道から仙術に及び、王朝の事から更に上帝（即ち耶穌教・原注）に就て、三日間にわたって問答した。

「その結果は、『東海の偉人』が「一々実学実行（？）」の上に就て論破したので、朱君遂に屈服し、『上帝会』は『東

海の偉人』に譲（つ）て、朱君は遂に郎山上帝会の根拠地を指すようだ（を）を下（つ）て隠れた」

この話のとき「東海の偉人」が若し日本人であったとすれば、何者であったか、面白い人物が居ったものではないかとの事であった、と石崎はそのときのことを語り、さらに次のようにこの話を勝手に解釈発展させるのである。この話を十年前に友人から聞いたときは、大方は何かの小説にでもあるのだろう位に思っていたが（然し今日まで斯る小説を見たことはないがという）、この亡友の話説が何を根拠にしたものかを「詮議せなんだのを遺憾とする」と、ウソか本当かアイマイなことを根拠に、「只併し吾等は僅に此の談片を記憶し得たことが、本篇の骨子となり得たのを感謝するものである」といい、「何となれば人は大胆といふこと勿れ、吾等は『東海の偉人』こそは我が『大塩先生』であつて、その馮雲山が長崎より同行せる周雲山の仮名であるも

のだと信ずる（傍点は増田）。此の結果は、洪秀全が大塩格之助と言はれることになるものである（傍点は増田）。何という大胆、いい加減な思惟であることか。

「上帝会といふものは斯る伝説のある所へ、専ら茲で修業したと称せられた洪秀全の事に就て、支那の歴史家はどういふ生立の人として居るかといふに、洪秀全は広東花県の人で嘉慶十七年を以て生れたが早く父母に死別れて孤となり、四方に遊学す。天資豪邁、軀幹雄偉、才学ありト身を以て業とす。同郷（の）馮雲山と共に『上帝会』に投じ、其の術を受けて教主となるとあって、幼にして父母には別れ四方に遊学して居たといふので、花県の山中に生れたものであるといつても殆ど誰も知る人としては無いのである」

洪秀全は素性のよく分らない、殆ど誰も知らない人だとする。暗に大塩格之助を、これに当てても、まず差支へないよ

うな論法である。

『平定粵匪紀略』

右にあげた洪秀全を記した部分は、杜文瀾の『平定粵匪記略』（一八巻、附記四卷、同治九年刻本一〇冊。後に『平定粵寇記略』と改題し、やや内容の文章も訂補して光緒元年再刻）の『附記』の「賊名記」に出るところを、大たいそのまま採っている。『粵匪紀略』にはこうある、

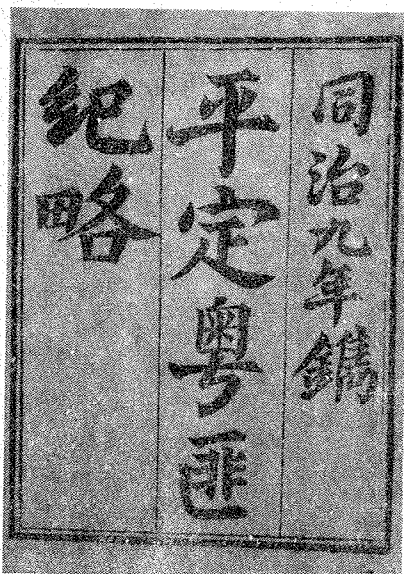
「首逆洪秀全、原籍は広東花県、嘉慶十七年壬申に生まれる。身（『粵寇』には「体状」とする）は痴肥、略字を識る。父は国游、母と均しく早死す。

秀全は欽博無頼（石崎氏は「天資豪邁、軀幹雄偉」という）、演命売トを以て生（活）をなす。是より先、広東の奸民、朱九滄「上帝会」を倡え、秀全及び同色の馮雲山、これに踵（『粵寇』にはこの文字を除く）師す。後に秀全を以て教主と為す。二云」（原漢文、

『粵寇紀略』とは文字に少し異同がある。

『粵匪紀略』は清朝側の著述で、「叛逆者」洪秀全およびその一派を「逆賊」として取り扱っていることはいうまでもない。しかし当時、広東の山村から突如として起った官位もなく（秀全は官生試験の前段階で度々落第した）、名も知られなかつた反乱首謀者であったことから、秀全の近親者以外には、一般にその生立ちのことなど誰にも分らなかつたというのが実情だつたであろう。清軍ではもちろんスパイを出したり、捕虜の口から探索しようとしたのだが、風説程度にすぎず、また情報もまちまちであつた。

『粵匪紀略』は杜文瀾（浙江省、秀水の人）が湖北塩運使のとき湖広総督の官文（旗人、字は秀峰）の命で編纂したもので、清軍の出先機関（討伐軍）からの奏上文書による情報を資料にして作成したものである。しかし討伐軍は敗退が多かつたし、十分に反乱軍各集団の内情を



『平定粵匪紀略』同治9年(1870)版

つかむことが困難であるどころか、多くの自軍を有利に見せる粉飾や捏造が入り混っていることを免れなかった。

石崎氏の説は『粵匪紀略』の記載を原拠とするもので、それを取り次ぐだけであり、秀全の素性も分らないとするのであるが、最近の研究調査では、秀全のことは、その家系、家族関係、少・青年時代のことなども、詳しく知られるようになった。

洪秀全の出身について

とくに洪秀全の族弟（秀全より九才年下）で、少年時代から秀全と親密な関係にあった洪仁玕（後期「太平天国」の最も有力な指導者）が、まだ南京に投じる前、広東方面で伝導していたスウェーデン人宣教師（Theodore Hamburg（韓山文））に保護されていたとき、洪仁玕が彼に語ったこと、彼に渡した文件（メモ）

に基いて書いた英文の *The Vision of Hung-Siu-tsuen and Origin of the Kwang-Si Insurrection*

（一八五四年、香港出版、また『ノース・チャイナ・ヘラルド』誌にも連載された）が出て、後にそれを簡又文によって『太平天国起義記』として中国文に訳されてから、洪秀全の家族関係およびその人となり、初期の行動（馮雲山のことなども）が大たいよく知られるようになった。この『太平天国起義記』は簡又文の『太平天国雜記』第一輯（一九三五年「商務印書館」）に収録されているが、また一八五四年版英文原本のプリントと併載して出版されている（一九三五年「燕京大学図書館」）。なお青木富太郎氏は『洪秀全の幻想』と題して、香港版原本を、簡氏訳『起義記』も参考にしながら（人名・地名など）日本文に訳している（一九四一年「生活社」）。

ここに洪秀全の「幻想」(Vision)としてのものは、中国では「異夢」と訳してこ

るが、洪秀全が一種の神がかり状態になったということ、このことについて少しふれておきたい。洪秀全は道光一七年（一八三七年）広州で三度目の試験に失敗したとき、急に病気になる（落第のショックのためというものもある）、轎を雇って故郷に帰られて帰り、四〇日間も人事不省で病臥した。この間一種の異常な精神錯乱に陥り、天上に昇って金髪黒袍の老人から啓示をうけて、悪魔と戦い、邪神を駆逐したとか、天命を受けて王者になったとか、いろいろ父や兄に口走るので、父や兄は悪霊にとりつかれたものとして、祈祷師を招んで悪霊払いをしたり、また医者を呼んで治療してもらったが、何の効果もなかった。だが約四〇日たって、急にそのような精神異常が治癒し、常人に復した。その後、かつて広州の街頭で宣教中の梁発というものから配布され、久しく篋底に蔵していた『勸世良言』をたまたま読んだ。そこには先年大病のとき、異常精神の世界で見

聞いたことと符合するものが多いことを見出し、ついにキリスト教（新教）に帰依し、人々にも伝導するようになったというのである。このときの異常な錯乱精神の経験について Wilson としている『起義記』に書かれている。

簡又文はまた一九三五年の末、洪秀全の故郷（花県官禄埭）を訪ね、洪家の宗譜（一族の家系譜）なども見せてもらい、その地で調査した種々の史実の報告『遊洪秀全故郷所得的太平天国新史料』（一九三六年『逸経』第二期）を発表したが、同時に写真も多くとっている。これとは別に羅香林も一九三六年春、洪秀全の故郷を訪ねて調査し、主として家系問題について『太平天国洪天王家世放』（一九三七年『広州学報』第一卷第二期）を書いた。以上の報告によって、風説（あるいは清軍側の情報）による冒姓などの事実はなく、洪家の出身であり、その先祖は（詳しいことは前記の報告書にあり）嘉應州（今の梅県）から移住してきた一

族（客家）で、山村の僻地を開墾して、農業と牧畜を生業としていたのである。

なお太平天国研究の専門家たちの単行著書についていえば、郭廷以の『太平天国史事日記』（一九四六年「商務印書館」）、羅爾綱の『太平天国史稿』増訂本（一九五七年「中華書店」）、簡又文の『清史洪秀全載記』増訂本（一九六七年「簡氏猛进書局」）等にも洪秀全の出身に関して、諸史料をもとに大たいのことは書かれている。とくに簡又文の巨著『太平天国全史』三冊、二三一—一八頁（一九六二年「簡氏猛进書局」）の上冊第一章『天王洪秀全之出身』（四三頁に及ぶ）は史料を広く採って考証し、また自ら秀全の出身地を踏査し、同族や故老からの聞き書きを加えて書かれ、最も詳しい。

いま特徴的なことを簡単にあげると、秀全は一八一四年に生まれた。父は鏡揚、祖父は国游、長兄は仁発、次兄は仁達。一八才で村塾の教師をし、その後、三回も省城に出て秀才試験をうけて落第した。

そのとき広州の街頭でキリスト教の伝導師から『勸世良言』（この書はいま中国には見当らず、米國ハーバード大学所蔵の広州刊本によつて一九六五年、台湾「学生書局」から影印出版された。そして巻首に鄧嗣禹の『勸世良言与太平天国革命之關係』と題する長文の解説がある）という宣教書を配布され、以後この書の手引きでキリスト教に入り、洗礼はうけなかつたという。同郷の友人、馮雲山と「拜

上帝会」を結成し、宣教活動をはじめたという。この書は英人宣教師モリソンが広州に設立した『倫敦会』（「ロンドン・ミッショナリー・ソサイティー」の分会）で洗礼をうけ、モリソンの伝導を助けた広東人、梁発（梁阿発）の書いた布教書の一つであった。
『粵匪紀略』から採つた日本の洪秀全像
当時の清廷側の諸書を根拠に書かれた

太平天国起義記

一 洪氏の世系

洪氏世系遠出于孫朝、時為豫徽二宗之聖、約在十二世紀之始。兩宗既為宋人擄去、有洪師者、官房台稱、或子忠節、躬身赴險、以爲愛庶之主服務。僅與一人同行、共討此險。既抵北嶺、天氣奇寒、復被凍死於海無人煙之野林外。此時衣服食料俱不足以供二人生活之所需。同行者乃慷慨獻議、犧牲一己之身命以救洪、義予以糗糧衣物、使其得以繼續行動、而自已則甘留而葬身子野林中。洪未幾困苦殊甚、輒盡則食野樹根以苟延殘喘。途人見其久而未死、頗以爲奇、幸得之南歸。……

洪仁玕述
韓又文譯
韓又文著
韓山文著

『太平天国起義記』(簡又文訳)

わが国の明治初期・中期の中国史、乃至清朝史は、大たい『粵匪紀略』などを主な材料としたものだから、例えば佐藤楚材（牧山）の『清朝史略』（一二冊、明治一四年）巻八には、
「秀全は原籍広平（東）花県の人、年四十余、長鬚蜂目（ここはちがふが、面黧く、身は痴肥、略字を識る。父の名は国游、母と均しく早死す。素より飲博無頼、演卜を以て江湖の間に遊ぶ。（中略、ここには『盾鼻隨聞録』から採つた字句を入れている、後述す）是より先、奸民朱九涛あり、上帝会の邪教を倡ふ。亦の名は三点会（三点会は「天地会」の同系一派・増田）。秀全及び同邑の馮雲山これを師とす。旋ち秀全を以て教主となす。云云」（原漢文）
これは『粵匪紀略』をそのまま採つてきたものである。
石村貞一・河野通之共編の『最近支那史』四冊（明治三二年）巻之三下には、

501 (口)

「秀全は廣東花県の人、略字を識る。トを演じて業と為す。是より先、奸民朱九濤、上帝会を倡ふ。秀全、同邑の馮雲山とともに往きてこれを師とし、その術を以てて広西に遊び、鵬化山に居る、云云」(原漢文)

これも『粵匪紀略』をそのまま採つて
いる。

曾根俊虎の『清国近世乱誌』洋装活字本二四二頁(明治一二年「日就社」)はわが国人の書いた最早の「太平天国史」(副島種臣校閲)といふべきものであるが、その「例言」のはじめに、

「遺書ハ『清史要』、『元明清史略』其他我国当時上梓ノ諸書ト聊カ異ナル所アリ。是則(チ)序文ニ誌ルセシ如ク、独(リ)清国ノ書ニ限ラズ、博ク外国人の記事ト実地ノ聞見トニ拠テ編スレバナリ」

といっているが、洪秀全の出身については大たい『粵匪紀略』の記載をそのままとっている。

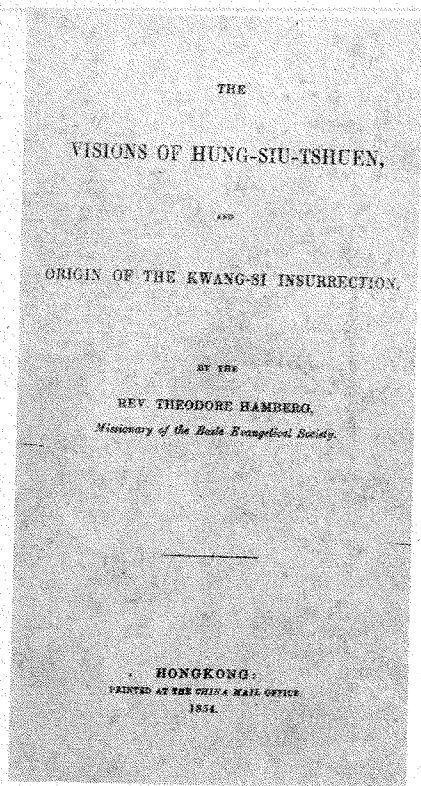
「其人(洪秀全)身幹長大ニシテ雄姿アリ、豪邁ニシテ博學、嘉慶十七年、廣東ノ花県ニ生レ、夙ニ父母ニ別レ、貧苦困學、四方ニ流落シ、其間同志ニ結び、時ニ演トヲ以テ江湖ノ間ニ遊ブ、是ヨリ先、広東ノ人、朱九濤ト云フ者アリ、上帝ノ教ヲ唱フ、秀全及ビ同邑ノ馮雲山等之ヲ師トス、九濤死シテ後、其徒皆秀全ヲ推シテ教主ト為ス」

石崎氏はこれらの明治初期あるいは中期にわが国で書かれた中国史及至清朝史を利用したのか、あるいは直接、杜文瀾の『粵匪紀略』から採つたのかを詳かにしないが、先に引用したように洪秀全のことを述べた後に、

「太平天国建設者たる洪秀全の生れは以上の如く広東花県の人というだけで、何人も其素性を知るものがなく、長髪異容の風俗で飄然馮雲山と売トを以て今茲に流れ渡つた。彼の生れた嘉慶十七年は我が文化九年で、大塩革命の時が丁度二十六に當つて居る。されば格

之助とは同年である。同年であるから同人だとは勿論言はれないが、飄然広東に売トを以て流れ來つた長髪異容の浪人は此の時代此地方に多数あるものではない。是れが『天地会』の亡命者(周雲山)と東海の仙郷から其の師と共に來たといふ伝説と綜合すると、時代、人物、誠に大塩先生父子とするに適當であらねばならぬ。」(傍点は増田) 何ともいい加減な粗雑な思考方法であり、驚くべき頭腦である。

そして洪秀全は中国書では広東花県の人といっているが、洪秀全すなわち大塩格之助だと信じる石崎氏はそれを否定して、「ヤハリ鴉片戦争を避けて福州方面より売トを以て三人(大塩父子と周雲山)が広東に漂着し、『上帝会』を乗取つたのが事実であつう」とする。また「上帝会」について石崎氏は勝手な解釈を加えて次のようにいう。



英文『洪秀全の幻想および広西反乱の起源』
1854年・香港版

「天地会」「上帝会」と朱九涛

「上帝会は道教を基礎として之れに耶蘇教を附け加へた位のもので、極めて浅薄なものであったので、之を根拠あるものとすべく、周雲山が大塩先生を迎へたのだ。大塩先生は陽明学を奉じたものであるが、其の修養に至つては道教に通じ、禅学に精しく、耶蘇教（切支丹・原注）には最も精通した人であ

るから、其の教義の問答に於て朱九涛に勝つたのは言ふまでもないが、それがために上帝会の教主たるべき望はなかつたに相違ない。併し時代、人情全く変化したる此の場合に教導すべき方は道教であるか経学であるか宗教であるかを見た先生は、上帝会を全耶蘇教（？）として伝導することを格之助の洪秀全、及び周秀才の馮雲山に許したと共に、その教法を伝えたのは慥か

である。う。」（傍点は増田）

朱九涛が当時、「天地会」の一頭目であつたことは、清軍出先討伐軍の奏上文中で知られるが、「天地会」とキリスト教主義の「上帝会」とは性質がちがうのだから、「天地会」を創立した（？）という朱九涛が「上帝会」を新に組織したといふのはオカシイわけで、これは伝説にすぎないといえよう。「天地会」（「三省会」「三合会」など組織の名称の変更もあつた）そのものは明滅亡後に「復明」という民族主義思想によつて結ばれた南方の反清的（反官的）秘密組織であり、その首唱者は鄭成功だともいわれるが（陶成章『教会源流考』——一九四二年、羅爾網編『天地会文献録』所収）、しかし、元来が秘密組織のことではあるし、また各地に分派的組織（それぞれに頭目があり、また名称も異にした）があつて、いろいろの説が各種史料に見えるが、石崎氏のいうように「天地会」が清末の道光初年に朱九涛によつて創始されたという

501②

のは、何を根拠にいうのか計りかねる。この、陶成章は魯迅と同郷の友人で、清末の革命団体「光復会」を牛耳った活動家で、当時、秘密組織の「天地会」にも関係したというから、その内情もかなりよく知っていたようだ。ただ彼は辛亥革命の直後、指導権争いで主流派(?)に暗殺された。

「天地会」の起源については種々の説(鄭成功の死後、康熙の時代に始まるとか、雍正の頃とか)があるが、各種の史料(ロンドン博物館所蔵の中国文件などにも)に当って、かなり詳しく研究したものに、蕭一山の『天地会起源考』(一九三五年「国立北平研究院総弁事処出版課」発行『近代秘密社会史料』巻一所収)がある。しかし確定的な創始年代の結論は出されていない。大たい康熙か雍正ごろと推定されるようだ。ただ反清組織として出発したものの、各地に散在し、それぞれ頭目がいいて、中に匪賊化した集団もあったようだ。そして「太平天国」軍

蜂起のときは、「反清」の点で聯合したものが多くあったが、組織力の弱い集団では清軍に買収されたものもあったようだ。羅爾綱の『太平天国与天地会關係考実』(一九五五年「三聯書店」出版、『太平天国史事考』所収)は各地での両者の關係などいろいろな場合をあげて詳しく論考している。

朱九涛については、私の見たものでは謝興堯の『老萬山与朱九涛考』(一九三八年『太平天国叢書十三種』第一集所収)や羅爾綱の『朱九涛考』(一九五五年三聯書店『太平天国史記載訂謬集』所収)がある。後者は『粵匪紀略』の記載を取りあげて、洪秀全と朱九涛とは、それぞれ「拜上帝会」「天地会」と、別の首領であって關係がなかったこと、どうして洪秀全が朱九涛に師事するというような記載を『粵匪紀略』が取りあげたか、その間違いの根拠を具体的に論じている。その要点は朱九涛が「太平王」と称したという俘虜(太平軍側)の口供を、出先

機関の一部が清政府へ報告したためであるとしている。羅爾綱のこの論考は各種、出先清軍からの報告を分析検討して、綿密な方法に依っている。なお朱九涛は仮名で、その本名は邱昌道であることも考証している。また咸豐元年(太平天国元年、一八五一年)に朱九涛の組織中枢は湖南省で破壊され、清政府は九涛を捕えることを出先軍に命じるが、咸豐五年(太平天国五年、一八五五年)に湖南省(郴州)で捕えられたことを、出先からの各報告書に拠って記している。

『粵匪紀略』とはちがう洪秀全像

明治初期にわが国で書かれた中国史のうち、『粵匪紀略』の記載とは別に、洪秀全は洪徳元(朱九涛ではなく)の後を以て教主になったとするものもある。増田貢の『清史要』六卷(明治一〇年)巻之四に、

「洪秀全は広東花県の人、年四十余、

略あり、略字を識る。その姓を知らず。前に会教（添丁教会）に入る。徳元（前文に「もと添丁会なるものあり、教主を洪徳元という」とあり）死するに及び、洪姓を冒し、代りて教主となる。また天主教に附して、自ら耶穌の弟、天父（耶）^{ホバ}火華の第二子と称す、云云」（原漢文）

同じく増田貢の『滿清史略』二卷（明治一三年）も洪秀全については殆ど同じく記されている。

石村貞一編『元明清史略』五冊（明治一〇年）卷之五に、

「洪秀全は広東花県の人、年四十余、長鬚蜂目、面濶く、身肥り、略字を識る。その姓を知らず、前に教会（添丁教会）に入る。徳元（前文に同じく、「もと添丁会なるものあり、教主を洪徳元という」とある）死するに及び、洪姓を冒し、代りて教主となる。また天主教に附して、自ら耶穌の弟、天父（耶）火華の第二子と称す、云云」（原

漢文）

「両書とも大たい同文だが、『粵匪紀略』に拠ると考えられる前記の『清朝史略』や『最近支那史』とちがうところは、朱九海でなく、洪徳元の後を受けついで洪秀全が（洪姓も受けついで）教主になったというところである。また「天地会」あるいは「上帝会」ではなく「添丁会」とあるが、これは「天地会」の地方的訛音と考えるべきだ。

右の両書に書かれている洪徳元と洪秀全との教首交代のこと、およびその前後の叙述文章は『粵匪紀略』にも附記三『逆蹟記』に伝聞としてちよつと記すが、別のソースから出たものと見られる。

これらが拠つた原本は構園退叟編『盾鼻随聞録』であると考えられる。構園退叟とは太平軍と交戦した清軍陣営で書記をしていた（「宮に随ひ、文案を襄辨し、五省を駆馳す云々」と例言にいう）汪莖の仮名とされるが、この『盾鼻随聞録』は文久二年、「千歳丸」で上海に渡航し

た高杉晋作、中牟田倉之助等の一行が同地で写本をとってきたものの中にあるが、恐らくわが国に『盾鼻随聞録』が伝えられたのはこのときがはじめてではあるまいか。いま『岩瀬文庫図書目録』（『岩瀬文庫』は愛知県西尾市にある）にこの書の文久甲子（一八六四年）写本二冊が登記されている。はじめ写本で知られ、維新前後に（出版記年はない）訓点翻刻されたものと思われるが、上、中、下の三冊本がわが国で出版されている。この『盾鼻随聞録』については次に述べたい。

（ 筆者は中国文学者
ますた わたる ）

★お詫び

『書評』三九号を二月に発行することになってしまいました。連続講演会の準備に忙殺されたとはいえ、大幅に遅延したことを、読者の皆さんに深くお詫びします。この間の『書評』誌発行の遅れとともに、現在編集委員会・事務局で討論をおこなっています。次号では、今年度の総話を掲載します。

★八投稿規定の改訂についてVの訂正

三八号七〇ページでお知らせした「原

稿用紙」の規定の中で「原稿用紙の規定

は一行一八字でしたが、これを一行二〇字に改訂します」とありますが、これは今までどおり一行一八字のあやまりです。また「原稿枚数も、四〇〇字詰原稿用紙を……」の部分は四〇〇字詰原稿用紙とともに二〇〇字詰原稿用紙で投稿をお願いします。

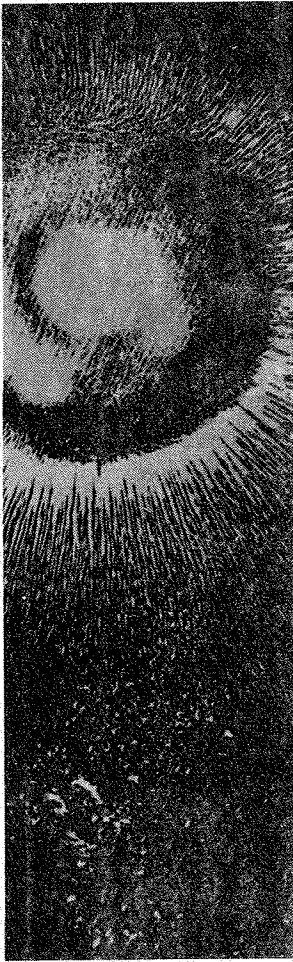
投稿を歓迎しますのでどしどし投稿して下さい。詳しくは三八号七〇ページを参考にして下さい。

★事務局員募集

私たち事務局は、現在の力量と人数では、思うような活動ができません。書評運動の発展のためには、読者諸氏の積極的な参加と、編集に協力してくれる事務局員を必要としています。詳しくは三七号六九ページを参考して下さい。

★お知らせ

さる一〇月二一日と二九日の間、生協市実行委と書評編集委が主催した連続講演会の記録を臨時増刊号として発行する予定です。読者諸氏からの講演内容に関する意見を募集します。



アサヒカメラ・増刊4より

書評編集委員会

七四年度活動の総括

七四年度の書評運動——その中心としての書評誌の編集・発行活動は、『日常生活の再確認』を年間テーマに設定し、これを各号の編集企画の中に具体化してゆくことを指針として出発した。このテーマの設定は、現実を現実として把握できない観念的・抽象的な思想のあり方を排して、われわれ自身の生活過程から思想の作業を進め、そこにおける現実としての支配構造を意識化し、批判してゆくことを意図したものであった。

しかしこのテーマのもつ意図は、理念としては確認されていながらも、実践としての企画・編集過程では、それを十分に具体化し、意識化の作業としてそれを実現することはできなかった。

三五号の『日常生活批判』・三六号の『家族・共同体』・三七号の『価値観の崩壊』は、企画の構成そのものが、われ

われが現在強いられている生活に内在する問題を根源的に把え切ることができず、結果として「支配構造」を表面的・一面的に描き出すこととなり、十分な批判とはなりえなかった。

したがって第一に、われわれ編集委員会は、不断の学習活動を通じて、現実をより根源的に把握する作業を進めなければならなかった。もちろん、企画作製に關しては常に内部での討論が前提され、それを通して個々に学習活動を進めていたが、しかしより深い認識を獲得する作業が必要であった。

また、「モチーフ」案出↓それに「関連」する書物のプラグマチックな選出↓その「書評」作業 という編集形式は、各執筆者の力量を書物そのものの解説としての書評に限定してしまふ傾向をもち、また、書物を媒介することによって、問

題構成は現実から出発しながらも結局は、書物そのものが考察の主要な対象となつてしまい、結果として、「モチーフ」を十分に追求できない傾向をもっていた。

ゆえに、書評編集委員会自身が学習活動を通じて、現実をより深く把握し、そこから問題を構成してゆくとともに、他方で、この問題を現実の中へ鋭く提起してゆく直接的な表現形式の創出をめざした作業が必要であった。

われわれはこの作業を、金石範講演会および生協市連続講演会への取り組みを通じて進め、また本号の編集過程を通じて進めてきた。

本号の企画・編集は、われわれの文化・思想運動の発展をめざした作業の段階的到達点であり、われわれは本号の到達点を基盤として、来年度の書評運動の発展へ向けたさらなる方針の点検・課題の明確化を進めてゆきたい。

編集後記

今年度のわれわれの運動も、度重なる屈折を経て、ようやく本号の発行をもって一応、しめくくることができるようになりました。

この間のわれわれは、△書評▽を基軸とした運動理念の再検討、また組織としての書評編集委員会のあり方などをめぐって何度となく動揺し、あるいは講演会活動に力量を費し過ぎて本誌の発行を大幅に遅らせ、また二度の休刊など読者の皆様に御迷惑をかけました。しかしこの過程を通じて広範な文化運動への展望を切り開くことができました。また、月刊定期刊行はあくまでも原則として堅持するに努めるつもりです。

苦しい一年でしたが、幾度となく交された論争で、それぞれ自己の運動に対する姿勢を検証し、より充実した編集部に発展することができたようです。技術的にも向上しました。

七五年度は、この一年で培われた力量と技術を存分に發揮して、本誌の定期刊行と講演会活動などを通じて、書評運動をより強力な、広範な文化・思想運動に発展させてゆくつもりです。より深く現実を見据えてより根源的な問題提起を行うこと——これが来年度の書評運動へ向けたわれわれの一つの指針です。

なお、七五年度四月号（第40号）より書評誌のサイズを再度B5版に戻し、レイアウトを多様にし、写真・カットなども多く使って誌面をユニークにするとともに、読み易くすることに努めたいと思います。乞御期待！



「プロレタリア階級の歌」より

1月号・通巻 第39号

編集 「書評」編集委員会

発行 関西大学生生活協同組合組織部

大阪工業大学消費生活協同組合書籍部

連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎388-1121 内線 776)

頒 価 150円